山嶽寮

甲南山岳会通信第６６号　　２０１１年１０月

甲南山岳部・甲南山岳会

山嶽寮　甲南山岳会通信 ６６号　目　次 2011年10月

追　悼

佐野ゲン時代の早稲田と甲南山岳部　伊藤文三・・・1

高校時代から長い付き合いだった「山本先生の想い出」　田邉　潤・・・3

山本三郎先生との出会いと想い出　廣瀬健三・・・6

論　考

本と山のあれこれ　雨宮宏光・・・8

ダージリン・シッキム・シムラを訪ねて　越田和男・・・23

ヒマラヤの青い空、白く輝く秀峰群に魅せられて　佐野方則・・・32

随　想

共に訪ねた思い出の山々　赤松恵美子・・・37

図書紹介

平井一正著『わが登山人生』私家版(2010年)　越田和男・・・41

『裸の山―ナンガ・パルバート』ラインホルト・メスナー著　平井吉夫訳　越田和男・・・42

会員短信

＊秋の集会 への出欠はがきから　・・・・・・・・・43

＊総会・慰霊祭への出欠はがきから　・・・・・・・・・51

ホームページ(掲示板)から

＊訃　報　・・・・・・・・・57

＊山行・旅行　・・・・・・・・・61

＊文化・書籍　・・・・・・・・・82

報　告

＊甲南高校　・・・・・・・・・94

＊秋の集会　木曽福島　・・・・・・・・・98

＊春の総会　・・・・・・・・・99

＊慰霊祭　・・・・・・・・・101

＝追悼＝　　佐野ゲン時代の早稲田と甲南山岳部

伊藤文三（昭和１５年旧文）

2010年5月20日に、佐野源一氏（昭１０文）が亡くなり、甲南山岳会ホームページの掲示板に、越田和男、廣瀬健三、雨宮宏光、大森雅宏、平井吉夫の諸氏が追悼の言葉を投稿しておられ、それが『山嶽寮』（65号 2010年）に転載されていました。皆さん佐野源一氏よりずっと若く、佐野氏と同世代の小生、ホームページと無縁（ＩＴ音痴で、パソコン、携帯も持っておらず、ホームページも見たことないという化石人間）だからと、うそぶいているわけにもゆかず、筆を執った次第です。

昭和ひと桁時代、佐野ゲンとは甲南に短期間だが同時に在籍したわけですが、山へ連れて行ってもらった記憶は全くない。ずっと上級生に拘らず、佐野ゲン、佐野ゲンと呼んでいたことははっきり憶えています。

佐野ゲンは旧制甲南高校卒業前、早稲田大学予科に転校、山岳部にはいると、その雰囲気があまりにも違うのでびっくりされたらしい。その時の様子を以前次にように書いておられます。「高等科１年の夏、尋常科の人達と岡本先生のお供をして上高地に行き始めて日本アルプスを経験し、それが契機で山岳部に入ったようなものだが、当時山岳部では下級生が上級生をアダナや愛称で呼ぶのは当たり前の事だった。否山岳部に限らず他所の中学から高等科に入った人は兎も角、尋常科出身の全部がそんな雰囲気だったと思う。僕も他所の中学から来た柔道部の２，３年先輩の某氏をアダナで呼んで生意気だと怒らせ、会う度に追っかけ回された記憶がある。そんな環境のもとにいた僕が間もなく早稲田に転じ山岳部に入ると、上級生、下級生の間には厳然とした区別があり、上級生をアダナで呼ぶなどはもっての外、「さん」づけで呼ばなくてはいけないし、１年ぐらいの上級生には兎も角も２年も違うと敬語を使うという具合だったので、最初は大分戸惑ったものである。然しそのうち慣れていまって、こっちが上級生になると、「さん」づけで呼ばれ敬語を使われてもなんとも思わなくなっていったのだが、そんな頃、

乗鞍冷泉で合宿した事があり、たまたま同時期に甲南が合宿していて、ノンキ（伊藤文三君）達を驚かした次第であった」（『山嶽寮』５５号 2,000年）

ここで、なんでノンキ・小生が出てきたか。それは、小生が『山嶽寮』に書いたものを佐野ゲンが読んでおられたからで、以下それを再記します。

「初めて、スキーをはいたのが、（尋常科）１年の時の鈴蘭小屋で、一般募集のものでしたが、３年になって、始めて山岳部の冷泉小屋スキー合宿に参加しました。この冷泉小屋に早稲田大学の山岳部の連中がいました。こちらは中学３年、まだ子供ですが、向こうは大学生と予科生でおっさん、そこに佐野ゲン（高等科の時早稲田に転校された佐野源一氏）がいたのですね。われわれは気安く、サノゲンと呼んでいましたが、彼は早稲田大学山岳部の上級生で、

我々から見ればおっさんから、佐野さん、佐野さんと奉られていたのを未だによく覚えています。

・・・NHKのクローズアップ現代という番組で、大学運動部員の減少を取り上げていました。高校時代サッカー部員として活躍し、大学入学と　　同時にサッカー部に籍をおいたが、上級生が煙草を口にもっていくと、下級生がさっとライターで火をつけた。こんなホステスみたいなことできるかと嫌気がさし辞めてしまい、いろんな大学で同じ思いをした連中を集めて、サッカー部を作ったとか・・・欧米からスポーツが我が国に入ってきたとき、本来欧米でおこなわれていたスポーツの目的から離れて、学校教育の一環として受けいれられた、と。

管理教育が盛んになるにしたがって、スポーツ、運動部、体育部の果たす役割も重んぜられるようになってきたんですが、甲南山岳部は、運動部にはいるんでしょうが、所謂運動部的雰囲気はあまりなく、管理の御本尊・生徒課から寧ろにらまれる存在だったですね。そして、上級生は威張っているというより、下級生の面倒見がよく、下級生は大きな顔をして、上級生であろうと、アダナで呼んでいたんですね。
そこで冷泉小屋スキー合宿のサノゲンとなったわけです。」(『山嶽寮』50 号 1995 年)

佐野ゲンさんは、戦後 11 年間もの長きに渡ってソ連に抑留されたのですが、それを「シベリヤ抑留の思い出」と題して『山嶽寮』(42 号 1986 年) に書かれました。30 年から 40 年も前の話なので記憶に不確かなところありとありますが、どうしてどうして、軍隊経験のある小生、断片的にいろいろ記憶あるものの、あんなにちゃんと記憶しておられたとは、驚きを越してただただ尊敬してしまいました。日本現代史上貴重な文献というべきと思います。

目次

＝追悼＝

高校時代から長い付き合いだった「山本先生の想い出」

田　邉　潤（昭和34年経卒）

「ガチャ！ 一本くれっ」前穂高の頂上である。

高校 2 年生の私にタバコをねだる先生であった。丁度、誰かが記念写真を取ってくれると言うので、火のついたタバコを持っている手を股の下に隠した。そんな写真が私の手元に残っている。学校からの付添監督官として私共高校山岳部の夏の涸沢合宿に付き添ってくださっている山本先生に後々ご迷惑がかからないようにとの私の配慮である。

昭和 28 年前穂頂上にて

上段左から福永（兄）、平井、

前列左から柳沢、田辺、山本先生、阿部

この夏山合宿に行く前から私の喫煙をどうすれば先生にバレずに吸えるかを私は悩んでいたのです。山本先生だけでなく今夏山合宿には国語の高田先生も同行くださるというので、二名もの先生に隠れてタバコを吸うことは恐らく至難の技であろうと予測していたからです。

昭和 20 年代後半の交通事情の悪さから大阪駅で数時間改札の前に並び、名古屋で中央線に乗るためにまた数時間並び、翌早朝に松本に到着、一番の松本電鉄に乗って島々へ。もうその頃は木炭バスではなくなっていたと思うがガソリンバスで上高地へ。上高地に着いたのが昼過ぎになっていたと記憶する。やっとこさ着いた、と言う感じで 五千尺旅館で休憩となった。やっとこさ着いた、いうことになるとタバコが吸いたくなるもの。ふと見ると、山本先生と高田先生が並んで座っておられる。今だ！ このチャンスを逃してなるものかと、「先生、僕タバコ吸います」と直立で申し上げたところ、お二人は私の顔をじっと見据えられて、山本先生が「お前じゃ仕方ない」と言われ高田先生は黙っておられたものの、高校生ながら喫煙公認となったしだいです。

公認となったおかげで、冒頭のようにずいぶんタバコを召し上げられました。でも、ガイ(木全)の小窓尾根での遭難事件で、残されたキャンプの整理をしてバブ、デカとゾロメキから雨の中をボッカして上市の中島旅館へ帰ってきたら、先生が「おいガチャ、新しいタバコが出たで」と「新生」だったか「いこい」だったかは忘れましたが発売されたばかりの新しい一箱をくださいました。

高校時代を通じて「合宿」につき添っていただく山本先生の最も良かった点は、勿論「喫煙」を公認いただいたこともありますが、合宿キャンプの設営を実に精力的に手伝ってくださったことです。夏山であろうと雪山であろうと、合宿地に着いたら、まずテントの設営から始まります。特に雪山では斜面にキャンプサイトの切り出しと踏み固め、そしてテントの幕営と風雪除けの雪壁の設置が最初の仕事になります。春山を杓子尾根から杓子岳を目指した時に、それを角スコで実に精力的に小日向のコルで手伝ってくださいました。「先生、なんでそんなに旨くスコップが使えるんですか?」「わしは小さい時からこんなことには慣れとるんや」と雪国育ちらしい返事がかえってきました。冷たいところもある先生でしたが、スキーも旨く、岩場でもビビらず、足手まといにならないどころか、かえって役に立つと言う付添監督官でした。中高生にとっては結構なヤバ場である前穂の北尾根でも「怖いのう」と言いながら結局はさっさと登られた先生、それが冒頭の前穂高の頂上でありました。

杓子の小日向コルへ登るのに XX 小屋でのこと、荷揚げのために細野から猿倉小屋へ何度か通った。毎食、カンパンの主食に食いあきて、アルマイトの食器にカンパンを入れ薪ストーブの上で炒って、砂糖をまぶしてフォークでカラカラ混ぜつつ Y 談で談笑しながら先生とも食ったのが懐かしい想い出です。でも我々の Y 談に乗ってこられることはありませんでした。「女房は病気がちでなぁ」と言われたのが印象的でした。

一番新しい想い出は、現役の一人がどうも遭難したらしいとのニュースが当時の会長であった牧野君から入りました。これはえらいこっちゃ、OB としてどないしようというので、柏兄と牧野君と私の三人が先生の自宅に集まり、救援のためのメンバーや金の算段をしたことがあります。その後入って来るニュースがどうも誤報のようだ、と言うことが判り結局奥様から夕食のごちそうを頂き、あとは言うまでもなく麻雀となったこともあります。

OB 六月例会の新穂高温泉は中尾平集会で、山本先生の追悼文は私に書くようにとの発案がありました。
まあ、私に御鉢が回ってくるのであろうとは何となく予想はしておりましたが、私には歯が浮くような美文、追悼文はとても書けません。先生と言うよりも友人にも近い、

想い出を綴るだけでも精一杯です。

昨平成22年の4月の山岳会総会で、遅れて行った端っこの私の席の前に、赤ら顔のお爺さんが一人おられて、見たことないお爺さんやなぁーいったい誰やろう？　とずっと気になっていたのですが、会が終わって、ばったりとそのお爺さんと顔が合いました。「なんや、私の前にいたのは山本先生やったんですか」「そうや、元気か？」「少し暇になって総会にも出てこれるようになりました。また麻雀でもしましょ」「ふうん」。いつもなら「いつや」と言う返事が返ってくるところだが、生返事とは、先生も矢張りお年で弱っておられるんだなぁと感じた次第でありました。

その11月、越田君達4人と私の5人でインドの北東端のシッキム地方を旅行中に、「山本先生が亡くなられた」との情報がコッシンの携帯電話を通じて入って来ました。「ああ、やっぱり」というのが実感でした。帰ったら、「お見舞い文とご香典」をお送りしようと考えていながら、どちらも果たせておりません。なんとなく億劫だったからです。先生にもう一つお願い、「失礼お許しください」と。

まぁこっちも天界へ行くのに、そんなに遠い話やない、お会いしてお詫びしよう。いろいろお世話になりました。人一倍余分な授業料を払った高校時代の先生の中で、山本先生とのお付き合いが最も心に残っております。心よりご冥福をお祈りいたします。天界で、また吸っておられたら一緒にふかしましょう。

目次

＝追悼＝

山本三郎先生との出会いと想い出

広　瀬　健　三（昭和36年経卒）

先生が甲南中学／高校に赴任されたのは、同期の平井・牧野．越田と小生達が甲南中学に入学した昭和２６年（１９５１年）の春の事、（当年　甲南大学開校）甲南と言う学校がどんなところか何の興味も無く通いだした訳ですが（母親がどうしても入学させたかった）同じ年の４月に甲南に来られた先生との想い出は、我々の中学時代からのそれと同時進行の形で、次々と思い出されます。

上下共白の体操服姿で、ホイッスルを首にかけ、颯爽とグランドに登場さた姿が目に浮かびます。兵庫県立星陵高校から保健体育担当教員として来られました。体育の時間は専らラグビーで、一クラスを二チームに分けての試合ばかりでしたが、好きな運動の一つに成りました。（当時の少年のスポーツと言えば、なんと言っても野球、跳ね方が不規則なボールを追う、時には猛然とタックル、肉弾相打つラグビーなど全く知らずでしたが、新鮮な発見でした。）
或る時、何故ラグビーだったのでしょうかとお聞きしたら、独特の語り口で“”戦後まもなくで、スポーツ用具が不足していた時、ラクビーボールが転がって居るのを見つけたのがキッカケや、それと子供たちを走らせておいて、自分は笛を吹くだけで楽やったもん。“”とあのイタズラッポイ表情を崩して言っておられました。

山岳部の顧問に成って頂いた経緯は、忘れましたが（同時に陸上競技部顧問もされた）、御参加戴いた幾多の厳しい北アルプスでの合宿は、小生達にとっても苦しくも、今となってはこれも楽しくフラシュバックしてまいります。以下は御一緒した特に忘れられない山行きです。
先ず第一はＳ２７年（１９５２年）夏の涸沢合宿：垂水にお住まいだったので国鉄須磨駅で同期の中学二年の塩田邦博兄と先生と落ち合い、出発しました。これが小生にとり甲南高校．中学山岳部部員としての初合宿。（涸沢をベースとした穂高連峰登攀を対象とした定着合宿）

1952年上高地（涸沢合宿）
右:山本先生　左:塩田会員

明けて中学三年春の白馬小日向のコル合宿。これは子供の頃の山登りとしては相当厳しかったです。

涸沢：Ｓ２７年（１９５２年７月）：先生と塩田は地下足袋、自分は何故かバスケットシューズ。其の時の写真を見ると、今では想像できない姿、街では何をする人と思われた事でしょう。小生は盲腸炎に罹り、七転八倒、涸沢では寒くて痛くて泣いていました。其の時、優しいおん馬さんコト麻畠先輩が高級な寝袋を使わせて呉れました。毛布を封筒上にした粗末な簡易寝袋で震えていたので、本当に先輩が恵みの神に思えてたのです。本件の御礼を申し上げていないかも知れません。御容赦下さい。結局早めの下山に成る訳ですが、此の時、確か先生に付き添って貰って帰る事に成った筈です。

Ｓ２９年（１９５４年）の杓子岳双子尾根小日向のコルでの合宿では部員達に混じって一緒に黙々とボッカされ、テント設営も進んで携われました。先生は此の合宿で酷い雪目に罹られました。帰りの汽車の中でもズウツト手拭を目に当て随分と辛そうな御様子だったので、心配だったです。

あの日の事、そして剣道の事なども、モットお聞きしたい事が山ほど有りましたが、まさかの急なる御逝去で果たせず、残念至極です。在りし日のお姿を思い出しつつ、此の拙文を認めています。謹んで御冥福をお祈り致します。合掌

1954 年猿倉へ向かう
（杓子岳双子尾根小日向コル合宿）
最後尾が山本先生

目次

本と山のあれこれ

雨 宮 宏 光 （昭和33年経卒）

第一章　剽窃の本

『日本風景論』 ～ 登山黎明期のバイブル ～

志賀重昂著　政教社 1894 刊

『日本風景論』を剽窃の本とする事にためらいを感じたが、普通に考えたとき他人の本の写しだから剽窃とした。

この本が上梓された明治の時代は「文明開化」— つまり西洋のものをどんどん持ってきて和訳し刊行する。著作権という概念もなく「翻訳すなわち作品」として世にまかり通ったのです。

『日本風景論』に「タネ本アリ」と執拗に調べあげ、種本がＦ・ガルトン（英・1822～1911）の『旅行術』「注 1」であったことを突き止めた経緯は—『登山の黎明』～日本風景論の謎を追って～ 黒岩健著（ペリカン社・1979）に詳しい。

『旅行術』の目次の一部に「・・・・・ 装備、渡渉と橋、露営小屋、寝ぶくろ、天幕、火、食物 ・・・・・（以下 31 項目 略）」とあり、志賀重昂の登山思想の核心は、ことごとくが『旅行術』からの剽窃的翻案であった。

『日本風景論』の冒頭で志賀は「登山の気風を興作すべし」と世を扇動したようにみえるが、「登山の気風を興作すべし」とは志賀の思いつき的発言で、明治の戦闘的国粋主義者と登山思想、こう並べて見ると、どうも二つはしっくり結びつかない。事実、志賀重昂（1863～1927）は山など全く登っていないので、その文章にはおかしな箇所が多く例えば。

「急渉を渉らんとせば、巨石を抱えて渉るべし。此の如くせば重量甚だ大なるを以って流水の速力急激為るも之に抵抗するを得べし」と噴飯ものの渡渉術を説いている。

この渡渉術を小島烏水は『槍ケ嶽探検記』（明治 36 年）の第七章「霞沢の急淵を渉る記」で「流れ迅くして両脚抗す可からず。重量を着けむがために石を抱えたれど、却ってそのためによろめきて、辛くも導者に扶けられ・・・・」と書いた。

石を抱えて渉り、よろめいた小島烏水は「この方法は間違っている」としたが、黒岩はこれを烏水の作り話とし、その意図は志賀の剽窃に気づいていた烏水の　つぶやきにも似た「ひそかな呼びかけ」であり、代議士も二期つとめ『日本風景論』によって全国に名を知られた地理学者を相手に論戦を挑むことは、無理だったからとしている。

烏水は、いつ、どこで志賀の著がガルトン『旅行術』の写しと知ったのか。

村上濁浪著『冒険旅行術』（大学館・明治 45 年）の目次と、『日本風景論』に付録として付けられた一章の目次が、同じと知ったときであろう。『冒険旅行術』は冒頭から末尾まで

一冊全部がＦ・ガルトンからの丸写しで、翻訳本ならばこれでいいのだが、この本は村上濁浪 著「注2」となっており、志賀も顔まけの堂々たる剽窃ぶりだ。

ウエストンの『日本アルプス登山と探検』を一人で囲いこみ、意訳・翻案した小島烏水は、筆が滑って甲斐の白峰（甲斐駒岳）登山記を発表した。「注3」

武田久吉は『岳人 199 号』(昭和 39 年) 誌上でこの登山記を作り話としたが、志賀の剽窃的翻案に比してささやかな烏水の翻案は、武田をして「あれは山岳小説として読めば面白い」と、わけの分からぬ結末で幕引きされた。

泉下から志賀や烏水の一理ある声が聞こえてくる。

「明治という時代を考えてくれ。登山の大衆化に役だったと思う。科学や医学でも同じような事があり、日本国民はその恩恵を受けたではないか」

注 1.　原題　『Art of Travel 』Sir フランシス・ガルトン著　1873・マーレー社
初版 1852？　地理学者　優生学創始者　王位地理学協会から金メダル受賞。

注 2.　村上濁浪（俊蔵）　成功雑誌社 社長　月刊誌「探検世界」を発行　白瀬中尉の「南極記」大正 2 発行。

注 3.　雑誌『太陽』十巻二号に掲載した「甲斐の白峰」と称する登山紀行は、ウエストンが明治 37年（1904 年）に書いた南アルプス白峰「現在の甲斐駒岳」英文からの翻案。烏水はこの登山記でミソをつけたが、山の紀行文では歴史的人物である。

深田久弥の小説『津軽の野づら』は、彼の奥さんの作だったこと。ヘルマン・ブールの『8,000mの上と下』は、クルト・マイクスが手をくわえたものであること。『遠野物語』の話者である遠野の人、佐々木喜善「注 1」は、語り手から単なる登場人物に落とされて『遠野物語』は柳田国男が優位になっていること。これらはたいしたことではない。

グーグルの書籍デジタル化を剽窃行為とみて明石昇二郎 (1962 生 ルポライター) は、私から見た「グーグルの書籍全文デジタル化問題」とは、インターネットとデジタル技術を悪用し、世界中の著作権者にけんかを仕掛けた（海賊版事件）以外の何ものでもない、として米グーグルなどを告訴している。「注 2」

ここまでいくと剽窃も話が大きくなりすぎて手にあまります。剽窃ではない「作り話」で、世界的ベストセラーとなった本を次章に記します。

注 1.　佐々木喜善（1886～1933）民話研究家。縄文以来の風土と近代文明の幅を自在に行き来し日本最初の怪談まで書いている。

注 2.　書籍電子化を英語圏のみに修正としたグーグルなどの提案を了承し、著作権集団訴訟で和解。

第二章　デッチアゲの本

『第三の眼』　ロブサン・ランパ著　光文社 1957 刊

原題　The Third Eye　1956刊

なんと一度もチベットに行った事がない英国人が、チベット人になりすまして書きあげたデッチアゲの本で、世界的ベストセラーとなりました。1956年、初版から2ヶ月で60版以上増刷。

当時のチベットは禁断の国。人びとの憧憬につけこんで書き放題。その一節でランパは「7歳のときに選ばれ、ラマ寺で『第三の眼』を開く奥義を受けた」

それは木片を額に刺して千里眼の能力を高める腺を刺激する秘儀であったという。

インチキがばれたとき　ロブサン・ランパこと、単なるオカルト好きの配管工、シリル・ヘンリー・ホスキンズ（1910～1981）は、坊主頭にヒゲを生やしチベット装束をまとっていたが、チベットでは髭を生やす風習はなく、間の抜けた変装でした。

インチキがばれてもロブサン・ランパは「前世でチベットの僧院で修行を積んだ」との主張を曲げず、チベットでのラマ僧としての体験を70歳で亡くなるまでに19冊の本に記した。本の売上は400万部以上になっていた。

『脱出記』　スラヴオミール・ラウイッツ著　ソニーマガジンズ　2005刊

原題　The Long Walk　1956刊

本書はロンドン・デイリー・メールの新聞記者ロナルド・ダウニングが、ラウイッツの口述を文章化した作品です。

ラウイッツ（1915～2004）ポーランド生まれ。ポーランド陸軍騎兵隊中尉としてドイツ軍と戦う。ソ連軍の捕虜となるが1941年4月脱走し、1942年4月インドに逃れた。原書の初版は1956年に上梓され世界20ヶ国以上で翻訳された。

スターリン体制下のシベリア強制収用所から6人の仲間と脱走し、バイカル湖―モンゴル―ゴビ砂漠―6,000メートルの山脈―チベット高原―印度まで6,500キロ以上を徒歩で（途中3人死亡）―イギリス軍に保護されたとあり、読んだときホンマかいなと思ったが『チベットの潜入者たち』ピーターホップカーク著（今枝他訳　白水社・2004年　293ページ）に、ピーターフレミング（1907～1971　戦前の中央アジア探検家）の説として。

蘭州とウルムチを結ぶ戦時下の幹線道路を通っていながら、それを覚えていない。チベット高原に到達するまえに越えなければならない6,000メートルの山脈にふれてない。本が出版された後に、生き延びた3人、カルカッタの病院のスタッフたちが公に姿を現さないのは何故か、彼を治療した医者、看護婦、当時のインドの陸軍情報士官など、彼を覚えていないのは何故か。結論としてこの本はデッチアゲであるとしている。

これに対して「私は冒険者ではない。死の恐怖から逃れるのに必死で、どんな道や山を通ってきたか覚えていない、地図もないし知識もなかった。しかしすべて事実である」とラウイッツが反論。インドに到達したことが事実かどうかはすぐ調べれば分かることですが、それを関係者が覚えていないというのが分からない。なぜ、ラウイッツはイン

ドへの入国、出国の記録を示してピーターフレミングに反論しなかったのか。一緒だった仲間に証言を求めなかったのか。

ロナルド・ダウニングは雪男を見たというラウイッツを取材したとき、彼から極限の脱出体験談を聞き、この書の刊行に思いついたとある。

ラウイッツは2004年に亡くなっている。脱出行をともにした仲間たちの消息は明らかにされていない。彼らとはインドで別れた後一度も会ったことが無いと言う不思議。新聞記者でもあるダウニングがラウイッツの仲間、カルカッタの病院スタッフ、イギリス軍に一切取材していないのは？　この話を特ダネとして記事にしなかったのは――12年間も伏せられていた話が突然出版に至った経緯の謎。疑念はつのる。

つまり同じ年（1956年）大ヒットした『第三の眼』に刺激され、実話という仮面をかぶって脱出記も刊行された、とかんぐるのは妄想でしょうか。

シベリアからインドって、どんな自然環境の地域かご存知ですか。酷寒のシベリア、照りつける日ざしのゴビ砂漠、寒さ渇き餓えに耐え、この地を歩き抜けた「この話、本当なのか？」という疑いは残る。もしまったくの作り話ならすごい想像力です。

2010年にポーランドの青年3人が、ラウイッツの足跡をたどる旅をしています。この本の信憑性がわからないままに話だけは一人歩きし、2010年、脱出記はピーター・ウイアー監督（米）「ザ ウエイ バック」の映題で公開されている。

第三章　疑惑の登攀

鹿島槍研究　吉田二郎事件

第二次ＲＣＣ華やかなころ1950年代末期、「スーパーアルピニズム試論」と題する論文が『岩と雪』誌上に発表された。筆者は吉田二郎。小説家でもあったらしい吉田二郎のすごい名文でした。

いまも古書目録で￥5,000くらいの値打ちがある『鹿島槍研究』（朋文堂・1957）は、雑誌・岳人誌上でその登攀の真偽について論争があり、吉田二郎は登山界を去る。

鹿島槍北壁のルンゼ、壁、稜に、ことこまかく名をつけ（蝶型右稜、中央ルンゼ等）重箱の隅をほじくるような初登攀。これをめぐる真偽・論争。

同時代の出来事として、これは話が小さい。つぎの真偽をめぐる結末は、登攀界を二分する論争を引き起こした。

1955年　マエストリ事件

『孤独の山』トモ・チェセン著（近藤等訳　山と渓谷社・1998）　補遺『疑惑の系譜』にかかれた、池田常道（元「岩と雪」編集長）の文章を抄録・引用します。

歴史上偉大な登攀の真偽が疑われたのは、1955年のマエストリ事件である。

イタリアのクライマー、チェザレ・マエストリはオーストリアのトニー・エガーと2人でパタゴニアにある未踏の岩峰セロ・トーレを北壁から初登頂したが、頂上からの帰途エガーは雪崩に打たれて行方不明となり、カメラも彼とともに失われてしまった。

マエストリ自身、気を失って取り付きの雪の中に倒れていたところを、ベース・キャンプから上がってきた仲間に発見されて助かったのである。

帰国後、彼の登攀は新聞紙上に派手にとりあげられ、手記も出版された。しかし、ルートの最後の部分に関する記述は具体性を欠き、写真もないことから疑惑が生まれた。とりわけ他のクライマーが疑ったのは、それまでにパタゴニアの同じように難しい岩峰— たとえばリオネル・テレイとギド・マニヨーヌによるフィッツロイで行われた登攀と比べて、マエストリたちのスピードが異常に速かったことであった。

セロ・トーレでは彼らの前に（ルートは違うが）ボナッティ、マウリという当時世界最高のコンビも敗退していたことが疑念を増幅する結果となった。

批判にさらされたマエストリは、それを黙殺するだけではおさまらなかった。
約10年が経過したころ突然再挙したのである。こんどはもっと難しい南東稜をルートに選び、固定ロープをベタ張りしながらヘッドウオールまで登りつめてみせた。この岩峰の頂上を覆う氷のマッシュルーム自体は登られずに終わったが、登攀自体はべつの意味で批判の的になった。マエストリは手がかりの乏しい岩壁におびただしいボルトを連続して埋めたばかりか、そのための穴をうがつのに圧搾空気を動力とするドリルを使ったからである。

その強引な手法はあたかも、かつて自分を疑った登山界全体に実力を誇示し、復讐するためのものであるかのように見えた。

クライミングの自由と人工手段の乱用の相克と言う意味で、この登攀は当時の登山界を二分する論争に発展した。セロ・トーレの「フェアーな手段による」初登は1974年、カジミーロ・フェラーリの隊によるものとされている。

マエストリは2002年、74歳でシシャパンマに行っており、トーレで300本にあまるボルトを打ち込んだ彼は「腕を鍛えるため、女を抱くときも女を上にして腕で持ち上げる」と、うそぶく豪腕・マッチョ。イタリアでは多くのファンがいる。

この登攀を材とした、メスナー著『トーレ　石の叫び』翻訳・刊行が待たれます。

1990年　ローツエ(8,511m)　南壁初登　トモ・チェセンへの疑惑

4月22日～25日　標高差3,300m　所要45時間（下降ふくめて62時間）で登頂

20世紀最後に残された未踏のローツエ南壁には、1985年、'87年、'89年の三次に及ぶポーランド隊。その間のフランス隊、メスナーの国際隊と、すべて敗退。'88年、'89年の2回にわたってフランスのマルク・バタールがソロで攻撃したが、8,000mに達せず

敗退。1989年イエジ・ククチカはソロで挑戦し墜死と、難攻不落の壁だった。

事件の発端

ローツエ（8,511m） 成功後の1990年9月に開かれたＧＨＭ「注1」の総会でトモ・チェセン「注2」は、スイス人のレミ兄弟によってその会員に推挙された。

ところがシャモニーのガイド、イヴァン・ギラルディニら数人が「彼の記録は疑わしい」と主張して入会に反対した。

チェセン攻撃の急先鋒であるイヴァン・ギラルディニは、

「現代の冒険は、ヒマラヤであれ、極地であれ、アルプスであれ、マスメディアとスポンサー、大衆の絶えざる監視の下で行われ名声と金が以前よりはるかに露骨にからんでいる」として、ローツエを含むチェセンのソロすべてに疑惑を表明したうえにこう書いた。

「チェセンは用具メーカや新聞にサポートされたプロだ。だからこそ非難される余地のない証拠を提出する義務がある。彼が 8,000m地点や頂上にいるショットを見せない限りローツエの登攀は信用できない」

ギラルディニはヘリコプターやマスメディアを動員して行われる昨今のアルプス登攀にも批判的でこの文中でもそれに言及している。

注1. パリに本拠を置く歴代最高のクライマーの会の名称（ＧＨＭ・高嶺会）グループ・ド・オート・モンターニュ。

注2. トモ・チェセン（スロヴェニア 1959〜）1985年ヤルン・カン(8,505m)登頂。1986年3月の1週間でアルプスの三大北壁を連続ソロ。アイガーを12時間、グランド・ジョラスを4時間、マッターホルンを10時間で完登。1986年夏 ブロード・ピーク（8,047m）ＢＣからソロ登頂。Ｋ２（8,611m）南南東リブをソロ初登。1989年ジャヌー（7,710m）北壁ソロ登頂。1990年ローツエ南壁ソロ登頂？ 信じがたい登頂成功が疑惑を招く。その真偽を巡って論争の末、登山界を去る。

チェセンへの擁護

ローツエ南壁初登の登攀報告は「アメリカン・アルパイン・ジャーナル」'91年版にチェセン自身の手記として掲載された。編集長Ｈ・アダムズ・カータは記事の末尾にチェセンを擁護するコラムを挿入して「・・・・・ かつてヘルマン・ブールがナンガ・パルバートに登頂したとき、メスナーがエベレストにソロで登頂したとき、だれがそれを目撃したというのか。私はこの件に関してチェセンの言葉を信ずるものです」

このほかチェセンの言葉を信じた、フランスの登山家たち。ギラルディニに宛てたチェセンの反論文書の公開など、世界の登攀界はギラルディニの過剰な反応に飽き「もう論争はやめよう」が大勢となってギラルディニはいつしか土俵の外に押しやられ、'92年のなかば チェセンは賛同者多数を得てＧＨＭ会員に選ばれた。

登頂写真への疑惑

事はこれでおさまらなかった。登頂写真などないとしていたチェセンが雑誌（ベルティカル 28 号・1990）に提供していたローツエ登攀時の記録写真は他人の写真だったのだ。

この写真はスロヴェニアの登山家グロシエリが 1981 年（ローツエ南壁試登時）、1989 年（8,350m地点から）撮影したもので偶然に『ベルティカル』誌でこれを見たグロシエリは、チェセンになぜ自分の写真を使ったのかと詰問した。

チェセンはこれに関して苦しい弁明をしている。この件で疑惑は再燃した。最大の擁護者だったメスナーも「チェセンが南壁を登らなかったと主張しているのではない。ただこの件（写真）に関しては彼のいうことは信用できない」「もし彼がこれからも他人の発言に対する否認のみで自分の登攀を立証しようとするのなら、わたしは自分の登山史の本から彼の名前を抹消するだろう」と言明した。

フランスでは一度は脇役に追いやられたギラルディニはこの情勢に息を吹き返した。彼はあらたな告発の手紙を雑誌社に送りさらに痛烈な批判を展開した。

ヨーロッパの山岳雑誌が告発と反論を交互に掲載していたとき、アメリカの『クライミング』誌は、「筋の通った疑惑」と題して本件に関する包括的リポートを発表する。新しい事実を加えたこの記事とてチェセンの登攀を完全に否定するとはいえぬが、チェセンは「誰がなんと言おうと私はあの時ローツエにいた」として登山界を去った。

当時の論争経緯は　雑誌『岩と雪』　142 号　147 号　161 号　162 号　163 号に詳しい。

剽窃、デッチアゲ、疑惑と嫌な話ばかりですみません。
ここで 30 数年ぶりの公的刊行となった待望の書。岳友・平井吉夫が翻訳したメスナー初の 8,000 メートル、1970 年のナンガ・パルバート（愛弟ギュンターと二人で登頂後、弟は遭難死亡）を語った作品を紹介します。

第四章　『裸の山』ナンガ・パルバート

ラインホルト・メスナー 著　2002 刊
平井吉夫 訳　山と渓谷社　2010 刊

1970 年メスナー初の 8,000 メートル。ナンガ・パルバートで起きた隊長ヘルリヒコッファーとの確執、長い係争の原因は、ヘルリヒコッファーというおかしなキャラクターにあった。

ヘルリヒコファーが死んで、彼の遺族の合意を得て、30 数年ぶりの刊行となった今回の書に訳者はこう述べています。

『赤い信号弾（原文はロケット）』は 1971 年に刊行して絶版「注」にさせられた本で、2010 年 1 月に復刊されました。さっそく取り寄せて読んで驚いたのは、その記述は本書『裸の山・2002』の第七章以降（1970 年ナンガ・パルバート遠征の経緯）に、ほとんどそのままに流用されていたことです。2002 年までにメスナーには 50 点の著作があり、その

いくつかに、この栄光と悲劇が交錯した初のヒマラヤ行のことも語られていますが、いずれも断片的で、それのみを一書にまとめた本は、禁書となった『赤い信号弾』をべつにすれば、本書『裸の山』が初めてです。

注。　遠征参加契約に個人的報告の刊行禁止とあり、メスナー最初の著『赤い信号弾・1971』は絶版とさせられた。

話は40年前にさかのぼります。絶版とさせられた『赤い信号弾』を読まれていた横川文雄氏は、1971年12月3日、ミュンヘンでメスナーと歓談し、この著がついに上映されぬ映画のための台本という形式で書かれていたので、翻訳に躊躇したと語った時、メスナーはいずれ機会があれば普通の客観的な記述に書き直してもよいと応えている。
『第7級』メスナー 著　1974　横川文雄 訳　あとがきに依拠

初版『赤い信号弾・1971』は映画のための台本だから、ト書きと台詞で構成されていて、登場する自分自身も「私」ではなく、「ラインホルト」あるいは「彼」という三人称で書かれています ― 訳者記述。これをメスナー自身の一人称表現に書きかえた『裸の山・2002』では、長年にわたって口封じされてきた、メスナーの憤怒をこめた猛烈な反論が噴きだしている。

ナンガ・パルバートはウルドゥー語で「裸の山」の意味だが、本書表題「裸の山」には、どのような意味がこめられているのでしょうか。

1970年6月28日。メスナーと弟ギュンターは1895年ママリーが辿った谷なら下れるはずだと、薄いアルミのシート、ポケットにあったわずかな食べ物だけで、大きな山の未知の反対側（ディアミール・フェース）を3日間一滴の水も飲まず、5日間食べるものもなく、3晩を氷の中ですごし ― モノと情報でなにもない無防備、隊からの孤立を「裸」と、その状況を「裸の山」と表現したのか。

隊長、隊員の言動を赤裸々に語った著『裸の山』。最後に一人となって山と対峙した体験がメスナーに与えたものは、組織登山の「不自由」から解放された自由な山。それを登山者に取りもどす覚悟だったと思う。

数学教師（論理的）であったメスナーは過去の登山方法にとらわれず、頭の中で思考した方法を現場で実践した。ナンガ・パルバートでメスナーが採用した未曾有の脱出手段「未知のディアミール壁下降」の決意にあったのは、ゲルマン的思弁の冒険者、メスナーのデジタル感覚です。

＊（思弁：経験に頼らず、頭の中だけの純粋な思考によりものごとを判断すること）

平井吉夫の　あとがき

翻訳作業から解放された「あとがき」で、弟ギュンターの死に自責の問いを繰り返す兄ラインホルトの心情に、文学的テーマとしての興味を感じ、隊長ヘルリヒコッファー

のナンガ・パルバートにかけた執念に『白鯨』のエイハブ船長をかさね合せ、本書に山岳文学の「山岳」という二字をはずして、文学としての興趣を強く覚えたとある。ドイツの書を多く訳されてきた訳者ならではの読解で、還暦も近くなったメスナーが本書の執筆に取り掛かった心情を説明する。

これら訳者の意を筆者の駄文でうまく伝える自信がありません。ぜひ本書、特に「あとがき」を、お読みください。

さらに現地情報に詳しい訳者は、メスナーとドイツ山岳会（界）との40年に及ぶナンガ・パルバート騒動を、最新ニュースで紹介されている。できれば全文引用したいが紙幅に限りがあるので、いきなり1970年にさかのぼり、2010年までを抄録・引用します。

1970年6月28日。ナンガ・パルバート横断（ディアミール・フェース下降）はメスナーが自己一身の名誉欲のため、弟ギュンターを見捨てて、独断専行したものである。あまつさえヘルリヒコッファーは、この主旨を記した文書に署名するようメスナーに要求した。

2001年10月4日。ミュンヘンの山岳会ハウスで、山岳ジャーナリストのホルスト・ヘフラーの書いたヘルリヒコッファーの伝記(『カール・マリア・ヘルリヒコッファー　執念、勝利、論争』2001刊）に関するシンポジュームが開かれ、この本の序文を書いたメスナーも招かれました。この席でナンガ・パルバートの元遠征隊員たちとの間で、30数年前のヘルリヒコッファーの主張のほぼ蒸しかえしのようなメスナー批判が再燃した。メスナーは、批判者を「中傷（原文はルーフ・モルト、直訳すると風評殺人）者」「捏造者」「嘘つき」「精神的拷問者」、はては「犯罪者」と呼び、さまざまなインタビューで批判者の言い分に逐一反論している。

2005年8月。ディアミール側、4,600m付近の氷河で人骨（助骨、背骨、上腕骨）とともに登山靴とヤッケが発見された。遺骨はインスブルック大学でＤＮＡ鑑定に付され、ギュンターの遺体であることがほぼ確実という結果がでました。遺品もギュンターのものであることは間違いありません。メスナーは頂上付近ですでに死んでいたか、衰弱していた弟ギュンターを見捨てて、自己一身の名誉欲のため ― という元隊員たちの憶測に、弟ギュンターは35年を経て4,600m付近で遺骨となって現れ、兄の証言（登頂のあと3日間一緒だった）が事実であったことを立証した。

元隊員たちは頂上付近で兄に放置された遺体が 30 数年の歳月のうちに氷雪に押し流されてきたとか、メスナーの依頼と費用で行ったＤＮＡ鑑定はあやしいとか、まだ矛をおさめていません。

2010年、複刊された『赤い信号弾』の本文は初版とまったく同じで、13ページにわたる序文（中傷者への怒りがみなぎっている）と、163 点の写真、数々の証言コラムで増補されている。

2010年、上映された『ナンガ・パルバート』に元隊員たちは、ヘルリヒコッファーの子息とともに、この劇映画を「歴史の捏造」と非難している。

そういう跡を絶たない批判に対し、最近のメスナーは「言いたいやつには言わせておけ」と、なにやらさばさばした風情を見せていますが、21世紀に入ってからのメスナーの著作は、じつのところナンガ・パルバート「横断」問題にかかりっきりだったと言っても過言ではありません。

1970年ナンガ・パルバートの栄光と悲劇を述べた『裸の山』の、ちぎっては投げるようなメスナーの特異な文体は「じつは興奮冷めやらぬ30年前の筆の跡だった」と訳者は述べている。

創作（原文）は炊きたての白いご飯。翻訳はすでにある材料をかき混ぜながらさまざまに味付けする炒飯としたら、メスナーの憤怒をこめた文体に寄り添い、
その息づかいを巧みに料理した短い文節、体言止め。ここには漢文に長けた訳者の素地が溶けこんでいる。

極度に圧縮された漢文的簡潔の翻訳例を1934年、メルクルのナンガ・パルバート遠征の記述から引用します。(第二章 絶頂 ― ヒマラヤ 35ページ)

しかし、なぜメルクルがまたもや遠征隊のトップにいるのか？　慣習により、
政治の世界のように。すでに率いた者が率いる。ゆえにメルクル。

30数年前の情動、不安、怒りを現在と過去で織りあげた山岳文学の傑作。登山行為で超人なら40年にも及ぶ係争に断じて屈しないメスナーは、精神力でも超人です。

本書を読んでヘルリヒコッファー著『ナンガ・パルバート回想』を再読した。ここで問題とするのは高所登山で決定的なものは、軍隊のような忠誠心、同志的連帯であり、個人的な野心ではないとするヘルリヒコッファーの指導者原理です。高所登山は原理実証の場ではない。「進むか、退くか」の最終判断は個々の登山者の自由な現場感覚にあります。

1953年ナンガ・パルバート。ヘルマン・ブールの登頂は、隊長ヘルリヒコッファーの命令を超えた、登るという純粋な意欲（野心）にあったのです。

確かにギュンターは死んだ。自己の登頂衝動に駆られて行動し、運悪く死んだことに誰も責任を負うことはない。だが、尊敬する兄になにごとも先行される弟の複雑な心情がわかっていたメスナーは、ギュンターの死に長く悔悟と自責の念を引きずってきた、と訳者（平井）はあとがき冒頭で記している。

第五章　山を語る　漢字の力

明治維新、西洋の文物が洪水のように押し寄せてきたが、それをしのいだのは漢字の

造語能力でした。横文字を片っ端から漢字に置き換えた明治の知識人たちに感謝します。漢字の造語能力は中国産漢字にとどまらず、国産漢字（峠　畑　鋲 ・・・・・ ほか）を生みだし、新造語とまだまだ健在。峠道　焼畑　鋲靴ほかこのような造語がいったいどれほどあるのか見当がつきません。

べたべたと漢字を貼り付ければ、

身体能力減退気味年金生活登山愛好者百名山達成 ・・・・・ と、えんえんと繋げられる。

Mountaineer ― 翻訳＝近似値（漢字への置き換え）の造語として、
登山者　登山家　登攀者　山行者　登高者　岳人　山人など。
極めつけは新聞記事にあった　山岳家・故小山義治氏。

北アルプス北穂高岳（3,106m）の山頂近くに山小屋「北穂高岳小屋」を築き半世紀以上も主人を務めた山岳家・故小山義治氏 ― ’09.4.19 毎日朝刊記事。

新造語

なんでもない言葉を二つ三つと接合して新造語を製造する。手打ち麺でなく即席麺のような造語。たとえば登山という言葉では。
学術登山　信仰登山（以下登山を略）追悼　単独　先鋭　横断　無謀　神風。
公募営業登山　日本百名水登山など。

たぶん初登場の追従登山、この意味は皆さんにお任せします。
これらは氷山の一角もう例を挙げるのもわずらわしいが、先鋭登攀者、単独行者と漢字の造語能力は無尽蔵です。この表現に物足りぬとき有名な「あの」が登場して、あの先鋭登攀者、あの単独行者で読者も書き手も満足します。

盛夏。旅行案内パンフレットで見た川床風情、夏得楽名山などには教えられること多い。既存の語をちょっとひねって操作して、インターネットを互聯網絡、トレッキングを巡回山麓游覧とした、北京青年扱（新聞）の表意造語には思わず拍手する。

頭のスポーツとして互聯網絡用語のプロバイダー、ダウンロード、アップロードなどの翻訳（造語）をされてみてはいかがでしょうか。

新造語 と 「的」 の接合

新造語に的*をくっつけて形容動詞とし、学術的*登山　文化的*登山・・・・・など。服部文祥の原始的登山、串田孫一の静観的登山。ここに家とか者を接合して新装開店した原始的登山者、静観的登山家など。この千人力の「的」は国字です。

和漢洋混交

六甲の岩場、A懸やキャッスルを麻ザイルと鋲靴で登ったＲＣＣ「注」の人たち。
漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字などの全部を混ぜあわせ、和漢洋混交で表現できる日本語って本当に便利です。

注。　岩登りの会の名称・創設者は藤木九三

造語　～　登山哲学

登山に哲学をくっつけて登山哲学とする造語をいままでに使っている。
文脈にはめ込まれたこの造語を文から引き抜いて眺めると、気楽に言葉を使ったと反省します。実は哲学に関する本など一冊も読んだことがない。

そもそも哲学とは何ぞや。「角川必携国語辞典」（大野晋・田中章夫編　角川学芸出版）にある全文を引きます。

本来philo（愛）sophy（智）の訳語。智学と訳せばまだわかりやすかったのに、熟語の少ない哲（大智を意味する）を使ったので日本人にはむやみにわかりにくい学問というイメージをもつようになった。

智学、これならとっつきやすい。新造語の登山智学（智恵）と、既存の登山心得（知識・技術）という二つの言葉をまぜあわせて辿りついた信条。ここに「自分の山登りをする」を足せば、かなり「登山哲学」に近づいたようだ。

自分の山登りは何でも結構です。遭難だけはしないでください。さらに「山では死なない」を足して「登山哲学」とします、とここまで書いたら「ゴルフとは何かを考えてゴルフする人などいるのか」山登りも同じだと聞こえてきた。そうです哲学って当たり前のことをややこしく言い、しかし何を言っているのかはついに判らない、高級な言葉（造語）としてよく現れている。

美学（造語です）の二篇

友に殉じた美学

1949年1月6日。北鎌尾根を目指した松濤明（享年28歳）と有元克己（享年27歳）の二人は雪洞で凍死する。死と闘いついに倒れんとする瞬間の臨場感を綴った文学のような稀代の遺書。

「カンキキビシキタメ有元ハ足ヲ第二度トウショウニヤラレル、セツドーハ小サク、夜中入口ヲカゼニサラサレ全身ユキデヌレル」

「何トカ湯俣迄ト思フモ有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ス」

元農大山岳部・宮沢憲氏は「これを有元の遺族が見たらどんな思いがするでしょうか」— あの時の雪で一人で湯俣まで下れるはずがない、と語っている。
この仮名書きの手帳（遺書）は大町山岳博物館に所蔵されている。

『風雪のビバーク』朋文堂・1960年

『別冊太陽』103号　平凡社・1998年10月

隊に殉じた美学

1912年1月。アムンゼン隊と南極点到達を競うことになったロバート・ファルコン・

スコット大佐（1868～1912）に引率された隊は、千辛万苦のすえに辿りついた極点に、ノールウエイの旗がひるがえっていた。その帰途、食料、燃料の欠乏で隊員5名全員が死亡。その数日前、隊員の一人オーツが仲間の足手まといになることをおそれ、自らテントの外に這い出し、ブリザードの中に消えていった。隊長スコットは見ていてそれを止めなかった。

日記にこう記した。「イギリス国民に伝えたい。彼の行為は英雄的であった」
8ケ月後、この日記は捜索隊によって発見された。
松濤とオーツはありていに言えば凍えて動けなくなって、仕方なく死んだのです。
残された遺書、日記が二人を自己犠牲と悲劇のヒーローに仕立てあげた。

『スコット 南極の悲劇』ピータ・フレンド 著 高橋訳

第六章　山を考える

冒険

レヴイ＝ストロース（仏・社会人類学者）は、自伝的紀行 『悲しき熱帯』の冒頭で「現代に冒険なんて存在しない。さかしらを　わけしり顔に言い、擬似冒険を捏造しているだけだ」と喝破している。

『悲しき熱帯』の終章にある「世界は人間なしに始まったし、人間なしで終わるだろう」この一節の示唆する人類の将来（環境破壊、食料危機、戦争，核）。これに立ち向わねばならぬ行為は本物の冒険といえる。悲しいことに冒険の相手は自然でなく人間です。

石川直樹（写真家・七大陸登頂者）は、地理的な空白がなくなった時代を生きる現代の冒険家たちは、これまでの人類の歩みを俯瞰して、その隙間を見つけ自分なりの方法で空白を埋めていく。そこに特別な自分なりの題材を見つけなくてはいけない。だから現代の冒険者はアーティストでもあると、いつのまにやら活動芸術家に片足をつっ込み、ブラジルのカピバラ山地への旅。ハワイとイースター島、ニュジーランドを結ぶ海域の島々を渡り歩いた旅。ヒマラヤにも足をのばすなど、身の軽さに加え文章のうまさに感心します。

8,000メートル　登山者は何を思う

行動心理学の原則が正しければ、3,000メートルも8,000メートルも登山者の心理面における基本的状況は、だいたいにおいて同じだ。その結果の山岳界に与えたインパクトが違っただけです。
8,000メートル登山者の心理を、3,000メートル登山者の感覚（厳冬期の北アルプス登山）から推測するとき、登山者は「ただ、登るために登った」メスナーの著にある次の記述がそれを思わせる。

ナンガ・パルバートで死んだギュンターが独断で登頂した動機が「有名になる」ことだとする考えをメスナーは「お笑いだ！」と登山家の現場感覚によって否定している。

ソロ、無酸素でチョモランマに登頂したメスナーは、頂上手前で「絶望感もなければ幸福感も、不安もない。感覚といったものもない。無限の疲労のなかでは、なにも考えないし、なにも感じないのだ」と語っている。

場所は8,000メートルです。手足の動きに全神経を集中し破裂しそうな肺に耐えているとき、誰が名誉や栄光に思いを馳せるか。達成感とか生命の充足感とかはあって当然だが、それは生還した安堵のなかで感じるもの。登っているさなかは、登るために登る。ただそれだけだったと思う。

アナログ登山とデジタル登山

ハイテク武器を使わず槍と刀で自然と応戦したメスナーの山。

ＧＰＳ、衛星通信、酸素、ヘリ、固定ロープなどを最大に使って自然と応戦した山。

メスナーは主張する。過剰な器具の使用は、人間が元来持っていた力と能力を最大限に発揮できる、自然や山との対決から得られる喜びを妨害する。

固められた足元、固定ロープに頼る登山は、整備されたスキーコースを滑るのと同じ。これを「滑走コース・アルピニズム」と切り捨てる。

1985年、ダグ・スコットとの対談で「いまヒマラヤ登山に興味を失いつつある。うんざりした。自分の山は大いなる理念に支えられてきたわけだが、いまソレがどこかにいってしまった。他人の後ろをついていくのは僕のやりかたではない」と、1986年14座を完結し登山行為を終了する（42歳）。

いまテレビで見るベースに衛星通信設備を備え、デジタル機器操作のスタッフを配置し、登山の状況をリアルタイムで発信する映像は、瞬時に世界を走る。
だが登山をショー化したこの映像に自然から得られる感動は感じない。

遭難 ― 『登山の法律学』

遭難について主催社（者）とリーダ、ガイドの法的責任に、実例も挙げ責任の有無を解説する書。責任論についての「論考」があったが、表に出た報道だけで判断する部外者の遭難批判は失礼です。手術して腹の中にガーゼを残したまま縫合した。これは争えます。だがそうでないときの医療ミスうんぬんの訴訟に裁判官（医学の素人）は、どう判断するのか。山を知らない法律の専門家が事故当時の状況を検証して判断するなんて事が出来るのでしょうか。遭難を軽々しく論考するのは嫌いだ。

トイレ事情

小川守正先輩が最盛期を過ぎた時期の富士山に行かれたとき、小屋のトイレから汲みだされたトイレットペーパーが「白い川」となって山肌にへばりついている光景に憤慨

され、「これは、日本の恥だ」と静岡県知事に手紙で抗議されました。政府が富士山の世界自然遺産への推薦を断念した一因に「白い川」が、景観を乱したことも挙げられている。静岡県では2005年現在環境配慮型トイレが整備され、し尿の地表への垂れ流しはなくなっている。

富山県の立山では使用済携帯トイレの回収箱を山小屋に設置し、県がヘリコプターで処理地に搬送しています。長野県では'09年現在109カ所が環境配慮型トイレに改良されている。以下提案です。

山でのトイレは有料という文化にし宿泊客以外のトイレ利用は、すべて有料とする。携帯トイレを持参し「大・持ち帰り」とする。

お前はソレを実行するのかと聞かれると自信がないので、立山のように回収箱の設置をお願いする。

トイレの問題をあれこれ言うほどバカバカしいことはないが、近い例では芦屋川駅から六甲山に行かれる多くのハイカーは、高座の滝そばのトイレを過ぎると六甲山頂近くの一軒茶屋までトイレがありません。
その間、3時間から4時間くらいのハイキングコースにトイレ無しで、皆さん
どうされているのでしょうか。途中で「その気」になった時、大勢のハイカーの目を避けて用を足すにも場所がない。

何10万人のハイカーの皆さん。六甲山ハイキングは携帯トイレ必携とし、途中の雨ケ峠に有料トイレを。一軒茶屋前の車道に有料回収箱設置の署名を集めよう。

あとがき

この稿は論考となっていますが、現代の登山に論考の対象はあるのか、という疑問も一方では抱いています。装備開発、環境保全、高所対策（医学）などは専門的研究分野の対象で、ここで言う論考の対象ではない。未踏峰がなくなったあと、時期、ルート、ソロとさまざまな条件をもちだした登山も種が尽き、山に理屈をこねる時代は過ぎた。純粋アルピニズム幻想を引きずって過剰な登攀器具の使用はいけないとか、商業公募登山はおかしいとかは、他人がとやかく言う問題ではない。

遊戯の極としての超先鋭登攀者の遭難死は、普通の登山とは別次元の問題で、
その死の原因など考えても仕方がない。
いま「論考」と構えたら筆が動かない。現代の登山は論考という指定席でなく、エッセイ（軽い論文、小論、他なんでもあり）という自由席から、話題提供の程度で山を語るのが適切かと思います。
この稿はなにと定めず思うままに書いた文章です。だからエッセイという席のほうが座り心地が良いのですが。

2010年12月

目次

＝紀行＝

ダージリン・シッキム・シムラを訪ねて

（2010年11月16日～12月1日）

越　田　和　男（昭和36年理卒）

ダージリンからシンガリラ尾根に登りカンチェンジュンガを眺める、旧シッキム王国を訪ねる、英国統治時代の夏の首都シムラを訪ねる、などいずれはやってみたいと思いながらも、旅の優先順位のやり繰りがつかずに実現せぬままとなっていた。それが昨年11月に仲間を得て今度の山見遊山となったのだが、旅のきっかけは、10数年も前に田邊潤（ガチャ）先輩と関学OB南井英弘さんのお二人がカラコルムの山中で、リタイヤして暇になったらダージリンへ行ってカンチを眺めようと約束されていたことに遡る。昨年ガチャさんのリタイヤの報せに、待ちに待った南井さんが、ほな行きまひょか、と声をかけ、それに国学院ＯＢの大橋晋さんと小生がパックリ喰いついた次第。男４名７０歳代、それに紅一点南井夫人が加わり一行５名、ちょっと寒いがヒマラヤのよく見える１１月後半を選んでの出発と相成った。

ダージリン・ヒマラヤ鉄道

ダージリンに行くなら、今や世界文化遺産となり、トイトレインの愛称で知られる超狭軌（６１０ｍｍ）の山岳鉄道で行きたい。山麓の町シリグリからダージリンまで８３km，標高差2000mを全部乗ると8時間から10時間はかかり、あまりお勧め出来ません、観光客はたいていダージリンからグームまでの往復小1時間の体験乗車で満足してますよ、という旅行会社の助言も聞かずに、昔ながらのダージリンへの正しいアプローチを志向して、全線乗車を予定に組んだ。ところが、出発直前になり、土砂崩れがあり下半分が不通だという。結果的にはこれがよかった。暑くてゴチャゴチャしたシリグリに一泊して早朝の汽車に乗るよりも、丁度中間にあるクルセオンまで車で登り、ここに宿をとり、翌日の午後の列車に乗ることに変更。クルセオンでの午前中を茶畑と製茶工場の見学にあてることにした。

ﾀﾞｰｼﾞﾘﾝ･ﾋﾏﾗﾔ鉄道　ｸﾙｾｵﾝ駅

尾根筋に開けた集落クルセオンの宿“Chochlane Place Hotel”は古びたコロニアル様式の邸宅風で雰囲気よし。見学した茶園は、急傾斜の茶畑での茶摘み風景がなかなかの絵になったし、日本への輸出が多いこともあって、オーナー社長が快く応対してくれた。このダージリン・ティーのブランド「マカイバリ」はガチャさんをはじめ、メンバーの格好の土産品となった。

クルセオンには機関区があり、古いＳＬ２機が煙を吐いて待機していたが、この日の午後の便（15:00 発）はＳＬではなく、ディーゼル車が小さな客車４両を牽引した。生憎の天気で小雨もあり、日暮も早く、車窓からのヒマラヤの遠望はならなかったが、ゆっくりと走る列車に飛び乗り、飛び降り、でタダ乗りの小、中学生をはじめ、土地の人たちの足になっているローカル線の旅を楽しんだ。1881 年の開通以来の歴史ある路線で、並行して走る自動車道があり、車の方が勿論早い。スイッチ・バックはあるが、ラック・レールはなし。トンネルもほとんどなく、尾根筋の地形に合わせてのカーブの連続。民家の軒すれすれに通ったりする。よくも 130 年も前にこんな鉄道を作ったものだ。ダージリンの手前の最高地点 2143m のグームのオメガ・ループ（有名な撮影ポイントで、尾根の端をギリシャ文字のオメガ状３６０度回るループ線）で本来はカンチェンジュンガを一望出来るはずだが、この日は果たさず。ダージリンを去る日にこの地を再訪して、その景観は確認した。夕暮れの６時前にダージリン着。ここでもＳＬ２機が待機していた。

１００年以上前、明治３０年（1897 年）、彼の河口慧海師３２歳、最初の渡印でチャンドラ・ボースに勧められてのダージリン行きで、この鉄道に乗った手記がある。

> 「朝シリグリーというステーションで小さな山汽車に乗り替えました。その汽車が北に向ってヒマラヤ山にだんだん上りました。欝茂せる大林すなわちタライ・ジャンガルを過ぎて汽車の紆曲することは大蛇のごとく、汽関車の声は幾千の獅子の奮迅もかくやと思われるほどで山谷を震動して上りました。山道五十哩を上りまして午後五時頃ダージリンに着きましたが、カルカッタより三百八十哩を経たのであります。」（河口慧海『チベット旅行記』講談社学術文庫）

夜明けのタイガー・ヒル

ダージリンの宿は“Fortune Resort Central”。通りに面した入口は安っぽかったが、古い建物らしく、内部は堂々としており、食堂からカンチェンジュンガが見えたので気を良くした。

翌早朝、ジープ２台でタイガー・ヒルの夜明けを見に行った。３階建の立派な展望台があり、３階の特等室で夜明けを待ったが、随分着込んできたにも拘わらず結構寒い。大勢のインド人観光客は寒

い野外でご来光待ち。夜明け前、北方に8,５８５mのカンチの頂きが先ず赤みを帯びて姿を現すと、我々はもう窓に釘付け。やれジャヌーだ、カブルーだ、(ダグラス・フレッシュフィールドが世界で最も美しい雪山と言った) シニオルチューだ、などといっては興奮気味。一方、インドの方々といえば、東天、雲海上のご来光がお目当てらしく、日の出に歓声を上げると山などに目もくれない。我々や欧米人が刻々変化する山々を楽しんでいると、何時の間にやら皆さんお帰りなっていた。

ﾀｲｶﾞｰﾋﾙからｶﾝﾁｪﾝｼﾞｭﾝｶﾞ

ダージリン市内の印象は、こちらが勝手に思い込んでいた大英帝国統治下の植民地的な避暑地の雰囲気は辛うじて残っている程度。ちょっとゴチャゴチャしてるなといった感じ。観光客は圧倒的にインド人、それに少ないながらも欧米人、最近は日本からのツアーもなく、日本人はほとんど来ないらしい。ダージリン・シェルパの古里、発祥の地ではあるが、昨今この地から旅立つシェルパはいないそうだ。それでも、テンジン・ノルゲイが長年校長を務めた国立ヒマラヤ登山学校は健在で、近くにあるロック・クライミングのゲレンデ“テンジン・ロック”では大勢の若者が練習に励んでいた。カンチェンジュンガを望む快適な岩場で、もう少し若ければちょっとやって見るかとなったのだろうが、我が仲間からはその声なし。

シンガリラ尾根（サンダクプー）へ

ダージリン観光だけではちょっと物足りぬ、せめて一泊位はトレッキングに出かけたいとの希望を満たす格好の場所がある。カンチからインド・ネパールの国境稜線を南に延びる長大なシンガリラ尾根。ここは、その昔我が甲南の先輩方、昭和６年に田口一郎氏、昭和 11 年に伊藤愿氏が訪ねたところで、カンチェンジュンガの迫力はもとより、エヴェレスト、マカルーなどネパールの山々が望め、尾根上には適当な間隔でロッジもある。我々はダージリンから車で一日行程、標高 3,600m のところにあるサンダクプーの山小屋への一泊行を試みた。

朝８時、小型バスでダージリンを発ち、尾根上の舗装道路を西に向かってシンガリラ尾根との按部にあるマネバンジャン村でジープに乗り換えた。何とジープは 57 年式のランドローバーのディーゼル車で車齢 50 歳を越える。メンテナンスを信用して乗り込むしかない。

我々５名にガイド、ローカル・ガイド、コック、助手、運転手２名の計 11 名が２

台に分乗して、古い石畳の尾根道の悪路、スリルに満ちた急坂をひたすら登った。実は翌日の帰路、彼らは下りと言えばことごとくエンジンのフューエル・カットで運転する。これに慣れるというか、あきらめを付けるまでは恐怖そのものだった。

田口さんや、伊藤愿さんの頃はもちろんマネバンジャンよりもっと手前の集落から徒歩だったそうで、今もインド人や白人のトレッカーがひたすら歩いているのに時折出合った。

国境稜線上には、ところどころにインド陸軍の兵舎があり、機関銃など物々しいが暇そうな下士官が話しかけてきたりした。遅い昼飯をカラポカリ（黒い湖）のロッジでとった後もヘヤピンカーブの急登がこれでもかと続き、疲れ果てた夕暮れ時にサンダクプーのロッジ“ Hotel Nomo Budda” に到着。木造２階建てで、トイレ付個室が予約されており申し分なし。本来自炊なのだが、贅沢な我々はコック付きでうまいものを喰った。しかし寒かった。備え付けの夜具の他にガイドが準備してくれた寝袋＋湯たんぽで何とか寝ることが出来た。帰国後にインドは寒かったというと驚かれることが多かったが、北インド、ヒマラヤの麓、3,600 mの高地の 11 月後半となると暑いインドという常識は通用しない。

翌朝は暗いうちから尾根上のピークで日の出を待ち、期待に背かぬヒマラヤの景観を堪能した。北にはカンチェンジュンガ山群がダージリンのタイガー・ヒルよりいっそうの迫力で、西にはエヴェレスト、マカルーなどネパールの幾つかのジャイアントが、東にはチョラリと思われるピークを含むブータンの山々が見渡せた。もはや登頂意欲も湧かない老人が（南井さんには一寸失礼かも？）、遥か日本からこれを見るためだけにやって来たのだ。ＴＶのドキュメンタリーに出てくるタレントのように、「ワー」とか「キャー」も、「すごーい！」も「最高！」もない。皆黙して語らず、こんな贅沢が許される世の中に感謝した。

ｼﾝｶﾞﾘﾗ尾根ｻﾝﾀﾞｸﾌﾟｰにて

因みに、昭和６年にこの尾根に立った田口一郎先輩は、おそらく石崎光瑤、鹿子木員信両氏に次いで登山者の目でこの山岳景観を眺めた３番目のの日本人だったのではないか。田口さん、伊藤愿さんのシンガリラ尾根の足跡に興味を持ったので、文末にその抄録を添付しておいた。

シッキムの旅

シンガリラ尾根から一旦ダージリンに戻った翌日から、シッキム州（旧シッキ

ム王国）を訪ね、山麓のリゾート？ペリンと州都のガントクにそれぞれ２泊した。標高差１０００ｍを何度もアップダウンするシッキムの田舎道のドライヴは心地よい。お化けのような大型ポインセチアの群落と桜の花の共存にビックリしたり、刈り取りの済んだ棚田の風景に日本のそれを思い出したりの旅だった。シッキムに入ると所謂インド系の人は数少なく、土着の先住民レプチャ族か（我々の気立てのよいガイドのアーサーも運転手のタマンもともにレプチャ族）、チベット系のボーティア族の顔立ちが多く、美人揃いの女学生（中学生くらい）が、日本から来たというと、ケイタイで一緒に写真を撮りたがったりして、その言動も我々日本人には居心地が良い。

ペリンは現在車でカンチェンジュンガにもっとも近づける尾根筋の町。いくつかのホテルがあり、どの宿からも山が眺められる。我が宿 “Newa Regency Hotel” はあまり冴えないホテルで、暖房が効かず、シャワーの湯が出ず、それにビールがないという決定的な欠陥宿だった。それでも、ビールの方は何とか外部調達でき、食堂のテラスからの山の眺めが良いので、そこにテーブルを出させてとった朝食の気分の良さと、ここのシェフの気合の入った料理で帳消しとしよう。

実はこの旅を通じて２回感激的に美味い物に出くわした。いずれもペリンからガントクへの道中で、Lewzing という村の茶屋で喰ったモモ（チベット餃子）と、ティスタ川のダム工事現場の Singtam というところでの昼食に喰ったカレーピラフの味が絶妙で忘れ難い。

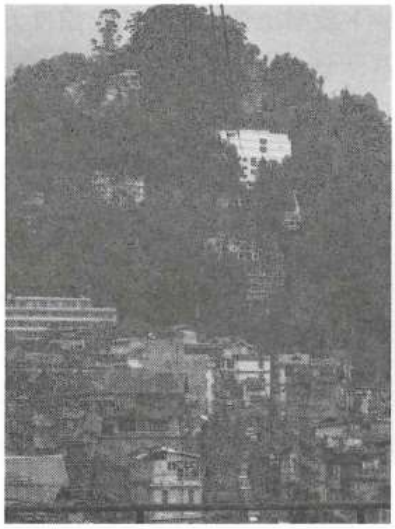
ﾍﾟﾘﾝの宿から

シッキム州の州都ガントクの宿は “Orange Village Resort” なる高級ホテルで、部屋も良く食堂も申し分なし。ただし都心からやや外れた谷底にあり、尾根筋上部に開けた市街地へ行くのには便利ではない。人口約３万人のこじんまりした市街地だが、大きなバザールは買い物客であふれ、チベット色豊かなラマ教の僧院、更にはチベット研究所などが市内に点在している。旧シッキム王国（1975年にインドに併合）の王宮は丘の上に静かに佇んでいた。シッキムがまだ独立国だった 1960 年代にここの王家に嫁いできたアメリカ人女性は今やいずこに。当時その結婚式の様子を伝えた National Geographic 誌の写真を思い出した。

傾斜地の市街を見下ろす尾根上にはロープ・ウェーがかかる。晴れていればヒマラヤを眺めての空中散歩となるところだが、雲の多い日だったのでそれは果たせなかった。このロープ・ウェーは最近大事故があったとかで、ガイドのアーサ

ーは乗りたがらなかったので、我々だけで往復した。

シッキムを去る日は、ガントクを早朝に出て、ティスタ川沿いの国道をひたすら下っていくとやがて西ベンガルの大平原。シリグリ近くの渋滞に巻き込まれて空港のあるバグドグラへの道をたどると、インド本来の？姿に接した感じである。デリーへの国内便にチェックインした後、食堂でガイドらと別れて、我々のダージリンーシッキムの旅を終わった。



ｶﾞﾝﾄｸのﾛｰﾌﾟｳｪｲ

カルカ―シムラ鉄道/シムラ訪問の旅

シッキムから一旦デリーに帰った後、鉄道で北上し、英国統治時代のインド政庁の夏の首都シムラを訪ね 2 泊した。この移動は 10 時間以上の列車旅で、後半は山岳鉄道として世界遺産に登録されているカルカ―シムラ鉄道である。

早朝旧デリーのサライ・ロヒーラ駅発。この駅付近はなかなか大変なところで、ちょっとガイドなしではよう行かん、といった感じである。人ごみの駅構内もプラットフォームにもドンゴロスに包まった人間がごろごろと寝ており、踏んだりけつまづいたりせぬように細心の注意を要した。急行「ヒマラヤ・クイーン号」はインド国鉄の本線上朝焼けのインド平原をひたすら北上し、約 5 時間半で山岳鉄道との乗り換え駅カルカに着く。この間、駅も車窓も車内の人たちも、ダージリンやシッキムとは全く異なるインドらしいインドそのものというべきか。

ｶﾙｶｰｼﾑﾗ鉄道

標高 656mのカルカ駅から 2075mのシムラまで 96ｋｍの狭軌（762ｍｍ）登山鉄道は 1903 年に開通したもので、2008 年に世界遺産に登録された。シムラまでの所要時間 5 時間強、ダージリン鉄道と同様にこちらも観光客だけではなく、現在も地元の人たちの足として利用されている。豪華な 1 等車両は生憎連結されていなかったので、2 等車硬座での 5 時間は尻が痛くて閉口したが、カーブの連続、ディーゼル車に牽引されてぐいぐい高度

を上げる車窓の眺めは退屈することがない。途中駅での対向列車との待ち合わせや、物売りの風情もまた絶好のシャッターチャンスとなった。ダージリンよりも20年後の敷設のせいだろうか、トンネル、橋梁、ループも多く、トンネル数１０３、橋梁８００、カーブ９００などという数字がある。ラック・レールは無い。

シムラは現在ヒマチャル・プラーデシュ州の州都であり、人口２２万人、インドの三大避暑地の一つとなっている。その昔、各国の登山隊、探検隊が準備・旅支度を整えたところ。我々登山・探検オールドフアンには実に気になる存在で、一度は訪ねて見たいところだった。

夕闇せまる午後５時過ぎに到着したシムラ駅の駅前広場は、出迎えの自動車でごったがえしていた。運ばれた“Hotel Springfields”は、尾根筋に建つ木造コロニアル建築の２階建て。全員眺望の利く部屋を確保出来て大満足である。ちゃんとしたダイニング・ルームがあり、かってはジャケット・ネクタイ着用が常識だったような雰囲気だが、今のわれわれはそんなことお構いなし。それでも別室でくつろいでいるところへ、恭しくメニューを持ったボーイがオーダーを取りに来た。翌日のランチには芝生の庭のテーブルにビールとドライカレーを運ばせたが、これにも全員満足した。

シムラ見物の（我々にとっての）目玉はヒマラヤを眺めるの郊外ドライブで、Kufri(2600m)という昔の馬車駅まで往復した。大ヒマラヤ山脈（固有名詞の”The Great Himalaya Range”）が遠望できたのだが、当地のガイドがあまり山の知識なく、何を聞いてもグレート・ヒマラヤの一点張り、当方も準備不足で地図もなく、山座同定出来たのはシブリン（6,543 m インドのマッターホルン？）のみだった。後で調べたら、西部ガルワールが見えていたはずで、ガンゴトリあたりは見えていたのだ。

シムラの市中見物では、やはり大英帝国の植民地の雰囲気が色濃く感じられ、旧大蔵省の建物などはそのままだったが、旧インド政庁総督の事務所と館はガードマンがいて入れてくれなかった。

ｼﾑﾗの町からｼﾌﾞﾘﾝ

デリーへの帰途はさすがにあの長い汽車旅は選ばず、稜線を削り取ってこしらえた危なっかしいシムラ空港からKingfisher Air で飛び、左機窓に連なるインド・ヒマラヤの山々を眺めてこの度の「インド山見遊山」を締めくくった。

（2011年７月）

追　記

カンチェンジュンガ山麓シンガリラ尾根

戦前の甲南二先輩の足跡（抄録）

昭和６年（１９３１年）田口一郎
出典：田口一郎「パルートへの旅」日本山岳会『山岳』27-1（1932）
田口一郎氏(1911～41)は昭和６年甲南高校卒。東京大学に進んだ。この旅は東大一年生の秋のこと。

９月１３日　ダージリン着（ベルヴュー・ホテル泊）。サーダーのニマ・テムパを雇用。

１４日　ダージリン滞在。人夫５名(内４名女）雇用、先発させる。

１５日　ダージリン－(車)－車道終点のシマナ・バスティ・・・マネバンジャン・・・トングルー（泊）。

「一寸霧が晴れた瞬間、遠く入道雲の上に夕陽をあびて紅く染まった氷雪と、岩は茶色に、三つの巨大なギザギザが浮んでいる。－－－カンチェンジュンガだ！－－僕は夢中だった。ズシンと胸に大きなショックを受けた」

１６日　トングルー・・・ゲイリパス・・・カラポクリ・・・サンダクプー(泊)

１７日　サンダクプー・・・サバルガム・・・パルート(泊)

「－－－しばしば針葉樹の中に入るが、その他はみな一寸したお花畑の中を行く様なところだ。ポーター達は隊伍をととのえてその美しい草の中を一寸ヨーデルの様な感じのする 歌を歌いながら行く。－－－暖かい日はさんさんとふりかかって、今日一日程楽しい日はなかった」「ジャヌーはまたなんとひどい山なのだろう。てんで登れそうな所を見せない。否そればかりでなく見ているだけでも恐ろしい山だ」

１８日　シンガリラ峯に向うも雨となり引き返し・・・サンダクプー(泊)

１９日　サンダクプー・・・カラポクリ・・・ゲイリパス（泊？）

２０日？　・・・マネバンジャン・・・シマナ・バスティー(車)－ダージリン着

「今日はシニオルチュが良く見える。『世界で一番美しい山』はさすがに美しい」「この度は自分にとってはとんでもない大名旅行だった」

昭和１１年（１９３６年）伊藤愿
出典：伊藤愿「滞印日記抄」甲南高校山岳部『部内雑誌』VII-1(1937)
転載：松方恭子編『妻に送った九十九通の絵葉書－伊藤愿の滞欧日録』清水弘文堂書房（2008）

伊藤愿氏（1908～56）は京都大学学士山岳会のＫ２登山の許可申請と下準備のために単独渡印した折にダージリンを訪れ、シッキム入国を試みたが果たせず、シンガリラ尾根に足を伸ばした。（同行者斉藤氏：横浜正金銀行カルカッタ勤務？）

１１月７日　夜行列車でカルカッタ発。

８日　早朝シリグリ着、自動車でダージリンに向かう。途中クルセオンで朝食。

グームの町を過ぎたあたりでカンチェンジュンガを望む。

「グームの町をはずれるや否や、真北に当たって素晴らしい景観が浮び上ってきた。

朝霧の上に東半面に朝日をあてて、山ひだをくっきり示したカンチェンジュンガの威容は美しい限りだった。冷たい空気がひたひたと押し迫ってきて、体がすっかり冷えた頃、ダージリンのエヴェレスト・ホテルの客となる」

ダージリンでシッキム入国の許可が出ぬこと確認。これを断念してファルート行きとし、人夫を先行させる。９日　ダージリン―(車)―シマナ・バスティ・・マネバンジャン・・トングルー(バンガロー)泊。「立派な小舎だ。ベランダの附いた、壁の厚い堂々たる平屋建ての一棟、炊事場、番人の家は別棟になっている。寝台の入った寝室にも、食堂にもファイア・ピースが拵えてある。唐檜らしい薪がくべられて赤々と火が燃えている」

１０日　トングルー・・・サンダクプー（バンガロー焼失のため仮小屋）泊。

１１日　早朝エヴェレスト、マカルー、チョウオユー、ジャヌー、カンチなど展望。「小舎の後の小高いところへ上って、むさぼる様にして此の景観を凝視する。まるでどう云う様にしたら心ゆくまで眺められるかと一丁度子供がお菓子の山を前にして、さてどれから食べたらよいかと戸惑いしている様に」サンダクプー・・・ファルート（バンガロー）泊。

１２日　ファルート滞在。曇天。印度人役人一行と同宿。

１３日　晴れた朝ファルート峰往復、頂上より山々展望。ファルートから谷へ下るルートをとる。ファルート・・・シリ・チュ（造林小屋）泊。

１４日　シリ・チュ・・・ブドワリ（昼食）・・・ゼピー（バンガロー）泊。

ネパール人の祭りに出くわし踊り見物。

１５日　ゼピー・・・（ポニーを雇い1000m の登り）・・・ダージリン（エヴェレスト・ホテル）泊。

目次

ヒマラヤの青い空、白く輝く秀峰群に魅せられて

佐野　方則（昭和41年・新高）

私は甲南高校の3年間だけ山岳部に在籍しましたが、苦しい山行の中にも山の魅力を教わったように思います。その頃は写真などで見かけるだけの海外の山々に直接接することが出来る時代となり、私も2008年3月、還暦でリタイアしてから海外旅行の傍ら、本格的に海外トレッキングに行くようになりました。（ロッジ泊は夫婦で、テント泊は一人で）

それまでは、スイスアルプスやニュージーランドでのハイキング程度と、初めてのヒマラヤとして、海外旅行で利用していた西遊旅行で、2本のツアーコースを組み合わせて、航空機、宿泊、食事、ガイド・ポーターなどすべて含んだ個人旅行として手配してもらい、2002年12月21日～翌年1月6日まで在職中でしたが休日の日並びが良く、17日間の行程でアンナプルナ方面のトレッキングに行きました。

ポカラから山岳飛行でジョムソン（2743m）へ、ヒンドゥー教、チベット仏教の聖地ムクティナート（3798m）を往復し、アネハヅルのヒマラヤ越えで有名なカリ・ガンダキ川を下り、タトパニ（温泉）からダウラギリ、アンナプルナ山群の好展望地ゴレパニ峠、プーンヒル（3198m）へ登り、タダパニ～ガンドルン～ランドルン～ダンプス～ポカラへ戻りました。

ゴレパニ峠からの特異な形状のダウラギリ山群は目に焼き付き、2010年12月に別ルートから再訪することになりました。タダパニでは昨夜来の雪も止み、アンナプルナサウスやマチャプチャレをはじめ、あたり一面真白に輝く新年を迎えたのが印象的でした。

なお現在では、ムクティナート～ジョムソン～ベニは自動車道路が出来ており、乗合ジープが利用できるそうです。

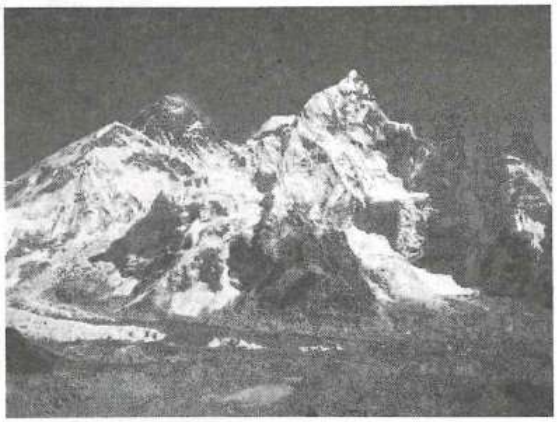
リタイア後すぐの2008年3月21日～4月1日まで12日間、西遊旅行のツアーでパキスタン北部のフンザへ、アンズの花とカラコルムの山々を見に行きました。

春にしては天候に恵まれ、各地で満開のアンズ、リンゴ、アーモンドなどの花々とヒマラヤ山脈最西端のナンガパルバット、カラコルムのラカポシ、ディラン、シスパーレなど7000mを超える純白の秀峰群を歩かずに堪能でき、ヒマラヤ、カラコルムにますます魅せられていくことになり、この後カラコルムハイウエイを何度か行き来することになりました。

同年11月5日～12月3日まで29日間、エベレストに迫る「エベレスト街道」のト

レッキングに行きました。ネパールへの往復はバンコク経由のタイ航空を、カトマンズでの滞在はタメル地区の「フジホテル」を利用し、山岳飛行、ガイド・ポーター、ロッジ、食事などはタメル地区の「すみれツアー」に手配を依頼しました。

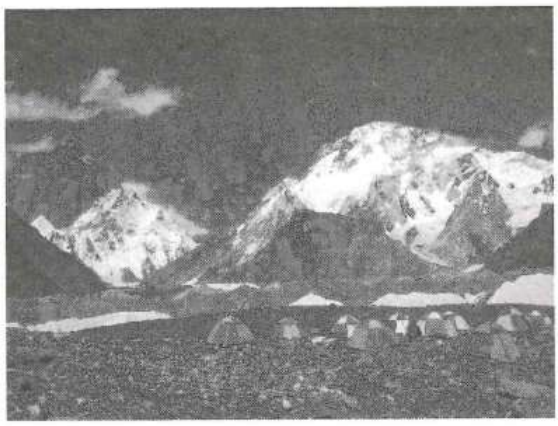
カトマンズから山岳飛行でルクラ（2840m）へ、ナムチェを経由し、ドゥードゥ・コシ沿いにゴーキョ（4750m）へ、ここで妻が風邪気味で高山病の兆しが出てきたようなので、ゴーキョ・ピークは諦め、すぐ下山、ポルツェ村（3810m）で1日休養し、イムジャ・コーラ沿いにパンボチェ～ディンボチェ（4350m）、ここで妻を残し、ロプチェ経由でカラパタール（5545m）へ到りました。ゴラクシェプからカラパタールへの 5000mを超えた高地の登りは息苦しいものでしたが、鋭く尖ったヌプツェを前衛にしたエベレストを間近に仰ぎ見、また眼下にクーンブ氷河をはじめ多くの氷河が流れ、タムセルク、アマダブラムなどの来し方の山々が 360° 展開した素晴らしい景観に、涙が出そうなほど感激しました。



右:ｴﾍﾞﾚｽﾄ(8850m)　左:ﾇﾌﾟﾂｪ（7861m）
下:ｸｰﾝﾌﾞ氷河　　ｶﾗﾊﾟﾀｰﾙにて

なお、帰国に際して、タイの騒乱によるバンコクの空港閉鎖に遭遇し、混乱の中、すみれツアーの尽力により急遽ドーハ経由のカタール航空に振り替えたおまけも付きました。

2009年8月28日～9月21日まで25日間、西遊旅行のツアーでカラコルムＫ２大展望バルトロ氷河トレッキングに行きました。



左:K2(8611m)　右:ﾌﾞﾛｰﾄﾞﾋﾟｰｸ(8047m)
ﾊﾟｷｽﾀﾝ・ｺﾝｺﾙﾃﾞｨｱ(4650m)にて

イスラマバードからカラコルムハイウエイをたっぷり2日かかりスカルドゥへ、ジープで悪路を最奥の村アスコーレ（3048m）へ、ここから途中の休養1日を含め8日間でバルトロ氷河の最上流部コンコルディア（4691m）へ、ここに到る氷河上では、ブロードピーク、ガッシャーブルム山群、マッシャーブルム、ムスターグタワーなどが次々と姿を現し、疲れも忘れ興奮気味でした。コンコルディアでは3泊しましたが、テントを開けると眼前にＫ２、ブロードピークが聳え、その右側にはガッシャーブルムⅣ峰、後方にはバルトロカンリ、チョゴリザと迫力のある巨峰群が続き、ま

さに別天地でした。カラコルムは夏季がシーズンで、麓では暑さとの戦い、氷河上部の朝晩は氷点下と温度差が激しく行程も長いですが、アップダウンも比較的少なくヤギを最終地まで連れて行くなど食事内容も贅沢なトレッキングでした。

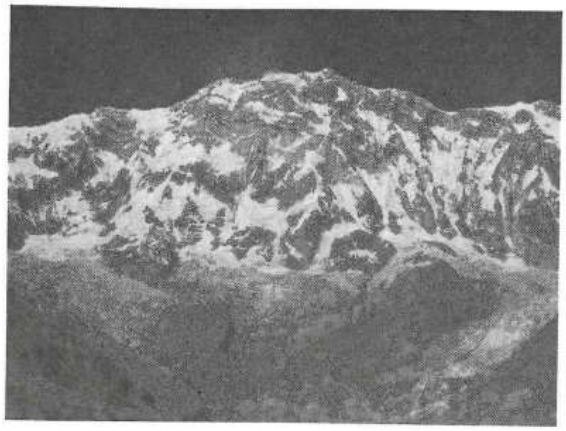
2010年7月10日～31日まで22日間、西遊旅行のツアーでインド最北西部のラダック～ザンスカールへトレッキングに行きました。

ラダックのラマユル（3500m）から峠をいくつも上り下りしながら（最高地点5000mのシンギ・ラ）村々を経由して、ザンスカールの中心パドゥムまで荒涼とした雄大な景観の中、各地のゴンパ（チベット仏教の僧院）を訪ねたり、野バラや高山植物にも目を奪われながらの変化に富んだカルチャートレッキングでした。

このコースは、同期の南里君が1977年9月に学術調査で踏査した（逆コース）当時は秘境でしたが（同君著「全世界紀行」P.118～）、今ではポピュラーなトレッキングコースのようで、ラダックの中心レーには欧米人トレッカーが溢れておりました。

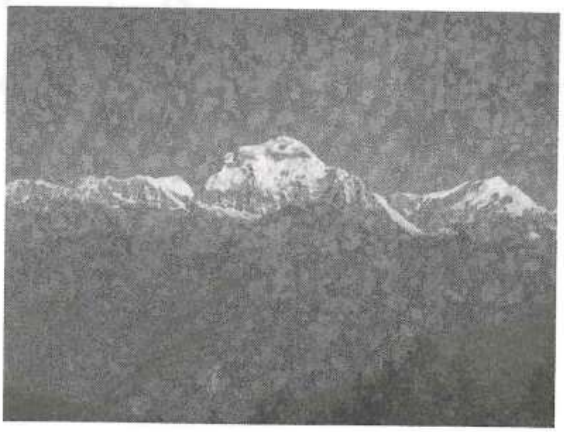
なお、帰国後まもなく、この地方やパキスタン北部で大雨が降り、多くの道路や橋が寸断され人的被害も出ました。

同年11月30日～12月21日まで22日間、すみれツアーでガイド・ポーターの手配のみ依頼し、カタール航空で8年ぶりにアンナプルナ方面へトレッキングに行きました。



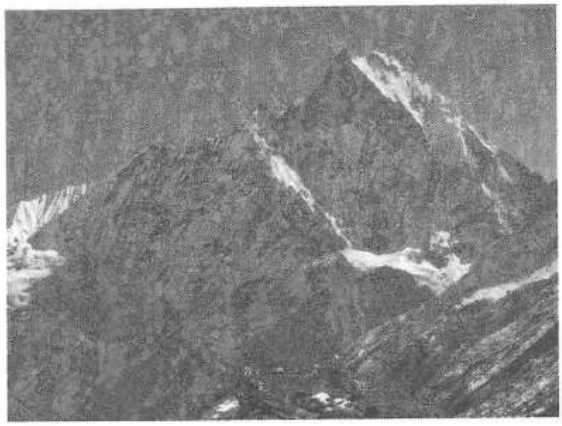
ｱﾝﾅﾌﾟﾙﾅⅠ峰(8091m)南壁
ｱﾝﾅﾌﾟﾙﾅBC(4130m)にて

今回は、ポカラからタクシーでナヤプル（1025m）へ、ダウラギリの好展望地ゴレパニ峠、プーンヒル（3198m）を経て、タダパニ～チョムロンからモディ・コーラを登りつめマチャプチャレB.C.そしてアンナプルナⅠ峰やサウス、マチャプチャレとその山群に囲まれたアンナプルナB.C.（4130m）まで行き、帰路はジヌーで川沿いの温泉に入ってさっぱりし、ランドルン～ダンプス、景色が良いのでここで2泊し、道路が出来ていたのでジープでポカラへ戻りました。



ﾀﾞｳﾗｷﾞﾘⅠ峰(8167m)　右：ﾄｳｸﾁｪﾋﾟｰｸ

B．C．は、ヒマラヤの懐深く入り込み、圧巻の氷壁・氷河を持つ迫力の巨峰群に囲まれた、まさに内院・聖域と呼ばれるに相応しい別天地でした。 急で長く続く石段の上り下りなど厳しいところもありましたが、10～11 月のハイシーズンを避けたこの時期は、トレッカーも少なくなり、連日の好天の下、静かで快適なトレッキングが楽しめました。途中で出会うのは、西洋人、中華系、そして特に目立ったのが韓国、日本人には数名程度で、昨今の経済状況を反映しているかのようで、少し寂しい感じがしました。



ﾏﾁｬﾌﾟﾁｬﾚ(6693m)
ｱﾝﾅﾌﾟﾙﾅ BC(4130m)にて

2011 年 4 月 7 日～24 日まで 18 日間、前回と同じ形式で「世界で最も美しい谷のひとつ」と称されるランタン・コーラのトレッキングに行きました。

カトマンズからバスでシャブルベンシ（1460m）へ、ここから登るにつれ景観が移り変わる谷をつめて行き、最奥の村キャンジン・ゴンパ（3800m）に到ると、ランタン・リルンを始めとした、6～7000m級の白き秀峰群を間近に望む圧巻の景観が広がり感動的です。また、この時季は、途中 3000m付近で、色鮮やかな赤・白・ピンクの石楠花が咲き誇り、目を楽しませてくれました。キャンジン・ゴンパで 5 泊し、日帰りでランシサ・カルカ（4125m）やキャンジン・リ（4550m）などのビューポイントを訪れました。帰路には、谷の途中から山の上の大きな集落トゥロー・シャブル（2210m）へ登り、ガネッシュ・ヒマール山群を眺めながら、松と石楠花林の快適な山腹道をドゥンチェ（1950m）へ下りました。

同年 6 月 10 日～7 月 1 日まで 22 日間、西遊旅行のツアーでパキスタン北部と中国との国境「地図の空白地帯」と言われるシムシャル渓谷に暮らすワヒ族の人々の伝統的な文化、風習を間近に感じるカルチャートレッキングに行きました。

カラコルムハイウェイの上部フンザ、パスー村から、8 年前に開通したシムシャル川沿いの険しい道をジープで 4 時間のシムシャル村（3100m）へ、ここから春（5/20～6/20）、秋（9/20～10/20）の放牧地 シュイズヘラブ（4350m）まで 3 泊 4 日、ここから夏（6/20～9/20）の放牧地でシムシャル・パミールと言われる シュウェルト（4670m）への民族大移動（クッチ）に参加しました。茶系一色の荒涼とした渓谷から広々とした緑のパミール（ワヒ語で草の豊富な楽園を意味）に到ると、真に別天地のような感じがします。急な登り下り以外は、ヤク（高地の牛）に乗ってのキャラバン（ヤクサファリ）でしたが、滑りやすい急斜面、特に下りは緊張を強いられ、足に力が入り太ももがパンパンに張りました。

そのような急な崖では、ヤクの４本足（4輪駆動？）が頼もしく見えましたが、つり橋を渡るのを嫌がる（怖がる）一面も見られました。

帰路は別ルートで、5346mのショボディン峠を越えましたが、峠からのカラコルムの白き峰々の360°のパノラマは素晴しいものでした。

またこの時季、足元には多彩な高山植物が咲き始めていました。非常に乾燥している為か、夜露がまったく降りず、ポーター達が露天で寝袋に包まって寝ているのも驚きでした。

2010年１月の地震による地滑り、崩壊により、フンザ川がせき止められ22ｋｍもの湖が出来、その間のカラコルムハイウェイも沈んでしまったので、ボートで渡るようになっていました。

2011年11月には、21日間のアンナプルナ山群の外周を巡るトレッキングを計画しています。5416mのトロンパス越えが待ち受けていますが、途中でマナスルも展望できるようで楽しみです。

また、機会があればインド・シッキムとの国境に聳えるカンチェンジュンガ展望トレッキング（5140mのＢ．Ｃ．へ）にも行きたいと思い、地図を手に入れましたが、テントも必要でアプローチも長く１ヶ月位かかるようです。

ツアーの参加者にはキリマンジャロの登頂者も多いですが、私には興味がなく、ヒマラヤやカラコルムの麓に点在する村々をたどりながら、真青な空に白く輝く秀峰群を眺めるトレッキングに惹かれています。

目次

♭♭　共に訪ねた思い出の山々　♭♭

赤松　恵美子

赤松二郎に山嶽寮への出稿のご依頼をいただきましたが、今回は私が山へ導いてくれた夫への感謝の想いを綴ってみることに致しました。

旧制高校山岳部時代の夫(14 期理)は主に北アルプスで岩登りばかりしていたとの事、その後の戦争中は山どころではない時代でした。子育ても終わって初めて私を山に連れて行ってくれたのは 1969 年 8 月に登った白山でした。続いての立山登山は 11 月初旬というのに一面の銀世界で、思わず「私、生きていてよかった！」と申しますと、それなら三千米級の山を次々に引っ張り上げてやろうと申し別山から谷を隔てて聳える剣岳を眺め、いつか一緒に登ろうと言ってくれました。それからは主に上高地を出発点に北アルプスの山々を縦走するようになりました。

そのうちに五万分の一の地図で日本に 24 座ある三千米以上の山々の頂上をすべて踏むことを目標に南アルプスにも足を延ばすようになりました。

その後約束通り、剱岳に馬場島から登り早月尾根を越え前剱を経て下山しました。

山の魅力は爽やかな山の冷気と可憐な高山植物や小鳥の啼き声に出会えることです。山では山小屋を出たら呼吸に合わせ同じペースでゆっくり(ネパール語でビスタリ、ビスタリ)歩く。途中 5 分ほど立ち止まり休憩、長休みはしない、あとは歩きながらウエストポーチに入れたチョコレートやチーズを食べる、沢に出会えばオアシスとばかり顔を洗ったり水を飲んだりしたあと、手拭をぬらして首に巻いて歩く、ガレ場の歩き方、足をのせる岩の選び方などを仕込まれました。個人装備は最低 1 リットルの水と雨具、後は着替え少々と非常食、果物があればご馳走です。洗濯は出来ませんから着て乾かせといいます。私は地図を読むことも天気を読むことも出来ませんのでひたすらはぐれないようについて歩くだけ。音を上げないのが私の唯一のとりえでしょうか。

夫の母を見送った後 1980 年 4 月には山男憧れのエベレストを見たいとネパールへ出かけました。まだ雨期の残るこの時期を選んだのはネパールの国花、石楠花（ラリグラス）の美しい季節だからと言う事でした。大木に咲くピンクの濃淡の花はとても美しく、高度が上がるにつれて上へ上へと咲いてゆきます。ヒマラヤは八千米級の山々が連なる所です。

ネパールの首都カトマンズから2800米のルクラまで14人乗りのプロペラ機で飛ぶのですが、ルクラは山の斜面に向かって着陸するので、やり直しが利きません。気象が安定するまでフライト待ちです。操縦席の横から空中に浮かんで見えるエベレスト山群を見て恋人に逢ったようだと申しました。無事ルクラに着くと私たち二人の為にサーダー、コック、キッチンボーイ、シェルパニ（女性のシェルパ）3人計6人と、高所の牛とヤクの相の子のゾッキョ1頭に振り分け荷物、シェルパニはドッコというかごに食料、テント、炊事道具、われわれのザックなどを放り込んで額にひもをかけて運びます。宿泊地に付くとテントが張ってあり、シュラフザックにもぐりこんで寝るのですが、朝は“グッドモーニング”と言って盆ザルの上にトーストジャム、ミルクティが運ばれて来て、朝食が済むとシェルパたちはテントを畳んで、昼食の設営のために先に出発し我々はサーダーと一緒に小さなザックひとつで後から行きます。食事はご飯やホットケーキ、モモという餃子のようなもの、卵料理、野菜、ジャガイモ、豆のスープ、時にはトリなど。途中ナムチェバザールでは土曜日に市が立ち何日もかけて行商の人が集まってきます。そこではサーダーの家に泊めてもらいました。一階は家畜小屋、梯子を上がった二階が台所と居住区、燃料は牛のフンを壁に貼付けて乾かしたもの、煙突はありません。夜中にトイレに行くには牛のいる一階を通って外に出て崖に差し出した板の上です。僧院のあるタンポチェでは少々の寄進をして旅の安全を祈りました。ペリチェからロブチェに行くと四千米を越えて空気が薄くなるので食欲も落ちて食べられなくなり眠りも浅く、すぐ目が覚めてしまいます。5400mのカラパタールあたりまで行き念願のエベレストを拝むことが出来ました。

カトマンズへ降ってからアンナプルナ山群のあるポカラへ飛びペワ湖畔のロッジに滞在してカトマンズに戻りました。ネパールは多民族の国ですがエベレスト（ネパール語はサガルマータ）方面のシェルパ族はラマ教、ヒンドゥー教徒の多いカトマンズに着いた時は異文化に圧倒されました。カースト制の厳しい所ですがカーストの高い人ほど戒律も厳しくうまく出来ているようです。サリーも絹から祖末な木綿まで、道ゆく人を眺めるのも興味をそそられるものでした。お供え物をする人々で寺院は賑わい生け贄の風習もあります。食事はダルと呼ばれる豆のスープとご飯、トルカリというカレーを右手で上手に食べます。左手は不浄なものとされています．牛は神様ですから町をうろついても誰もとがめません。食べるのは鶏か山羊、水牛です。一ケ月滞在し帰国しました。

同じ年の7月には四千米級の山々の連なるヨーロッパアルプスのトレッキングに出かけました。ここは文明国、ポーターなどいませんからザック一つで安宿を探しては泊まり、移動は鉄道。今のようにユーロはありませんから両替と時刻表を見る事。鉄道は日本で買って行ったスイスのホリデーカードとユーレイルパスで乗り放題ですからホテル代と食事だけ現金が必要です。私は読む事も話すことも出来ま

せんから迷子にならないようについて歩くだけです。チューリッヒからルツェルン経由でグリンデルヴアルトで下車、駅前で客引きをしていた中島氏の案内でホテルベラリーへ、中島氏は写真家でベラリーのオーナーのシルトさんの娘婿でもあるので便利。何日か滞在するうちにシルトさん一家と親しくなり台所など見せてもらいました。朝食はコンチネンタルでパンとジャム、バター、チーズ。ドイツに入るとそれにハムかソーセージがつき北欧に行くと更にテリーヌやシンケン類が増えて流石バイキングの国。

登山電車でユングフラウヨツホに行き雪の舞うアレツチ氷河を見て帰り、クライネシャイデックから下山の電車を途中で降りて小人でも出て来そうな森の中を歩いて牧場に出るとカランコロンとカウベルの音がして放牧されている牛に出会い手を出すとザラザラした舌で吸い込まれそうになります。かなり上の方からでもホテルのすぐ下の白い細い滝が見えてそこを目指して帰ります。スイスに来てから雨続きでヨーロッパにも梅雨があるのかしらと思ったものです。いっそ南の方へ行ってみようとイタリー領に近いロカルノまで行きましたら忽ち晴れてきて人々の表情まで開放的になります。車中で折り紙で鶴を折ってあげて親しくなったスイス人の家族とは長い間カレンダーの交換が続きました。

次にマッターホルンの近くのツェルマットの駅前その名もホテルバーンホフに泊まりました。ここはガソリン車が入れず電気自動車か馬車のみ。毎朝観光用に山羊の群れがカランカランと首の鈴を鳴らしながら坂道を駆け抜けて行きます。跡には黒い糞が沢山残ります。三千米の氷河の中にあるゴルナグラートまで登山電車で行き雪の中を歩いて行く間マッターホルンは独立峯ですからどこから見ても絵になり、池には逆さ富士の様に山と自分の姿が映ったり気持ちのよいハイキングでした。マッターホルン北壁の登山道を少し登ったところのヘルンリーヒュッテまで登ろうとしましたが夕闇が迫り道が凍結してくるとアイゼンなしの登山は危険というので断念しました。途中可憐な高山植物の写真を撮ったり、道連れになった人とは夫の英語とドイツ語が役にたちました。下山の途中のテラスに眺めのよいレストランがあり必ずスイスの旗が立っています。犬を連れて歩く人も多くヨーロッパに行って羨ましく思うのは乗物でもレストランでも犬を連れて入れる事です。この辺り鉄平石で葺いた屋根が多く、道祖神のように十字架にマリア様の像が見られます。ベルンを経てローザンヌからモントルーへここはレマン湖の畔、シオンの湖上城を見物、有名な140米の大噴水のあるジュネーブへ船で行きフランス領のシャモニーへ、ゴンドラでエギュドミデイ氷河をを越えてエルフロンネルへ、ここはアルプス三つ目の目標のモンブランの見えるところ。イタリー領との国境でもあるところです。

ドイツ、ルクセンプルグを経てスエーデンのストックホルムへ、北へ向うにつれて白夜になり夜の列車待ちの駅で手紙が書ける程です。ここには日本の民族村のよう

なスカンセンにも行き興味深いことでした。いよいよノールウェイの最北端の駅ナルヴィックへの列車に乗りました。皆大きなザックを背負い犬まで振り分け荷物を背負っています。この辺り上高地でよく見る柳蘭が沢山見られますが土地は岩盤で大木はないようです。ナルヴィックに着いて小高い山に登って海を見下ろすと、ここまで来た目的のフィヨルドが見渡せます。ナルヴィックから船でフィヨルドの海をボードーへ、ここからオスロに行きムンクの美術館に、華のパリを一目みたいという私の願いでパリに行き私の生まれる前に父が留学していたというパスツール研究所にも行ってみましたら当時の写真と同じ建物があって驚きました。パリでは古城めぐりやルーブル、エッフェル塔など駈け足で廻り、ドーバー海峡の見えるル・アーブルへ、いよいよ最後の滞在地のアムステルダムではフォーレンダム村、チーズのエーダム村、ウインドミルの村など、ゴッホの美術館ではあの黄色い輝く色彩は太陽の光が横から射し込んで沈まないからだと夫は感激しきりでした。最後の夜は屋台で鰊の酢漬けと玉葱をパケットに挟んだ物とジュースを買って夕食にしました。この様に二人で歩く旅は安宿に泊まり昼食抜きが原則。今回は40日の旅でした。

1981年の6月に利尻岳に登り知床へ移動して雪の羅臼岳では頂上から遥か北方領土の國後島を眺め感無量でした。

1983年8月に針の木から白馬を越えて蓮華温泉まで一週間かけて後立山連峰を縦走しました。何度目かの挑戦です。

1988年5月屋久島にゆき淀川口から宮ノ浦岳に登り無人小屋二泊で樹齢7200年とも言われる縄文杉に出会った時は畏敬の念に捕われ暫く佇んでいました。

1996年8月には雪倉一朝日、雪倉は砂礫地帯にだけ咲く駒草が咲いています。朝露の水分で砂地に長い根をのばし何年もかけてやっと咲くのだとか。

1997年の金婚登山は黒部五郎で、初登山から28年、78才と71才でした。

2000年8月には最後の登山として上高地からいつもうっすら噴煙をあげている焼岳に登りました。前穂高岳からいつも見下ろしていたという奥又白の池へは早朝に徳沢を出て日帰りで往復しました。私には只薄暗い池でしたが、山行きの仕上げとして満足だったようです。

以来9年の年月が経ち91才と84才、来し方を振り返って生きております。

赤松恵美子

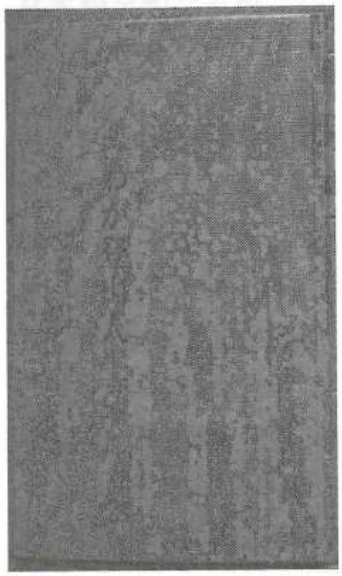
目次

図書紹介－１　　平井一正著『わが登山人生』

私家版（２０１０年）

越　田　和　男（昭和36年理卒）

平井一正氏（神戸大学名誉教授・甲南山岳会名誉会員）の前著『初登頂』―花嫁の峰から天帝の峰へ―（ナカニシヤ書店・1996年）が神戸大学定年退官直後の出版であり、本著は喜寿を過ぎ80歳になろうとしての出版である。



ヒマラヤ登山史に輝くチョゴリザ初登頂（1958年、26歳）に始まり、サルトロカンリ、シェルカンピ、クーラカンリ、チュルー、ルオニー（2003年、71歳）と続く著者の今や古典的正統派ともいえるヒマラヤ遍歴が、登山家としての生い立ちとともに語られる。

初登頂、未踏の山々にかけられた情熱と、教育・研究との間での葛藤がひしひしと読み取れる。日本山岳会の月報『山』（2010年12月号）に本会会員平井吉夫（昭和３２年新高卒）が書いた紹介記事の一部を引用しておく。

―登山家と学究という「二足のわらじ」をみごとに履きこなした著者の人生が、「まさに息つくひまもないと言ってよいほど、波乱万丈であった」のは、いずれの「わらじ」もおろそかに履かぬという意地と心意気のなせるわざであった。それはもうダンディズムと評してもよいであろう。―

また山を通じた心温まる内外、有名無名の人脈の広がりは著者ならではのこと。運転手、ハイポーター、連絡将校、そして登山家の有名どころではF．マライーニ、W．ボナッティ、中国の老朋友・・・・などなど。ヘルマン・ブール夫人（かつて著者がチョゴリザで発見したブールの遺品を届けた）を最近チロルに訪ねた折にはブールの最後のパートナーとなったK．ディームベルガーも同席した。

近年の甲南の仲間との辺境の旅と登山、スワート・ヒンズークシの山旅（1999年）、チベットの未知の山―ブーチャカンリ偵察行（2002年）も収録されている。

教育者としての国際交流への尽力も幅が広い。我らが母校甲南大学理工学部に中国人留学生いじめをするとんでもない中国人教授が居た（今も居る）などという内輪話も語られ驚かされる。

終章が2010年春の叙勲（瑞宝中綬賞）の慶事となるべきところだが、奥様がその4年前に他界され「亡き妻きよ子をしのぶ」となってしまったのは正に痛恨の極みである。　　（2011年6月）

目次

図書紹介―2　　『裸の山―ナンガ・パルバート』

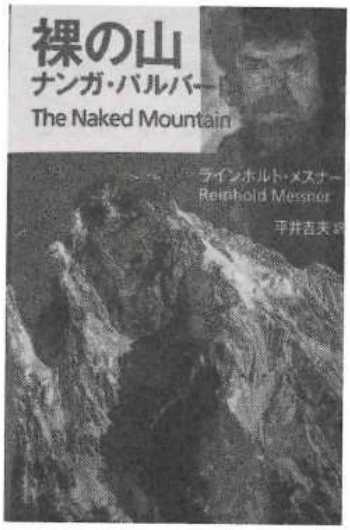
ラインホルト・メスナー著　平井吉夫訳

越　田　和　男（昭和36年理卒）

訳者平井吉夫（本会会員・昭和32年新高卒）のドイツ語邦訳書は既に50冊を越え、今やドイツ語翻訳の第一人者だが、山岳書といえるものの翻訳は初めてである。待ちに待ったというべきか。

原著 Reinhold Messner “ Der nackte Berg. NangaParbat ” Piper Verlag. Muenchen, 2002

1970年、ヘルリヒコッファーの率いるドイツ隊によるナンガ・パルバート隊に参加したメスナー兄弟は、難攻不落とされていた南壁・ルパール壁の初登攀に成功する。余儀なく選んだディアミール側への下山中、雪崩で弟ギュンターを失うというラインホルトにとっての栄光と悲劇の物語は、実はこれでは終わらない。



隊長ヘルリヒコッファーの意に反した頂上アタック、それにつづく北面への縦断、弟の遭難死、に対する相互の誤解は激しい怨念となり、長い年月に及ぶ訴訟合戦へと持ち込まれる。そして敗訴。1971年にメスナーが著した『ナンガ・パルバートの赤い信号弾』は出版差し止めと絶版を命じられる。

以後のメスナーの無酸素、単独による高所登山の超人的な業績への原点となったこの遠征につき、32年後の出版となったのが本書であり、還暦を迎えての彼の総括と、ヘルリヒコッファーの遺族との和解がその動機となっている。本書ではナンガ・パルバートの劇的な登山史もうまく纏められおり、これ一冊で魔の山ナンガのことが理解できる。

それにしても、メスナーの強烈な個性には圧倒される。平井がこの翻訳に取り掛かった頃、メスナーに会いに行かないか、と私を誘ったことがあった。本書出版後に開かれた日本山岳会での「メスナー兄弟のナンガ・パルバート横断をめぐって」と題した平井の講演のあと、今でもメスナーに会いに行きたいか、との私の質問に彼は「いや、もうええわ」と応えた。

本著の映画化：邦題「ヒマラヤ運命の山」

原題「Nanga Parbat」2011年夏国内封切り予定。試写会で観た訳者平井は、その感想を甲南山岳会のＨＰ掲示板で「ほぼ原作通りの、迫力あるいい映画でした。日本語の字幕が山と山用語をまったく知らない人が訳したらしく、いらいらさせられるだけでなく、ヴィリー・メルクルがヘルリヒコッファーの「弟」となっていて、これには悶絶するほど腹が立ちました。来春には一般公開されるという話を聞いていますが、日本語字幕がこのままでは、せっかくの優れた映画をぶちこわすことになるので、なんとか直させたいと思っています。」と述べている。（2011年6月）

追記：その後、結局平井の意見が通って、「日本語字幕監修：平井吉夫」として封切られることになった。

目次

2010年秋の集会の出欠はがきの近況欄

山本 三郎(名誉会員)

Ｐ・Ｐ・Ｋ ピンピンコロリを目標に毎日好き勝手な生活をしています。歩くことが苦手でしみじみと脚力の衰えを感じています。不良老人で映画サークルの会員になってボケ防止に役立っています。皆様の御健勝をお祈りします。

山岳部員が中高からでも入部するよう考えなければと思っています。南里先生に考えてもらいましょう。

平井 一正(名誉会員)

元気にしております。

鈴木 敬吾(特別会員)

当日予定が入っております。申し訳ありませんが出席できません。

関 集三(旧10理)

今年５月、満９５才を通過いたしました。８月初旬にはつくば市で応用化学連合の化学熱学国際会議が、私共が創設した日本熱測定学会が中心になり開催、４９ヶ国 約６００件の研究発表、天皇皇后御臨席、文部科学大臣出席、国際化学連合会長等の祝辞で行われ、老生も名誉組織委員長の一人になりました。老人の私にとってうれしい事でした。

佐野 源一(旧10)

集会の御通知戴きまして有難う御座居ました。源一は去る５月２０日に肺炎の為永眠致しました。お知らせが遅くなり申し訳御座いませんでした。甲南山岳会の皆様には色々とお世話になりまして、誠に有難う存じました。皆様の御厚情感謝して居ります。山岳会の御発展お祈り致して居ります。

佐野 源一 内 晃子

國府 雄次郎(旧17理)

午年男 馬齢を重ねております。旅好きの習性「雀百迄踊り忘れず」老夫婦貧乏旅行ばかりしています。但し体力低下はわきまえ、周辺に迷惑をかけるような失敗は起こさぬよう心掛けています。幸い今迄のところ致命的なのは起しておりません。これ若い頃山岳部で鍛えられ、旅の要領が身に就いたおかげと感謝しております。

武田 六郎(旧13理)

本人高齢の為外出不可能になりました。

赤松 二郎(旧14理)

私も今年で９０才になった。年と共に平衡感覚が悪くなり杖を手放すとすぐに

コケて元町で人だかりが出来ました。従って家に引きこもって居ります。皆様の御多幸を祈ります。

鷲尾 顕(旧 15 文)

残念乍ら欠席します。

伊藤 文三(旧 15 文)

日常生活にさしつかえない程度に動いていますが、遠出は」無理です。

熊谷 治(旧 19 文)

現在病気療養中のためなかなか出席できずすいません。皆様によろしくお伝え下さいませ。

伊藤 長次郎(旧 21 理)

ロックガーデンの慰霊の節にはお世話になりました。猛暑にめげず何とか元気にしております。

伊藤 五介(旧 24 文修)

元気にしています。

小原 耕治(大 31 経)

幹事役 毎度の事乍らご苦労様。お世話になります。宜しく。諸兄に会える事を楽しみにしております。

砂川 彰雄(大 32 経)

幹事役、いつも大変お世話になり感謝しております。今年の酷暑を乗り越え（半分は高遠に避難しておりましたが）元気に秋を迎え皆様にお会いできることを楽しみにしております。

宮本 侑(大 32 経)

元気にはしていますが、自動車・電車での長距離移動は苦しくなってきました。

鈴木 頼正(大 33 経)

相変わらず週２～３回のフィットネスと月２回のゴルフは続けています。今年は肺にグラが２つも生まれ心配してハイキング等は自重しておりました。特に飛行機や高所は駄目と言われましたが肺気腫の人でも飛行機に乗っていると言われ安心しています。気にせず頑張ります。

麻畠 重彦(大 33 経)

何時もご案内有難う御座います。長い夏お元気でお過ごしで御座いますか？実は家内が１０月１３日（水）～１８日（月）までメルシャン軽井沢美術館でフリー刺繍作品展をするとの事搬入の手伝いに駆り立てられております。

田辺 潤(大 34 経)

幹事の皆様ご苦労様です。この３月満７５才になったのを機に社長業を退任し、時々休んでは高遠で遊び、その他は結構忙しく、社長業とは直接関係の無い仕事をしております。その内に完全フリーになろうとチャンスをうかがっております。　　ガチャ

芦田 匡平(大35理)

アカン 今年も秋は欠席。皆様に宜しく。

鳥居 威男(大35経)

残念ながら日程上参加できませんが、毎日元気に暮らしております。皆様によろしくお伝え下さい。幹事様いつもお世話になっています。

越田 和男(大36 理)

7月にスロヴェニアのユリアン・アルプスの麓の村に3泊した。最高峰のトリグラウの北壁はただ眺めるのみ。その後オーストリアで1週間。ウィーンからグラーツ【田辺ガチャさんの60年前の留学地】更にザルツカンマーグートのハルシュタットに遊んだ。

廣瀬 健三(大36経)

老眼性？乱視の様で段差でつまづきますので、ハードな山行きは残念ですが止めています。(体力はあります) JACの「ゆるやか山行」に毎月参加しています。相変わらずテニス三昧の日々です。

藤安 賢一(大36経)

7月1日に脾臓の摘出手術を受けました。病名は悪性リンパ腫、体内に残るガン細胞を駆除する為引き続き化学療法を受けています。頭髪の脱毛があり、虚脱感で体に力が入らず悩ましい毎日です。皆様にはお元気な事嬉しい限りです。来春の総会でお会い出来るよう頑張ります。

大関 和夫(大37経)

夏のスキー場でテレキャビン・リフトを使い白馬五竜高山植物園へ行ってきました。下りは徒歩でエゾリンドウやコマクサの花を見ながら山を楽しみました。山は色々新しい喜びがあります。

柏木 宏文(大37経)

現在労健施設でお世話になっております。日々穏やかに暮らさしております。皆様の御健勝と御盛会ご成功をお祈り申し上げます。

柏木 宏文 内

二谷 和成(大38経)

今夏の猛暑で7・8月の近郊ハイキングはすべて不参加。8月末より念願のスイスアルプス3代名峰ツアーに参加し、トレッキングで逆さマッターホルンを眺めてきました。皆様とお会いすることが楽しみです。

飯田 進(大38経)

当日所用有残念ながら欠席します。皆様によろしく。

森本 全彦(大39法)

いつも駒王で例会の案内をいただきありがとうございます。病も完治し、若い方達に山へ連れていてもらい元気をいただいてます。来年は古希を迎え、いよ

いよ最終章に近づいて来ました。皆様方の健康をお祈り致します。

福田 信三(大39理)

山嶽寮６５号、秋の集会に間に合いそうです。これも順調に原稿が集まったおかげです。お寄せいただいた方々にお礼を申し上げますと共に次号に向けてドンドンお送り下さい。

武田 雄三(大39経)

元気でアッチコッチと徘徊の旅を楽しんでいます。

井本 洋(大40理)

元気にやっています。皆様によろしくお伝え下さい。

鵜木 洋(大40文)

服薬の量を減らして体調を整えているところです。わざわざ岡山まで会いに来てくれたＯＢの方、ありがとうございます！！

伊丹 徳行(大40法)

幹事さんご苦労様です。楽しくしています。８/２９は近鉄大和八木から和歌山県新宮まで６時間３０分のバスの旅。８/３０は和歌山県北山村の筏下りに乗って来ました。近日中に徳島県の山中にあるトロッコ列車に乗りに行く予定です。

安井 正(大40経)

世話役ありがとうございます。

水渡 清夫(大40営)

所用があり出席できません。今年の猛暑にはまいりました。７月の後半から(夏が始まって待ってから)スグに夏負け状態でヘバッテいます。秋の気配が待ち遠しい日々を過ごしています。

柏 敏明(大41経)

幹事も皆様にはいつも何かとお世話いただき有難うございます。７月までは、ヒマラヤや東北・佐渡の山々と色々楽しみましたが、８月は家でぐったりしておりました。１０月初旬からヨットで四国一周の計画を立てておりますので残念ながら出席できません。参加の皆様によろしくお伝え下さい。

井上 徹(大41営)

１月３日に亡くなりました愛妻 洋子の遺骨を伊豆半島で一番高い万三郎岳に先日散骨をするために登ってきました。久しぶりの山歩きでしたが・・・一人は寂しいものです！！皆様によろしくお伝え下さい。

森岡 宏光(大43理)

Ｈ２２．４．１より相模原市が政令指定都市となり住所も区名が追加し、郵便番号も変更いたしましたのでよろしくお願い致します。

武庫川河川敷のジョギングで健康維持をしています。

頼富 伸輔(大 43 法)

毎回のご案内ありがとうございます。今年も残念乍ら実家の集落の神社祭礼行事と重なり出席できません。皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。尚、小生現在広島に単身赴任中です。

國分 廣昭(大 43 経)

C型肝炎のインターフェロンをやり目下元気回復中であります。もう少し休養します。いつもありがとうございます。

石原 浩二(大 44 理)

皆様との再会が楽しみです。

赤田 友則(大 44 理)

当日東京出張です。皆様によろしくお伝え下さい。9/10～に富士山頂に登りました。天候は最高でした。人が（シーズンオフですが）多いのには閉口です。9/19（祝日）岸和田祭りで岸田君に会いました。数年前は年番長という大役もこなし元気です。社有林の管理していますが、シナ（中国）が山林を買うという大きな問題があり、ゆゆしきことです。

矢吹 操(大 45 理)

ご案内ありがとうございます。普段の生活は特に変わったことも無く、週一回の

南里 章二(大 45 理)

お役目御苦労様です。残念ながら例年通り学校行事と重なるので出席できません。今夏は、スペインだけを約１ヶ月旅してきました。御参加の皆様に宜しくお伝え下さい。

井上 知三(大 48 文)

この事務担当を大森さんから引き継いで早いもので８年が経過いたしました。だんだんやる気が無くなって来ました。いつの間にか秋の集会のことも加わり山嶽寮の発送・秋の集会等色々なことが重なり気が滅入ります。また、年二回の案内葉書の発送は１８０通発送し返信が７０通から８０通、それに会費の納入状況は会員の半分程度しか納入されていない状態です。このような状況これで良いのでしょうか？疑問に思うようになって来ました。

平井 幹男(大 50 文)

前略 毎度の幹事さんありがとうございます。残念ですが、仕事の都合で今回も参加できません。山岳会のホームページを見る度に先輩方の活躍を知り、自分の腑甲斐無さに失望している毎日です。

西川 けい子(大50文)

いつもお世話になりありがとうございます。運動をやめて、車で会社に通うようになって１０年がたちました。それでやはり膝が悪うなり正座できなくなりました。でもとても元気です！！

村田 信一(大50経)

７月より健保組合に移動し、そのせいか健康になった気がしています。息子に誘われ木曽御岳に登りました。９月には家内と八甲田周辺を巡り、豊かな森を見て「驚き」でした。

中澤 章浩(大51文)

いつもご案内ありがとうございます。当日、奉仕神社の祭礼の真最中ですので失礼致します。ご盛会を祈り上げます。

渋谷 一正(大51営)

皆様お元気ですか。当日出勤日になっており欠席させていただきます。ご盛会をお祈りしています。

松下 哲夫(大52理)

この夏、久し振りに馬場島から剱岳に登りました。息も絶え絶えで何とか登れましたが体を鍛えて普通に登れるようにガンバリます。

住友 健時(大55法)

バリ島(ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)で居酒屋を開業する事になっておりまして、集会の当日には、おそらくバリ島でバタバタしていると思います。残念ながら欠席させて頂きます。皆様によろしくお伝え下さい。

山本 恵昭(大56理)

仕事が入った為、欠席させていただきます。昨年、乾燥したチベットに遠征したためか、緑多き山ばっかり登っています。

豆田 隆志(大56法)

ご苦労様です。いつも総会等でお世話になっています。今回出席できませんが、次回はよろしくお願い致します。

川野 幸彦(大56理)

皆さんお元気ですか？７月初めに「めまい」で倒れ、１週間入院しました。まだ「めまい」は治りません。年ですかね。秋の集会は仕事の為参加できそうもありません。申し訳ありません。いつも御連絡いただきありがとうございます。皆様によろしくお伝え下さい。

今井 啓介(大56経)

福岡から５年振りに埼玉県にもどりました。九州生活がとても楽しかったので、後ろ髪をひかれる思いです。

青木 雅夫(大57経)

９月の住友さんの結婚披露宴では、平井

先輩をはじめ懐かしい方々にお会いしました。

八木 健(大58経)

毎年御案内ありがとうございます。先日住友さんのパーティーで皆さんにお会いする機会があり懐かしく思いました。皆さんがいつまでも元気でびっくりしました。盛会を祈念申し上げます。

松山 弘和(大60理)

ご無沙汰しております。遅くなり申し訳ありませんでした。仕事の都合で休みが取得できましたので今回参加いたします。

西名 俊英(大61理)

いつも連絡ありがとうございます。娘たちも小1・年中となり、この夏はキャンプにも連れていきました。秋にも連れていって欲しいとせがまれ、シメシメといったところです。

松成 健(大H8文)

6年半ぶりに九州から関西に戻ります。皆様何卒よろしくお願い致します。

新住所：

橋田 豊彦(大H12経)

住所が変更になりました。宜しくお願い申し上げます。

森本 寛之(大H19理工)

最近は九州の山に登っています。ゴールデンウィークは屋久島 宮ノ浦岳にも登りました。週末は大宰府の宝満山「九州の六甲山」にとレーニングがてら登っています。２０代の女性も多く、山での出会いも密かに期待しています。(笑い)

谷 勇輝(大H20 理工)

いつもご案内頂き誠にありがとうございます。私事ではありますが、昨年4月に就職した会社を退職し、今年豊中市の消防士採用試験に合格した為１０月から消防学校に入校致します。その為今回は欠席させて頂きます。

中井 久夫(新高27)

無事と言いたいところですが、脳梗塞の跡がいっぱいあって、このごろの映像はとてもリアルですから頭から離れないくらいです。予防法の方はアスピリン少量というくらいです。まあ柳沢さんより長生きするかもしれないので、ぜいたくは言えないと思おうとしています。

米山 悦朗(新高29)

アメリカ西部撮影で不在です。すいません。

北方 龍一(新高30)

5月より坐骨神経痛で不自由にしていま

す。残念ながら今回は遠慮したいと思います。皆様に宜しくお伝え下さい。七月より県の勤務がとけて、非常勤で太陽光の出張コンサルをしています。

竹原 佑爾(新高 33)

９月に腰の手術を行い静養中です。皆様に宜しくお伝え下さい。

永島 孝男(新高 37)

前略 まだ元気に仕事をしています。秋の集会の御盛会をお祈り申し上げます。早々

川村 静治(新高 40)

６月に屋久島に行ってきました。縄文杉・黒味岳に登りシャクナゲが美しく咲いていました。

佐野 英治(新高 45)

年のうち、半分以上日本を離れております。郵便物等も受け取りが難しく困っております。

福田 裕久(新高 45)

来年でいよいよ定年退職をむかえます。

松下 弘幸(新高 54)

相変わらず米国と日本を往復しております。皆様にくれぐれもよろしくお伝え下さい。

白川　浩平(新高 H2)

相変わらず海のそばの生活を楽しんでいます。ヤギが６匹に増え、さらに子犬２匹も加わり大変にぎやかです。

2011年 春の総会の出欠はがきの近況欄

西川 耕平(名誉会員)
海外出張にて欠席させていただきます。

鈴木 敬吾(特別会員)
今年は出席するつもりでしたが、東京農大学の授業と重なってしまい残念ですが欠席します。

鷲尾 顕(旧15文)
残念乍ら出席できません。

伊藤 文三(旧15文)
日常生活に差し支えない程度に動いていますが、遠出は無理です。何年になるかわかりませんが、慰霊祭も銘板で参加となりますね。なにしろ【ハンカンニンゲン】(棺桶に足の半分をつっこんでいる)ですからね。

福井 實(旧17理)
少々「ボケ」て参りましたが、まずは元気にしています。出来れば毎日の散歩、介護予防の為の体操など家族の厄介にならないように心掛けています。ロックガーデンの佐野 源さんたちの慰霊祭にも参加したいのですが、何分膝が以前の様に参らぬので、残念乍失礼いたします。総会・懇親会には出席します。よろしく

伊藤 長次郎(旧21理)
御蔭様で元気に過ごしております。

伊藤 五介(旧26文)
元気です。

小原 耕治(大31経)
先ずは元気で毎日を送っております。総会で諸兄の顔を見るのが楽しみです。毎度の事乍ら幹事役ご苦労様です。

砂川 彰雄(大32経)
御案内ありがとうございます。今年は高遠行きが4月中頃になりそうなので、久し振りに大関邸の花見会に顔を出そうと思っています。大分オジンになって来ました。

宮本 侑(大32経)
元気にしております。毎日の散歩の距離が短くなってきました。

麻畠 重彦(大33経)
何時もご案内頂きまして有難う御座います。土・日・祭日は法要日と重なりまして失礼致しまして申し訳御座いません。この度の東日本大震災におきまして被害に合われた方心よりお見舞い申し

上げますとともに犠牲になられた方々とご遺族にお悔やみ申し上げます。もしもそのような方お知り合いに居られましたら御心と頂きましたので、ご廻向させて頂けます事と成りましたのでお知らせ頂ければ有難いことです。(無料で御座いますので念のため)国難！　早々

鈴木 頼正(大33経)

毎回お世話頂き感謝しています。甲南山岳会総会と翌日の六甲慰霊碑参拝に行く予定です。毎日元気にしています。肺にブラが二個見つかりました、禁煙してもう２０年近く成りますが、やはり煙草が原因だそうです、ゴルフは月二回ばかりプレーしています、ハイキングも思い出したように出かけています、歩くのは１０キロまでと考えています。

田辺 潤(大34経)

お世話くださる皆さんにはいつも大変感謝しております。今年は正月以来一寸滑りすぎて、今頃その後遺病が出ております。来年からは少し年相応にと反省しているしだいです。３月２１日より３週間夫婦でドイツに旅行に出かけます。仕事も毎日結構やっています。ガチャ

伊丹 弘忠(大35経)

元気にしておりますが、先約があり欠席します。皆様によろしく。

芦田 匡平(大35理)

達者な後期高齢者に成りたいものです。けど、あちこちでボロボロ・ポロポロと音が聞こえてきます。今更ひき返さないなとの感がつのります。

鳥居 威男(大35経)

毎日元気に過ごしております。スケッチ・登山(今年は六甲に雪が積り２回 六甲～有馬 温泉に入り一杯飲んで)仲間と旅行で！

藤安 賢一(大36経)

やっと８０％程度治療が完了し最悪の状態から脱する事が出来そうなところまで来ました。人生に於いての３度目のガンから抜け出し健康を取り戻したいと欲も出てきて明るい気持ちである現在です。皆様にお目に掛かるのが楽しみです。

越田 和男(大36 理)

当日マンションの管理組合の理事会があり残念ながら出席できません。地震・津波・原発事故・交通網の混乱・株の暴落と続きゲンナリとしてますが、早く平常に戻り山歩きを再開したいものです。出来ることといえば、貧者の一灯の義援金くらいか・・・・・

廣瀬 健三(大36経)

御陰様で体調良好、テニス三昧の日々と月一回の軽登山を楽しんでいます。老眼

と乱視で段差にメッポウ弱くなりました。山はJACの「ゆるやか山行」のみに参加しています。少しハードな山に行きたいのですが用心して止めています。

大関 和夫(大37経)

地震さわぎですが山岳部の経験のおかげで対応できると思います。山の道具がこんな時に役立つと思います。食料・酒類・燃料・電池・水を用意しています。

柏木 宏文(大37経)

労健に入所中でございます。健康面はさる事乍ら、日々おだやかに過ごさせて頂いております。ご盛会お祈り申し上げますと共に物故会員のご冥福を心からお祈り申し上げます。柏木 内

二谷 和成(大38経)

あちこち老人仲間と月２～３回近郊の山歩きを続けています。もう3,000mクラスは無理かな？

森本 全彦(大39法)

昨年行った東北地方がこんなことになり、びっくりしております。私は７０才になった事で体力が一気に落ちたようで山登りも御無沙汰。大阪で言うボケが始まり困ってます。皆様方の健康をお祈りいたします。

武田 雄三(大39経)

世話役の方々に感謝。皆さんとお会いできる事を楽しみにしております。

村上 与利一(大39営)

両日、浜田省吾の促売(イベント会場での販売)があるので応援の為欠席となります。銘板の制作費の回収に是非参加したいのだけど。

福田 信三(大39理)

東北関東大震災のテレビを見ながら書いています。亡くなった方々のご冥福を祈り被災者の皆様の御健闘を願います。私は今まで通り元気にしております。皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

奥山 正紀(大40法)

身体の調子が悪く歩く自信がありません。皆様方によろしくお伝え下さい。

鵜木 洋(大40文)

遠い西大寺まできてくれた方ありがとうございます！

水渡 靖夫(大40営)

体力は弱くなってきてますが元気にやっております。数年前から始めたスキーが面白くて前田館・高遠ガチャさんの山荘・妙高等で楽しく山岳会の皆さんとスキーを楽しんでいます。今年は柏さんに誘われてカナダ ウィスラーにまでスキ

ーに出かけました。

柏 敏明(大41経)

幹事の皆様にはいつもお世話を頂きありがとうございます。ウィスラーでスキー中に大地震の報道があり楽しんでいた気分が飛んでしまいました。帰国後も原発事故で一人身の拙宅に東京・藤沢から娘達二家族が緊急避難。幼稚園が始まって帰宅するまで、テンヤ、ワンヤの毎日が続いていました。

井上 徹(大41営)

最愛の人を亡くし早くも一年数ヶ月が経過しました。悲しくて寂しいことですが今ではスッカリ独り生活もなれてきました。気分転換をかねて、ゴルフ・卓球・水泳等の教室に通っています。伊豆半島の最高峰万三郎岳頂上に彼女の遺骨を散骨しました。数ヶ月に一度のペースでお参りをかねて登っています。

森岡 宏光(大43理)

幹事様ご苦労様です。先日、前立腺の切除手術を受けました(3/8～3/15)非常に出血の多い痛い手術でした。健康が宝です。皆様も充分注意して下さい。

國分 廣昭(大43文)

やっと元気になりました。２３年かかりました。

伊藤 辰之(大45営)

卒業後未だ山岳会に一度も出席できていません。すいません。近況ですが、Ｈ２０年定年退職をし今は嘱託として再就職をしています。山登りはご無沙汰で昨年夏は心臓病で入院し今は元気です。来年は山岳会総会に参加したいと思っています。

南里 章二(大45理)

返事遅くなって申し訳ありません。８年間続けてきた「新聞を読んで」【ＮＨＫラジオ第一放送】は先月１９日(土)をもって番組終了となりました。私が担当した最終回は３月１１日以来の津波・原発の報道で、紙面の読み込み整理に大変な思いをしました。でも多くの被災者・犠牲者の方々のことを考えると私のしていることなど小さいものです。

矢吹 操(大45理)

元気です。相変わらず健康維持のため武庫川河川敷をジョギングしています。

平井 幹男(大50文)

いつの間にか６０才を過ぎてしまい何かと体力も落ちてきましたが、今年は時間が少し取れそうなのでゆっくりと山に登ってみる予定です。総会で皆様と会えるのを楽しみにしています。

高橋 けいこ(大 50 文)

いつもお世話になっております。年に一回大先輩諸氏のお話を拝聴できることを楽しみにしております。3月１１日以降は祈りの日々です・・・・・

中澤 章浩(大 51 文)

お世話になります。昨年度より仕事上の役が回って参りまして多忙になっております。本年は勝って致します。皆様によろしくお伝え下さい。

松下 哲夫(大 52 理)

定年退職の年になり山登りを楽しみたいと思っています。

大森 雅宏(大 53 文)

相変わらず健康保険組合に勤めています。1年前に診療所の窓口から紙とハンコの世界に戻りました。資格と保険料を担当しています。定年後再雇用が増えて、離婚がアタリマエになって、読めない子供の名前が激増しています。曰く、芹英・夢杏・空桜・輝向・蘭夢音・美。届けにあった振り仮名は、セリエ・ユアン・ソラ・カナタ・ラムネ・ミィ。つけられるほうに拒否権はないのか、とは職場の雑談です。

山本 恵昭(大 56 理)

最近は遠出の山行き回数も減り、その分近郊のヤブ山徘徊に興じています。

川野 幸彦(大 56 理)

いつも連絡いただきありがとうございます。今回は欠席いたします。皆様によろしくお伝え下さい。昨年７月に“めまい”で倒れ一ヶ月ほど仕事を休んでいました。年ですね。皆様もくれぐれも健康には注意して下さい。今年もどこかに出かけたいと思います。山登りはいつになっても楽しいですね。

橋田 豊彦(大 H12 経)

東北で被災された方々の心痛を察すると心苦しいですが、私たちも陰ながら復興への力添えをさせて頂きたいと思います。合掌

森本 寛之(大 H19 理工)

２０１１年３月よりタイ・バンコクへ転勤となりました。今度は、タイ東南アジアの山や自然を楽しみたいと思います。訪タイされる際は是非ご連絡下さい。新住所はバンコク市内です。

北方 龍一(新高 30)

昨年５月に脊椎管狭窄から来る、坐骨神経痛を発祥して１年になります。最近は杖が有れば外出も可能になりました。5月にミャンマーに出かけますが、以前柳沢先輩、鳥居 威男君と 3,056m の Kaw nu Symm Prak に登りました、そのうち 5,881m の Mt.Hkaka bo Razi に登るのが夢でしたが、それも不可能となりました。今回は家内の介助で山には近寄れ

ません。残念です。皆様も健康にはくれぐれもご留意下さい。

竹原 佑爾(新高 33)

先日ネパール ジョムソンに行きダウラギリ・アンナプルナを間近に見てきました

福田 裕久(新高 45)

今年の４月末日をもって定年退職となりました。気は若いつもりでも６０才なんだと感じる今日この頃です。

前田 和也(新高 53)

引っ越しました。なかなか神戸に帰れませんが、機会が合えば出席できたらと思います。

白川 浩平(新高 H2)

高知ではたいした被害もなく、平常どおりの生活を送っておりますが、友人の家が津波に流されたりと聞いております。私個人的には、米 Standup Journal 誌に私のサーフィンの写真が掲載されたりしています。

目次

山岳会ホームページ掲示板より－訃報

佐野大先輩の訃報

投稿者：廣瀬健三

投稿日：2010年 8月23日(月)

ごく最近佐野ゲンさんの「シベリア抑留の想い出」を越田コシにＣＯＰＹして貰って読み直しており、どうされてるかカナと気掛かりでした。小生の従兄が御影の小学校、早稲田高等学院、早稲田大学山岳部の同期生でした。又"" よくぞ生還された"" と当該抑留体験のある上司も驚いてました。謹んで御冥福をお祈りいたします。合掌

訃報・佐野源一氏

投稿者：越田和男

投稿日：2010年 8月23日(月)

近着の日本山岳会の会報「山」(783号)で、去る５月に亡くなられたとの記事がありました。 甲南山岳会の最長老のお一人で、享年９４歳。

昭和ひと桁時代に甲南から早稲田の山岳部に進まれた。満州で陸軍中尉で終戦を迎えられ、以後１１年間の長きにわたったシベリア抑留のあと、昭和３１年に復員された。甲南でも早稲田でも、既に山岳部のＯＢ名簿では死亡者欄に載っていたところ、生きて還って来ましたとの連絡があり、翌３２年の山岳会の総会に顔を出された時、大学一年生だった小生らは強く衝撃を受けたことを思い出します。

後に佐野ゲンさんが書かれた「シベリア抑留の想い出」のことを、ごく最近広瀬ポンと話す機会があり、再読し、改めて感銘を受けたばかりでした（山嶽寮・４２号（１９８６年））。遥か彼方、今のウズベキスタン、パミール山麓にまで連れ行かれた壮絶な体験談です。ご冥福を祈って再読をおすすめします。合掌。

佐野さんのこと

投稿者：大森雅宏

投稿日：2010年 8月23日(月)

山嶽寮57号にヨーロッパスキー単独行の原稿をお寄せくださったのをきっかけに、折りにはがきやお便りをいただいたり、62 号の早稲田のお話のときは私もお礼に甲東園まで伺ったり、暖かく接していただいたことを随分ありがたくかみしめています。お便りやはがきの本文はたいていワープロでしたが署名と宛名は手書きで、それが角の丸い大き目の丁寧で読みやすい筆跡で、乱雑な文字しか書けない私はこんな字が書けたらいいなあと思っていました。

この１月、前田館から浪川さん達と山スキーに出かけたときに早稲田の小屋の写真を撮って、佐野さんにご披露しようと思っていたのですが何やかやで果たせず、先日残暑見舞いをお送りしたときにその写真を添えました。このたびはいつものようにすぐにお返事がありませんでしたので、ご高齢だし具合がよくないのかなと案じておりました。今にして

思えばあの時ちゃっちゃっと書いておけばよかったと思います。
皆さんがお書きのシベリアのこと、生還なさった方のうちどのくらいの方が佐野さんのように抑留生活をまっすぐ振り返ることが出来るのだろう、と思ったことがあります。極限の中で自分が生きるために心ならずも他の人に不利益をかぶせることがあったとしても誰もとがめることは出来ないのですが、そういう経験をしていた方はやはり当時のことを振り返りたくないのではないか、と思ったのです。

私が学生のとき、総会でお目にかかったお姿、ロックガーデンに80過ぎておいでの時、「足が弱くなってしまった」といいながらそれでもお元気に歩いておられたお姿、香月さんの会ですっきりしたスピーチをされたお姿、それぞれの佐野さんを思い出しながらご冥福をお祈りいたします。

(無　題)

投稿者：雨宮　宏光
投稿日：2010年 8月23日(月)
佐野源一先輩のご冥福を祈ります。
強制連行されて十年。佐野先輩に戦争が終わったのは敗戦記念日の十年あとでした。

佐野先輩から07年10月に次のような書簡が山嶽寮・編集者・大森雅宏くんに郵送されています。山嶽寮（2007）の三十五ページに小川さんたちが北尾根から下ってきて、徳沢にいた小屋主、中畠政太郎に甘える遠慮からとあるが、中畠政太郎は小屋主ではない。
当時の小屋主は三代目上條　喜藤次であるという内容です。
佐野先輩のご指摘は正しく稿訂正の手紙を出しました。
小川先輩にこのことを話したら「サノゲンはまだ頭がしっかりしとる」といわれ、小川さんから中畠はカモシカ猟で小屋に滞在していたと聞きました。

昭和二年穂高岳山荘が旦那衆の失火で焼失した時、案内人・中畠　政太郎は「ワシの責任」といいはり、彼の侠気に感じた信濃の山人、上條は飛騨の中畠が小屋に滞在することを大目に見ていたのです。
すみません。訂正をもう一つ。山嶽寮（2008）四十七ページに、メスナーは裁判に敗訴し罰金五万マルクと記したのは誤り。訴訟費用五万マルクの支払いを命じられた――が正しい。

サノゲンさんのこと

投稿者：平井吉夫
投稿日：2010年 8月24日(火)
甲南山岳会のいつぞやの会合で、サノゲンさんがわざわざ私の前まで来てくださり、なんともいえない親しげな笑顔でじっと見つめてくださったことがあります。甲南高校出身で早稲田に行った者は少ないので、私が早稲田OBと（たぶん田口さんあたりから）聞いて、上席から私のところに来てくださったのでしょう。そのとき、私が早稲田では山岳部に入らなかった事情（当時の私には山登

りよりもっと大切なことがあった、と自分では思っていた）をお話しすると、サノゲンさんはにっこり笑って、それでいいんだという意味のことを言ってくださいました。あのときのサノゲンさんの、いかにも親しげな、優しげな、そして（私の独りよがりかもしれませんが）嬉しげな笑顔が忘れらません。　平井吉夫
http://www.arekara50.org/

訃報のお知らせ

投稿者：井上 知三
投稿日：2011年 2月 11日(金)
事務担当より
昨日、川村様の御子息様より、父 川村三郎 儀 1 月２８日に９４才で永眠致しましたと葉書にて連絡がありました。【旧制 14 回理】　ご冥福をお祈り致します。

訃　報

投稿者：福田信三
投稿日：2011年 2月 22日(火)
兵庫県山岳連盟の中島会長がお亡くなりになりました
ご葬儀予定は下記の通りです。
http://www.hma.jp/oshirase/110221kaicho-seikyo/110221kaicho-fuhou.pdf
ご冥福をお祈りいたします。

色々と

投稿者：柏　敏明
投稿日：2010年12月 3日(金)
山本先生の思い出は、山に関しては時代がずれていたのか余りありません。
山岳総会のあと、よく六甲の兄貴の家でニコニコしながら麻雀をされていたお姿が一番目に浮かびます。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

竹中統一さんが、先日、岳人の取材を受け、1月 15 日発売の「岳人」2月号に記事が掲載されるそうです。現役時代の事にも触れられているそうですので、是非、読んで下さい。

彼は今度の掲載で「山と渓谷」と「岳人」の二大山岳雑誌を制覇したことになります。

年が明けるとスキーシーズン。
来年は鈴木（功）さんも始められることでしょう。水渡さん、安井さんに続いて、又、追い越されそうです。初心に帰って頑張りますので、皆さんのご指導の程をお願いします。

Re: 訃報

投稿者：越田和男
投稿日：2010年12月 1日(水)
印度シッキム州の首都ガントク滞在中に山本先生の訃報に接しました。（賀茶さんも一緒でした）
想えば、小生の甲南入学と同じ年、昭和 26 年に先生も甲南に来られ、それ以来 60 年の長きにわたりお世話になりました。特になり手の少なかった山岳部の顧問を再々お引き受けいただいたことや、奥飛騨中尾の集会にもしばしば奥様もご一緒に参加されたことなど思い出しております。ご葬儀にも出れず失礼をいたしました。謹んでご冥福をお祈り申し

上げます。

訃　報

投稿者：武田　雄三

投稿日：2010年11月26日(金)

名誉会員　山本三郎先生が風邪を拗らせ昨日急逝されたとの報が入りました。

去る10月米寿を祝われたばかりとの事、生前のご指導を感謝し此処に慎んでご冥福をお祈り致します。

合　掌

ご葬儀関連次の通り

お通夜・11月26日（金）午後6時～

告別式・11月27日（土）午前11時45分～午後1時

場　所・・・平安祭典　西神会館　地下鉄西神中央駅から北へ徒歩4分
神戸市西区美賀多台９－２
TEL　078－992-4200

喪　主・・・ご令室　山本千榮子様

山岳会より弔電・生花一対手配致します。

目次

山岳会ホームページ掲示板より－山行、旅行

剱を眺めてきました

投稿者：塩崎将美

投稿日：2010年10月19日

掲示板でケルンが話題になった時、安さんが行ってみたいなと言いだしケルン往復だけでは勿体ないでと大日から称名へ下る計画をたてました。

参加者

鈴木オトミさん、森本カンさん、安さん、鈴木功、ドン吉、塩崎。

まずお断り。同期の鈴木を”鈴木”と呼び捨てにするとオトミさんが”なんや”と返事、どうも具合が悪いので旅の間、大先輩を”オトミさん”と呼ばしてもらいました。

９月２６日

７時半に神戸を２台の車で出発、途中オトミさんカンさんを拾い立山駅へ。

１時３０分のケーブル、バスに乗り継いで室堂へ。天気は晴れだが紅葉はまだまだ。2003 年に横山の奥さんと娘咲ちゃんを案内した時も同じ 9 月末でしたが紅葉まっ盛りでした。１週間ぐらい遅れている様でした。４０分の歩きで雷鳥荘着。さっそく持参の焼酎/ウィスキーで酒盛り。この小屋は綺麗で食事良し温泉良し、いままで泊まった中では最高でした。この小屋に泊まり地獄谷を眺めながら温泉に入り山を眺めるだけでもお値打ち、山を歩かない嫁さん連れで泊まるのもお勧めです。朝起きるとなんだか尻が暖かい、なんと畳がホカホカ、びっくりしました。

２７日

雷鳥荘 6：50～新室堂乗越 7：40～ケルン(室堂乗越)8：05～奥大日岳 9：50～大日小屋 12：15

天気は快晴。雷鳥沢まで下り、橋を渡って新室堂乗越まで 30 分の登り、稜線を室堂乗越へ。7 年前に積んだケルンは少し小さくなっていました。ケルンを積みたし、横山が好きだった煙草を 1 本供え彼を偲びました。北方稜線から剱西面、立山三山、遠く白山と眺めはバッチリ。いつ来ても気持ちの良い場所です。

急な登りも無くだらだらと登り奥大日岳へ。剱は勿論、薬師その後ろに水晶、遠く笠？、剱の後方には後立の五竜岳？足元は富山平野から富山湾、眺めの良い山でした。クサリや梯子のある急な下りを下り登り返して大日小屋へ。ガスが出てきたが空身で大日岳頂上往復 40 分。何も見えず小屋に引き返す。この小屋はランプの宿として女性に人気とか。またオーナーがギター工房の主人(小屋をお祖母さんから引き継だ)でたまにはギター演奏が行われるのも人気とか。この日も女性客の要望に夕食後スタッフが演奏してくれました。稜線上の小屋故か水が 500 のペットボトル 1 本 100 円(コップで飲むのはタダ)。食事も昨日の小屋とは比べたら可哀そうだがこんなものかと諦めてダラダラと飲みつづけました。ただ寝る場所が寒くパッチを履きダウ

ンを着て寝ました。天気が気になり夜中外に出てみると早月、御前、白馬の小屋の明かりが見えました。

２８日
大日小屋 6：10～奥大日岳 8：10～室堂バスターミナル 11：10
朝から雨。大日平から称名への下り、牛首の下で大きな崩落があり雨の日は落石の危険大との事(大日平の小屋は今年は営業してません)、室堂へ引き返すことにしました。あの奥大を登るのかと思うと憂鬱でしたが仕方なく雨具をつけて出発。たまに横殴りの雨で止むことのないなか黙々と室堂へ。雨で良かった事は雷鳥を多く見れた事です。空からの天敵に見つからないのでガスたり雨の時に出てきて道案内してくれる様です。

40 数年ぶりに山を登る鈴木が心配でしたがさすが、遅れず歩き通しました。彼は足元、靴からザック、雨具まで新品。私は靴の底から水が浸みてきましたが彼はそこそこ降った雨の中を歩いたにもかかわらず靴下も下着も濡れてませんでした。○○さんはバイクのフード無の雨具、下着まで濡れ震えていました。皆さん装備は金を惜しまず良い物を買ってください。
安さんも久しぶりの山歩きでしたが日ごろの鍛錬のせいで強いこと強いこと。とくにこの計画が始まってからは毎日家から風吹まで 1 時間かからず登って鍛えられたようです。

オトミさんの頑張りには敬服しました。私より 10 歳も先輩。私は 10 年後に山に登る自信はありません。
1 回もシャッターを押さなかったオトミさん。紅葉には早いやろと言うオトミさんを大丈夫と誘いましたが、重いカメラがただの重しになってしまい申し訳なく思ってます。

何時ものメンバー、カンさんドン吉君お世話になりました。カンさんの適切な判断、心強かったです。ドンがバスターミナルに先行メンバーを先導した後、雷鳥沢まで迎えに来てくれた事、感謝感激。

立山駅から氷見の民宿”すがた”へ。温泉に浸かり魚を食べ勿論明日は歩かんでもええんやと飲み。1 泊 2 食飲み代別、9000 円でお釣りがくる値段でこの料理と全員大満足。

２９日
干物を土産に買い神戸まで帰る。

振り返ると歩きに行ったのか飲みに行ったのかと考えてしまいますが、同期鈴木との久しぶりの山歩き、楽しいメンバー、山も十分眺められたし、楽しい 4 日間でした。

<u>早秋の大日</u>
投稿者：kannroku
投稿日：2010 年 10 月 1 日(金)
26 日～29 日まで大日に行ってきました。
まだ紅葉には少し早かったようですが、6 人が思い思いに若かりしころの思い出に浸り横山君のケルンを積んで、剣の東面を目の当たりにみて楽しく歩いてきました。
鈴木オトミさんの元気な事。奥大日～大日

と元気に歩かれました。
安さんの音頭で計画が実行出来よかったです。
ゲートボールの王者鈴木功君の 40 数年ぶりの登山、元気な歩きに脱帽。
相変わらず初めから終わりまで檄を飛ばし追い立てる donnkichi 君、まいりました。
今回のすべて手配してくれた塩さんには、ありがとうの一言。

またご一緒させて下さい。

Re: 剱を眺めてきました
投稿者：横山　咲子
投稿日：2010 年 10 月 19 日(火)

（塩崎将美さんへのお返事です。）

塩崎様

剣岳、ケルン。大好きだった煙草。本当にありがとうございます。
父の喜んでいる姿が、想像できます(^-^)。
アルバムにアップされている皆さんの写真、なんだか、本当に！かっこいいな。と思いました。
本当にありがとうございました。
引き続き、ホームページ掲示板・アルバム写真、楽しみに見させていただいております。

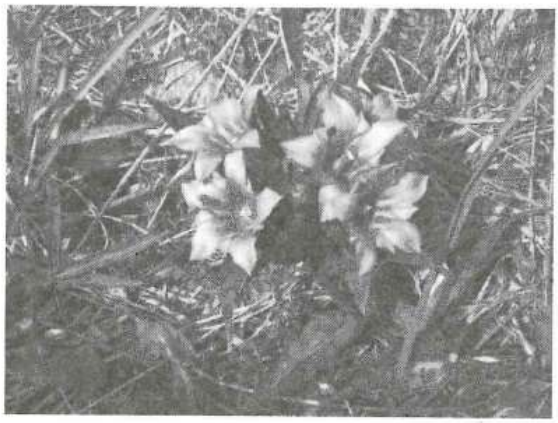
横山咲子

蒜　山
投稿者：塩崎将美
投稿日：2010 年 10 月 21 日(木)
高校の同級生と蒜山を歩いてきました。
私は大山の小屋から、残りは大阪から走り道の駅で集合。
車 1 台を上蒜山登山口にデポ、塩釜冷泉へ。

10 月 15 日
塩釜冷泉 8：45～中蒜山頂上 10：45～上蒜山頂上 11：50～昼食～上蒜山登山口 14：00
中蒜山の登りは稜線までが結構な急登でユックリと登る。
稜線をブラブラ頂上へ、紅葉には少し早かったが天気は快晴で 360 度の展望、遠く日本海、を楽しんだ。
上蒜山へはいったん下り登りなおす。鎖やロープがでてきてここも急登であった。
頂上は木が邪魔して展望はいまいち。
ビールで乾杯。カップラーメンとおにぎりで昼食。コーヒーを楽しんだ後下山。
八合目まで下ると展望が良くなり北に大山/烏ガ山、足下は蒜山高原。
この下りは割と緩やかで年寄には歩きやすい下りであった。
最後は牧場の中を牛を眺めながら歩き駐車場へ。
のんびりと秋の山を楽しんできました。

写真は中蒜山頂上と途中に咲いていたリンドウです。

塩崎



四国に

投稿者：kannroku

投稿日：2010年10月24日(日)

小西さん等に誘われヨット四国一周（2週間）は無理としても，香川で下船して、三嶺山（徳島ではミウネ・高知ではサンレイと呼んでる）に登ろうと計画を立てる。

10月12日（火）晴　仕事を終えて夜遅く西宮港に。　小西・柏・浪川の皆さん等と合流。

13日（水）晴　6時出航～15時30分小豆島大部停泊

14日（木）晴　8時出航　子安観音寺　法王村垣様御夫妻と犬島、直島と瀬戸内国際芸術祭を見て廻る。　直島宮浦港停泊

15日（金）晴　7時出航～多度津港停泊　金比羅神宮参拝

16日（土）晴　6時下船　小西・柏・浪川の皆さんと別れ一人旅となる。

多度津～JR1時間30分～土佐山田～JR四国バス40分～香美市営バ30分～影13時05分着　交通の便悪く影まで7時間掛かっている。バスに乗る人もなく、最終の影駅に降りたのは、歳老いたお婆さんと二人であった。高知県側であったのでお婆さんは「これからサンレイ（三嶺）に登られるのか」と声を掛けられた。徳島側のミウネ（三嶺）より高知側のサンレイ（三嶺）の方が 語呂が良いような響きがする。今日の宿泊予定地八丁ヒュッテ迄林道を 2時 間歩いて、光石登山口・・・此処までは車が入り大きな駐車場 がある・・・車が5台程停まっていた。登山口裏手から西熊川を高巻きして堂床東屋を過ぎれば八丁ヒュッテ。影から2時間半の歩き。今日はここに泊まる。大きな無人小屋での一人だけの夜は怖かった。

17日（日）晴　6時30分歩き開始。フスベ谷沿いに登り詰め、笹の中の道を登りる事3時間半で頂上1893m三嶺山に。この道中では人との出会いなし。頂上には，徳島名頃からの登山者で一杯であった。石鎚は見えなかったが、剣山は遠くに霞んで見えた。ミヤマクマササとコメツツジに覆われた三嶺はなだらかで綺麗な山だ。頂上直下の三嶺ヒュッテは

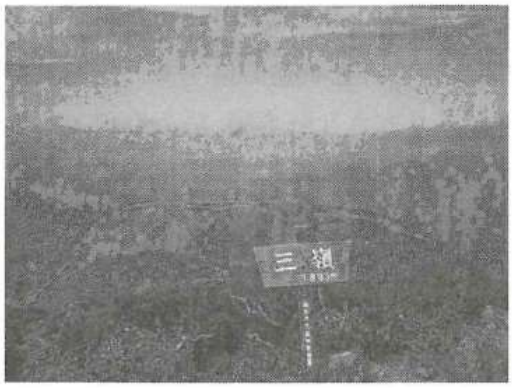
人の姿で一杯。そのまま名頃に下山。名頃

からの登山者の多さにびっくり。
途中石鎚に登ってる小西・柏・水渡・浪川パーティから元気で登ってると携帯が入る。名頃バス停 12 時 45 分着。　　香川丸亀泊。

18 日（月）晴　岡山の鵜木君を見舞って帰津。

四国に熊が住んでいないと思っていたが、高知側の三嶺山にはいるらしく、熊情報のたて看板があり、バスの中でも注意するようにと教えてもらった。　楽しい 1 週間でありました。

小西さん等は高知港あたりを航海か。



上の写真～三嶺頂上　　下の写真～三嶺ヒュッテ（無人小屋）

四国を一周してきました。

投稿者：柏　敏明
投稿日：2010 年 10 月 29 日(金)

小西さんの 32ft のヨットで瀬戸内海から時計と逆周りで四国を一周してきました。10 月 13 日に森本さん、小西さん、浪川さん、柏の４人で新西宮ヨットハーバーを出港。
小豆島、犬島、美術館の直島と寄港して、多度津では金比羅山に参拝、航海安全の祈願をしました。ここで三嶺山に向かわれるカンさんは下船。新居浜で遠路横浜から駆けつけた水渡さんが乗船。レンタカーを借りて石鎚山に登山。新居浜から三机港まで一気に 85 マイルを機帆走。有名なヨット婆ちゃんに天麩羅をご馳走になりました。

佐田岬を廻って太平洋に入り、釣りを楽しみ、宇和島のジャコ天を味わい、
沖の島母島を経由、土佐清水では清水さばを堪能し、足摺岬を交わして久礼を経て高知ヨットクラブのゲストバースに。はりまや橋でのカツオのたたきは最高でした。

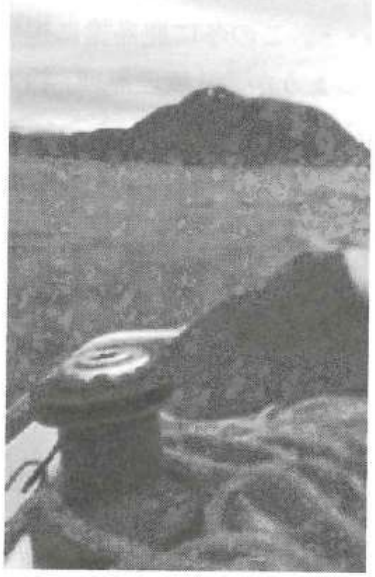
3 日後にエジプト観光に向かう水渡さんはここで下船。室津では津照寺に詣で、室戸岬を廻って日和佐に入港。ここまでは極端な悪天候にも会わず順調な航海でしたが最後に来ました。木枯し１号に出くわし、日和佐を出て１８メートルの
台風並みの北風と三角波に揉まれ、友が島付近では、一人がおでこをぶっつけてたんこぶを作る始末。舷側を波に洗われながら、ほうほうのていで洲本に入りました。

洲本で嵐を収まるのを待って、28 日に 16 日間、約 1,100 kmの航海を経て西宮に帰ってきました。

色々とありましたが、港、港の人々の親切に触れることも出来、思い出深い航海となりました。クルーとヨットに感謝、感謝です。只、地方都市のシャッター街や船はあっても漁師のいない漁港の衰退振りは想像以上に進んでおり、日本の将来が本当に不安になりました。

山とヨットは共通点が多くあります。自然を相手にし、地図で目的を定め、天気を読み、今回も数十年ぶりに気象通報（震えながら記録した早朝 5 時頃の放送は無くなって日に 3 回になっていました）を天気図に記入しました。
装備やロープワークも共通なものが多いです。違いは荷物を担がなくて済むこと位です。

雪便りが聞こえてきました。いよいよスキーシーズンの到来です。
今年もご指導の程をお願いします。



Re: カニ・キノコの会
投稿者：山本恵昭
投稿日：2010 年 11 月 9 日(火)
今年は穏やかな天気の中、大漁とはいえないまでもそこそこキノコも収穫できました。いつもの場所で、カニとキノコの美味しい鍋を賞味しました。

香住鶴の冬季限定「ひやおろし」や皆さんが持ち寄りいただいたいろいろな酒類で少々飲みすぎましたが、皆様と楽しい時間を過ごさせていただきました。ご参加の皆様、有難うございました。
浜坂港の競りはあまり漁がなかったようで、諸寄港へ移動し、カニとハマチをゲット。帰ってから、ご馳走続きの夕食を楽しんでいます。
今日は冬型、多分扇の山は雨か雪でしょう。もう一度くらいナメコ狙いで入山したいものです。

宝塚山の会の和泉さん、２５年ぶりの再会でした。薮内さんが鹿島槍で遭難されて２.5年。扇の山の駐車場で「薮内さんが生きていたらなあ・・。この冬に鹿島槍に追悼登山に行きましょうか。」「無理無理。松本の要さん宅に集まって追悼飲み会なら・・・」という話を大森さんとしていたところでした。

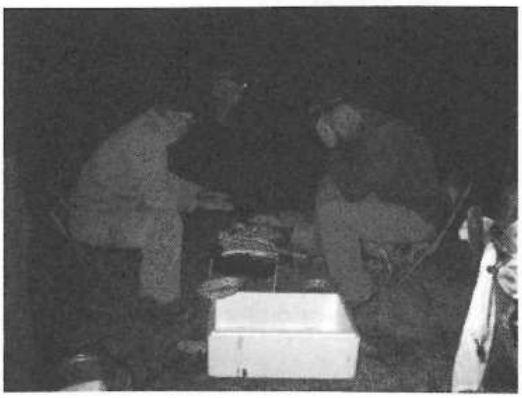
扇の山で

投稿者：大森雅宏
投稿日：2010年11月 8日(月)
先日登った扇の山の頂上でばったり宝塚山の会の和泉さんにお会いしました。
私の 2 年後の学年の薮内昭博君が甲南卒業後所属していた山岳会の方です。
薮内君たちの事故から 25 年ですねなど、和泉さんと面識のある山本君も交えて立ち話。
あの節は大変お世話になりました、甲南の皆さん方にどうぞよろしくお伝えください、と御挨拶いただきました。
薮内君のために、甲南ＡＣの皆さんから寄せていただいた金額は 250 万円ほどであったと記憶しています。多くの方々にご協力いただきましたことをありがたく思い出しながら、和泉さんの御挨拶を掲示板拝借してお知らせいたします。

カニ・キノコの会

投稿者：今回は匿名
投稿日：2010年11月 8日(月)
今回事情で匿名参加の ＊＊ です。
カンさん武田さん安井さん塩崎さんN川さんリーダー山本君、皆さん有難うございました。
柏さん差し入れおいしくいただきました。
写真添付します。

1枚目・塩崎さん発見のオオモノ。
2枚目・宴会風景1
3枚目・宴会風景2



北インドの旅

投稿者：越田和男

投稿日：2010年12月 9日(木)

本文「インドの旅」と重複しますので掲示板はカットしました。本文をどうぞ。

Re: 遠見尾根

投稿者：山本　恵昭

投稿日：2010年12月31日(金)

今日は寒いですね。干しているテントの氷が融けません。

山の中ではなく、家のコタツで過ごせて幸せです。

29 日五竜とおみスキー場のゴンドラ終点から、リフト代をケチってリフト横をシール登行。

順調に行けたのはゲレンデ内だけで、リフト終点からはスキーを履いても膝から腰のラッセル。雪も降り続き視界も悪い。おまけに、ザックには、大量の酒と鍋の食材。

ゴンドラ終点から1時間、地蔵の頭を過ぎたあたりで早々にテント設営。

テントへ入ると靴も履いたまま、カンさん差し入れの旨い日本酒「七本槍」をいただき、ひとごこち。夕食はあったか中華風鍋。日本酒、ブランデー、焼酎と完全宴会モードに。夜半、雪が降り続く。

30 日は荒れる予報であったが、早朝は風も止み視界もそこそこ。

小遠見目指してアタック装備で 1 時間ほど登るが、再び風も出て天気が崩れてくる。

小遠見の見える尾根上で黙祷をして、すぐ撤退。

テントでお茶をして撤収し、賑わうゲレンデを下り駐車場へ。

消費カロリーより吸収カロリーよりの方が大きい山行となりましたが、いつもお元気なカンさん、心遣いの大森さん、初めて一緒に山に入ったゆるキャラの松成くん、テントの外は寒くても暖かい年末を過ごせました。

身延の山ふたつ

投稿者：越田和男

投稿日：2010年12月31日(金)

昨日、一昨日と一泊でＪＡＣ図書委員の仲間５人で亡年山行してきました。山梨県最南部の富士川左岸、右岸の山をひとつずつの軽登山と温泉です。

①　思親山 1031m

ＪＲ身延線内船駅から細い林道を辿り標高845mの佐野峠に駐車。峠に出たとたん真正面にドカーンと富士の西面がせまり、真中に大沢崩が荒々しい山肌を見せて圧倒的。ここから登り小一時間で山頂に達すると、眺望は更に開けて、駿河湾越に伊豆の山々まで見渡せた。

②　佐野川温泉

宿は富士川左岸の支流佐野川にたたずむ一軒宿。もう2～30年も前になるが、5月の連休中に伊藤文三さん、大関、飯田たちとひと浴びした記憶がある。当時はプレハブ風の掘っ立て小屋の横に野天風呂があった品疎な宿だったが、すっかり建て替わりりっぱな宿になっていた。谷間なので眺望はないが、風呂よし、部屋よし、料理もよく、@9500円というのも岳友との亡年会にふさわしく気に入った。

③　篠井山 1394m

思親山から富士川を挟んだ対岸に独立峰的に聳えるこの山は、最近夏には山ビルが多くて敬遠しがちだが、この季節には熊の心配もなく、最上部は雪の世界で登高意欲も湧いてくる。登りは前日のようには訳にはいかず、登山口の駐車場 715m から気合を入れて大洞川の谷間を凍てついた丸木橋をいくつも慎重に渡りながら、つめて行ったのだが、雲行き怪しく小雪が舞い出した。「渡り場の頭」という地点の近くで、ちょうど下山してきた単独行者に上の様子を聞くと風雪激しく眺望も皆無というので、即下山と決定。

大森君たちの遠見尾根に比べて如何にも軟弱でしたが、高齢者なりの正しい「温泉付き安全山歩き」で今年の山行きを締めくくりました。同行者は、大橋晋、南井英弘、田村俊介、絹川祥夫の諸氏でした。

皆さま良いお年を！！！

遠見尾根

投稿者：大森雅宏

投稿日：2010年12月30日(木)

遠見尾根、天気が悪くてあいにくでした。雪とサケはあったのですが、眺望がさっぱり。

委細は山本リーダーのカキコミご覧ください。(もうすぐカキコミと踏んでいます)

写真は「天気悪いけどこのまま引き返すの

もナンやし、ちょっと散歩でもいきましょ」で散歩から帰ったところ。
左から　松成・カンさん・リーダー山本。

カンさんのことは常々スゴイと思うのですが、平井さん・越田さん・米山さんの「数年前ラッセル小遠見まで」と言うのもごついなあ。皆さんお元気です。

今年も押し詰まりました。どうぞ良いお年をお迎えください。

（無　題）
投稿者：平井吉夫
投稿日：2010年12月29日(水)
雪の遠見での追悼酒宴、いいですね。数年前にバブとコッシンと私の三人で、雪をラッセルして小遠見の頭まで行ったことがあります。たぶんカクネ里を見に行ったんだと思います。高校生の頃、大遠見にテントを張って五竜をねらったけれど、連日の大雪で往生したことを鮮烈に思い出しました。あのときは降り込められたテントの中で、ポンと喧嘩ばかりしていたのも、今になると、いい思い出、というか、岳友ポンとの絆を強めているようです。

藪内さん追悼登山
投稿者：山本恵昭
投稿日：2010年12月28日(火)

今夜発で、1泊2日遠見尾根スキー登山に行ってきます。
メンバーは、カンさん、大森さん、松成くん、私の4名です。
五竜とおみスキー場のゴンドラ終点から、中遠見ぐらいまで登ってテント泊。鹿島槍を見ながら、藪内さんを肴に一杯呑む計画です。
しかし、天気が悪そうなので、小遠見、あるいは地蔵の頭ぐらいで早々にテントを張って、雪見酒ということになりそうです。

鎌倉アルプス
投稿者：越田和男
投稿日：2011年 1月 7日(金)
昨日、まことに軟弱な今年の歩き始めをしてきました。あまり好きではない「なんとかアルプス」と名付けられたところは全国に多々あるようですが、鎌倉アルプスは最高峰大平山でも２００ｍなく、もっとも低い部類でしょう。神戸の須磨アルプスはどうだったかな。

それでも出発点の建長寺の石段登りには、息切れして難儀しました。横浜市と鎌倉市の境の尾根筋は、落葉樹が多いので、この時期は明るく、落ち葉をカサカサと踏んでの稜線歩きは心地よいものでした。下りたところの瑞泉寺の静かなたたずまいも格別でした。

このところ、東京、横浜地区は、他所の豪

雪、雪害のニュースを見ていると申し訳ないような晴天続きで、元旦から今朝まで7日間連続で朝の富士が我が家から望めました。腰痛で栂池の雪見会に参加出来ない悔しさを紛らわしている次第。

ドイツ旅行から帰ってきました

投稿者：田邊　潤

投稿日：2011年 4月21日(木)

3週間の夫婦でのドイツ旅行を終えて4月9日に帰ってきたのですが、あまりに疲れているのでご報告が遅れました。こんなに疲れたことは初めての経験で 2 週間経つのにまだ何もする気なくぼうーとしています。ドイツの北の端リューベックから南の端シュパルツバルト、フライブルクまで、そしてハイデルベルクを経てフランクフルトまで、友人の車ですが約3000km余を走りました。車のナビが古臭くて矢印と音声だけの案内のため、そしてインプットに手間がかかり(実際ははっきりと理解できない)、小村の名所のほとんどを見ないままでした。でもそれを見ていたら予定通りに帰ってこれず、もっと疲れていたことと思いますので、マァー良かったのでしょう。なんせ70万分の一のドイツ全図の地図で計画を立てたものですから

山屋として恥ずかしいことに1cmでも7kmもあることを失念していたのです。それでも、マルチン・ルッターの生家を見たり、バルバロッサの洞窟を見たり、シュパルツバルトではドイツで一番長い滝を見たりしました。だけど夫婦での3週間の旅のなんと楽しかったことか。

秋にはオーストリー全土を回る旅をこれから計画します。また、スキー仲間で出ているアールベルクでのスキーツアーなども計画してみるつもりです。ガチャ

西穂高

投稿者：大森雅宏

投稿日：2011年 5月 5日(木)

川野の言い出しで、穂高に行ってきました。西穂高・西尾根。

連休の真っ最中、トレースばっちりと踏んでいたのですが、とてつもなく不人気コースなのか西穂高のてっぺんまで出会う人もいない貸切コースでした。

写真はあの先もうすこしで西穂のてっぺん、という雪壁の登りです。

前は山本、次は川野。

私個人で言うと、こういう高度感とか緊張感が結構好きだったのですが、今回はしんどい登りでした。

西穂高岳　西尾根

投稿者：川野幸彦

投稿日：2011年 5月 6日(金)

ご無沙汰しております。皆さんお元気ですか？

昨年の剣岳に続き、今年の５月も大森さんと同期の山本と西穂高岳へ登ってきました。晴天に恵まれて残雪の西穂高岳を楽しんできました。以下報告です。

５／２（月）

２２：３０にＪＲ神戸駅で待ち合わせ。山本のクルマで新穂高温泉を目指す。阪神高速の西宮と名神の瀬田で渋滞。相変わらず“高速道１０００円”の影響か混んでいた。途中のパーキングエリアでも仮眠のクルマでほぼ満車であった。それにしても寒い。東海北陸道の随所に見られる温度計で０℃を示すものもあった。５月とは思えない。新穂高温泉には５時過ぎに到着。

５／３（火）晴れ→曇り＋小雪　　新穂高温泉⇒西穂高岳西尾根２１５０ｍ付近

登山センターに登山届を提出。今年は例年よりも雪が多いらしい。林道を行く。営業中の穂高平の避難小屋から柵を乗り越え牧場の奥まで進み、途中から赤布が現れそれを辿った。しばらくすると尾根の取り付きでケモノ道のような微かな踏み跡がついていた。この辺り雪は無かったが、少し登ると急な雪の斜面となり、１９４６ｍピークまではひたすら登りである。消えかけの先行パーティのトレースがあった。トレーニング不足と重荷？のためピッチは上がらない。山本と大森さんに完全に置いていかれ、バテバテで２１５０ｍの台地に到着。痩せ尾根上にテントを張る。途中、たくさんの赤布やテープがあり、よい目印となった。ここまでは緩んだ雪にボコボコと足をとられ無駄な体力を消耗した。テント設営後は持参のアルコールで宴会。楽しい一時であった。荷を軽くするためにガンガン飲んだ。ここからは笠ヶ岳方面がよく見える。白く美しい。ただ、目の前の第１岩峰と第２岩峰が急で不安になった。夕方から小雪が舞い始めたが、天気予報では明日は晴れである。疲れがひどく帰りたかったが、これで帰る理由はなくなった。大森さんと私のヤル気は今ひとつであったが、山本はヤル気満々である。

・新穂高温泉６：４５⇒西穂高岳西尾根２１５０ｍ付近１３：３０

５／４（水）晴れ　ＴＳ⇒小鍋谷⇒西穂高岳⇒西穂高山荘⇒新穂高温泉

４：３０に起床。朝食の日本そばは美味しかった。ＴＳより痩せ尾根を辿る。早朝なので雪が締まり、アイゼンが効き登りやすかった。２Ｐ程で第１岩峰直下のコルに到着。先行パーティのトレースは第１岩峰のピークを目指して付いていたが、我々は雪が締まり安定しているので右側から小鍋谷に入り巻いた。ただ、このルートは５月だけで、冬は雪崩の危険が大きく勧められない。急な斜面を西穂高岳ピークに向って登った。最初は傾斜もそれ程ではなかったが、登るにつれ徐々にきつくなった。この登りは氷の滑り台で落ちたら終わりである。キックステップに力が入る。しんどい！コルから３Ｐでピーク直下の残置フィックスのあるリッジに到着。ザイルを出す。山本は丸腰で登ったが・・・。３０ｍであるが結構急で緊張した。今回、唯一のザイルを使ったピッチであった。これを登り切り、細いリッジを５０ｍで西穂高岳ピーク。頂上は１０畳程の広さで狭く落ち着かないが、天気が良くて素晴らしい眺めである。

記念撮影後直ちに下山。よく踏まれたトレースをたどり西穂高山荘に向った。両側の切れた痩せ尾根とコブが続くが、ピラミッドピークの下降で５ｍ程クライミングダウンしただけで全く問題なかった。トレースがしっかりしていると、これほど歩きやすいものか。途中、小鍋谷を滑降するスキーヤーを見た。この人は、我々が小鍋谷を登るときにかなり下部を登っていた。日帰りで西穂まで登り、頂上直下のコルから滑っていった。上手い。また、独標の手前で雷鳥を見た。近づいても逃げない。人に馴れているようだ。独標を過ぎると登山者も増え、シリコも交えロープーウェイ乗り場までバテバテで歩いた。ロープーウェイ乗り場には大勢の観光客がいた。ロープーウェイに乗り下山。１３００円也。露天風呂に入り、中部縦貫道のチェーン脱着場でささやかな宴会＋仮眠。大阪へ着いたのは朝の４時であった。疲れた！！！

・ＴＳ６：０５⇒西穂高岳１１：００⇒新穂高ロープーウェイ乗り場１５：１０

以上です。

今日は全身が筋肉痛で辛いです。いつまでこのような登山ができるのか？今年で３人の合計年齢がちょうど１６０歳です。

（無　題）

投稿者：平井吉夫

投稿日：2011年 5月 6日(金)

西穂頂上直下の稜線を登る写真、あんなものでも今の私は見るだけで足がぞくぞくします。なさけない。

５月３日に福井県の木の芽峠で、袈裟をかけ念珠を持って蓮如上人の御影道中をお迎えしました。同行は田村（大阪外大）、絹川（学習院）の両氏。　平井吉夫

Re: 西穂高

投稿者：山本恵昭

投稿日：2011年 5月 5日(木)

昨年に続き、大森さんと川野との３人で５月中年合宿に行ってきました。

西穂高岳西尾根は程好く緊張感もあり、１泊で抜けることができるお手頃コースでした。

３日　穂高平の牧場を奥まで進み、夏の踏み跡を探しながら尾根の急登にかかる。雪があまり締まっていないので踏み抜いて体力を消耗した。2150m付近の台地にテント設営。夕方雪がぱらつく。

４日　樹林帯の尾根を辿ると第１岩峰直下。雪が安定しているので右から巻いて雪面をひたすら登る。徐々に斜度も増し、山頂直下の雪壁はザイルも使って慎重に行く。

西穂高岳山頂は３６０度の展望。狭い山頂に小屋から次々と人が上がってくるので早々に出発。

山頂から独標までもリッジが続くがトレースがあるので楽勝。西穂山荘経由でロープウェイを使って下山。

深山荘の露天風呂で汗を流し、高山で買出しをして清見インターへ行く途中のチェーン脱着場で宴会 and 仮眠。深夜の高速を渋滞なしで帰宅しました。

今年は４月が寒かったせいか中途半端に雪がついて嫌らしい所もありましたが、昔取った杵は健在で安定した登攀でした。

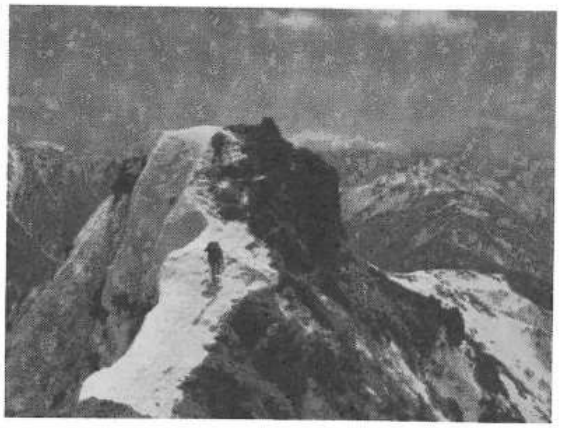
年齢を考えて食料装備など軽量化に徹したのに、テントを張って一息つくとどこからともなく酒とアテが次々と出現。気心知れた中年メンバーでワイワイと楽しんできました。

（無　題）

投稿者：平井吉夫

投稿日：2011年 5月13日(金)

広瀬ポンの六甲超えの投稿、楽しく笑いながら読みました。頭の中でコースを想像しながら読んだのですが、ひとつわからんとこがあります。文中にでてくる「地獄谷」というのはどこにあるのか。かつてわれわれがロックガーデンへ岩登りに行くとき、高座の滝の裏の谷（ゲートロックの下）から遡行するコースを地獄谷と言っていたような気がするのですが、あれとはちがうのですか。六甲を離れて５０年以上たって、記憶は朦朧としており、恥ずかしながらおたずねします。平井吉夫



西穂・西尾根

投稿者：越田和男

投稿日：2011年 5月 5日(木)

連休中に貸し切りとは、なかなか渋いところを登りましたね。

あまり知られていませんが、この尾根は確か甲南が積雪期に初登攀したところだと思います。甲南が積雪期のジャンの飛騨尾根を何回か試みていた頃のことで、伊藤文三さんと福井グリンさんが飛騨尾根をアタックしたときに、喜多豊治さんと鷲尾顕さんがそのサーポートのために登られたようです。昭和10年代のことです。

登山史にご興味のある方にご参考まで。

（無　題）

投稿者：平井吉夫

投稿日：2011年 5月13日(金)

広瀬ポンの六甲超えの投稿、楽しく笑いながら読みました。頭の中でコースを想像しながら読んだのですが、ひとつわからんとこがあります。文中にでてくる「地獄谷」というのはどこにあるのか。かつてわれわれがロックガーデンへ岩登りに行くとき、高座の滝の裏の谷（ゲートロックの下）から遡行するコースを地獄谷と言っていたような気がするのですが、あれとはちがうのですか。六甲を離れて５０年以上たって、記憶は朦朧としており、恥ずかしながらおたずねします。平井吉夫

六甲山越え

投稿者：廣瀬健三

投稿日：2011年 5月12日(木)

８０歳と７１歳のｊａｃのお元気な御仁達と、去る５月７日、表六甲から西裏六甲に下り、折り返し地獄谷を遡行し、六甲山ホテルの横まで、殆ど休憩なしで歩きました。お二人は歩き始めた阪急六甲駅まで、

登ってきたアイスロードを下り、阪急六甲駅まで歩かれたようです。小生も体力的には余力ありでしたが、折角の眺望を堪能せずに、走り下りるのはもったいないので、ケイブルカーに乗りました。"" 六甲アルプス"" は期待はずれの尾根でしたが、地獄谷は良かったです。帰途阪急六甲駅への歩道で、猪と出会い難儀しました。歩道の左側は確か石壁、右側は乗り越えられそうもないガードレールで歩道幅２ｍ足らず。のしのしと上がって来る、こちらは下る。２ｍほどの距離までせばまったところで、お互いにらめっこ、さてどうしようかと困却す。相手もこちらをじっと見て思案顔？突如、彼？彼女？は不可能と思われたガードレールの下を潜り抜け車道に出てくれました。桑原　くわばら、キット温厚な性格だったのでしょう、ラッキーでした。

地獄谷

投稿者：廣瀬健三

投稿日：2011 年 5 月 15 日(日)

六甲山には四つの地獄谷が有ります。平井センキチも良く御存知の---ロックガーデン. ゲートロックの下からＡ懸に出るルート、それに今回の福田兄の掲示で良く分かりますルート(去る７日、小生達が辿った)そして住吉の上の五助谷の西側の谷筋、あと一つは分かりませんので、探して行ってみたく思ってます。

六甲山地獄谷

投稿者：福田信三

投稿日：2011 年 5 月 14 日(土)

平井さん

地獄谷はシュラインロードを少し北へ進み住友ベークライト保養所を西へ左折、元の三井倉庫保養所手前を左階段をお下りる道、通称" ノースロード" を西へ５分ほどで" 地獄谷" の標識があります。丁度 YMCA の一番北端辺りです。水晶山経由で夏が涼しいです。新鉄の大池へ下ります。地図をご覧ください。

ロックガーデンのも地獄谷と呼ばれています。

http://maps.google.co.jp/maps/ms?ie=UTF8&brcurrent=3,0x600089b1c79eab29:0x147b2f1d740f4153,1&source=embed&oe=UTF8&msa=0&msid=109586986530490488062.0004966 8a150d4fabcdc7

篠山　多紀アルプス

投稿者：山本恵昭

投稿日：2011 年 5 月 15 日(日)

いつものことですが、朝起きて急に山へ行こうということで、妻をお供に家を８：30 出発。

以前から気になっていた篠山の三嶽と小金ヶ嶽へ向かう。

10：00 登山口へ着くと何やら大勢の登山者が集まっている。

伊丹産業のグランドを駐車場に開放して、篠山山開きということでした。

よく事情が理解できないままに地図をもらい老若男女の団体さんの最後尾についていく。

途中、クリンソウの群落へ案内してもらい、三嶽山頂 12：00。

大タワ峠でラーメンを作っていると、駐車

場で山開きイベントが始まる。
ビンゴゲームで景品が当たるそうだが最後まで居ると遅くなるので、スリル満点の鎖場コースを辿って小金ヶ嶽山頂へ 13：45。
南へ急斜面を下って登山口へ 15：00。

静かな山のつもりが、いろいろな団体さんで大賑わいでした。
山中の看板説明文によると大峰をしのぐ修験道の聖地だったそうですが、大峰の僧兵によって壊滅されたそうです。山開きイベントにも山伏の姿がありました。

山菜キャンプ
投稿者：ポンポン山の山口
投稿日：2011 年 6 月 6 日(月)

初めて投稿させていただきます。塩崎君の友達で 4 日氷ノ山の山菜キャンプに参加させていただいた。山口と申します。(41 年卒でサッカーやってました)　山本さんの山菜料理とっても美味しくいただきました。ご馳走様！。　山菜を見つけたり料理の段取りの良さにタダタダ感心させられ、みなさんと楽しい時間が過ごせました。ありがとうございました。
　ポンポン山の山口

山菜キャンプ
投稿者：山本恵昭
投稿日：2011 年 6 月 5 日(日)
山菜キャンプ、雨天を心配していましたが、天候にも恵まれて楽しんできました。
参加者は、武田さん、塩崎さん、塩崎さんのお友達でサッカー部ＯＢの山口さん、平井幹男さん、大森さん、私の６名。

たまたま神大ヒュッテは今年も開いており、金曜からスズコ採りに来られていた土山さん達にコーヒーをご馳走になり、しばし談笑。
今年は雪が多かったため山菜が出遅れているとのことで、神大ヒュッテ周辺でちょうど良い時期のスズコがたくさん採れました。
そんなこんなで、山頂には行かず、１時間ほどスズコ採りに専念。
その他に、タラノメ、ウド、コシアブラ、葉ワサビを入手。
２時頃には天滝の休憩所へ移動し、ビール片手に皆さんでひたすらスズコの皮むき

をしていただきました。
タラノメ・ウド・コシアブラの天婦羅、スズコのマヨネーズ和え・酢味噌和え・カツオ味、武田さんが持ってきてくださったイノシシ肉のワイン蒸し、スズコ入りボタン鍋とお腹一杯食べて、お酒も進みました。遅くまで、いろんな話で盛り上がり、楽しく過ごさせていただきました。
ご参加の皆様、有難うございました。

立山スキー合宿

投稿者：浪川　純吉
投稿日：2011年 6月 6日(月)
2～5 日まで関学の立山スキー合宿に参加してきました、2日は天気が悪く室堂に面した浄土山の斜面でスキーの練習　3 日山崎カール～雄山頂上～山崎カールを滑降～一の越～浄土山頂上～室堂　週の前半に降った雪で 2800m以上は 5 月連休頃の状態で雄山頂上から初めてファーストトラックを味わい感激、この日は一日中快晴無風　4 日二手に分かれ一の越～雄山頂上組と我々は東一の越～タンボ平へ、この日も快晴二日間で真っ黒に焼ける　5 日朝から帰坂
今回も厚かましく関学のスキー合宿参加させてもらい皆さんに大変親切にしていただきありがとうございました。

奥飛騨・中尾の集い

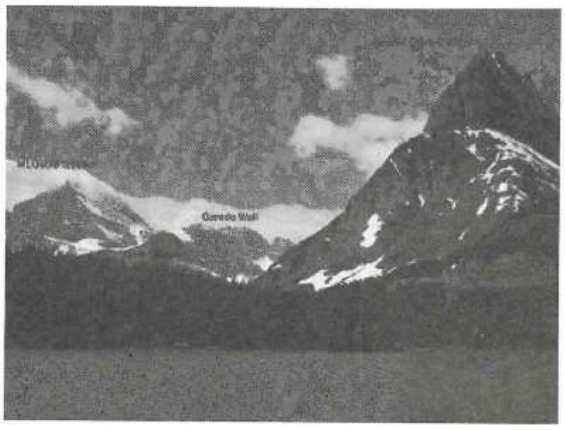
投稿者：越田和男
投稿日：2011年 6月 16日(木)
先週末は恒例の奥飛騨・中尾温泉一泊行で１５名が集まりました。以前この会を「新制年寄会」と呼んだところ、クレームがつきましたので「新制初期会員の集い」とでもしておきましょう。まあ、爺様には違いがないですけど。

参加者：小原、阿部、砂川、鈴木、雨宮、米山、田辺、鳥居、田中、越田、平井、飯田、二谷、武田、塩崎
なお、田中（お星さん）は初参加。１３年におよぶ秋田勤務を終えて神戸に帰って来たところ。何十年ぶりに会った方も多かったのでは。

グレーシャー国立公園

投稿者：福田信三
投稿日：2011年 6月 23日(木)
アメリカ、モンタナ州のグレーシャー国立公園にいます。シアトルから入りましたが、カナダ側にも続く広大な公園です。名前の通り、ロッキー山脈の氷河や、氷河湖を中心にした国立公園で、アメリカで最も美しい公園と言われています。その言葉につられてやって来ましたが、事実はその通りでした。アメリカの国立公園巡りの最後に残しておいて良かったです。スイスのように開発されすぎていません。ただ、両国によって入園料や料金体系が異なりますので、自然の中に線を引いた人間の行動の勝手も感じざるを得ません。
200 以上の氷河湖を水源とする一帯は森林の宝庫で山と湖とのバランスがよくとれています。そのため鹿、熊、山山羊などの動物や高山植物も豊富です。WATERTON では街中に鹿や山羊があちこちに居ますが奈良のように餌やりは禁じられています。その時期にはメインストリートでオス同士の戦いが見られるとのことです。
デンバーのエステスパーク、グランドテト

ン、イエローストンそしてグレーシャーからバンフ辺りのカナディアンロッキーへと続くロッキー山脈の懐の深さを知りました。
こんな公園こそ季節毎に訪問したいのですが、何分関空からの便の悪さに”無理かなあ”です。



熊に遭遇
投稿者：福田信三
投稿日：2011年 6月 24日(金)
WATERTON　国立公園でBlack Bear に遭遇
当然ですが、後ずさりしながら撮影。
たんぽぽや野草を食べていました。
熊は雑食なんですね。毛並みの良さはさすが自然体、陽に輝いていました。

新疆ウイグルの旅から
投稿者：越田和男
投稿日：2011年 7月 5日(火)
先月後半、「パミール中央アジア研究会」の仲間一行１０名で、新疆ウイグル自治区を旅してきました。覚悟の上とはいえ、４０数度の炎暑と超距離バスでの移動は老体には少々こたえました。それでも、旅の途中で、東京の新宿で３９度Ｃとのニュースを聴き、何だかほっとした次第です。
いい歳をして、遅まきながらシルクロードのほんの一部を垣間見た旅の印象下記します。

①タクラマカン砂漠縦断
天山南路のルンタイ（輪台）からほぼ一直線に南へ西域南路のニヤまで、タリム砂漠道路「塔里木砂漠公路」を行く。６００ｋｍ全舗装。この日はクチャ（庫車）を出発してニヤまで１２時間のバス旅。途中で砂遊びをしていたら、気温は４３度、砂の表面は恐らく６０度は越えていたと思われるが、小生の靴底のビブラムの接着剤が溶けて、両足ともはがれ落ちた。のんびり「月の沙漠を遥々と・・・・・」と云う訳にはいかなかった。交通量結構多く、今や産業の大動脈の感あり。更に、４年前には、このルートの他に、アクスからホータンへの新しい砂漠横断路も開通し、西域南道の諸都市も今や秘境ではない。
一方、カシュガルからクンジュラブ峠を経てパキスタンに向かうカラコルム・ハイウェイは現在閉鎖されており、カシュガルで見られると思っていた、あの満艦飾のパキスタンのトラックには出遭わなかったが寂しかった。

②南彊鉄道

カシュガルから東へ、ほぼ天山南路の沿って走る鉄道、トルファンまで約1300ｋｍ、22 時間の列車旅を楽しんだ。１９９９年開通というから、そんなに古い訳ではないはずだが、一等寝台でも両サイドの窓の汚れが尋常ではなく、まるで車窓が楽しめない。砂漠の砂嵐のなかを走るのだから、しょうがないのかなとも思ったけれど、車両両端のデッキや食堂車へ行けば、さすがに綺麗な窓だった。やれば出来るのである。途中の駅で外から濡れティッシュで拭いて見たけれど、汚れがひどく効果甚だ不満足。

トルファンに近ずく少し前に、天山山脈越えがある。ちょうど夜明けで、デッキに張り付き、素晴らしい山岳車窓を楽んだ。朝寝坊して、この景観を見逃した仲間あり、実にもったいないことです。

南彊鉄道はさらに伸び、今月はじめにカシュガルーホータン間が開通し、計画ではさらに東に延びてチベット鉄道のゴルムドへと繋がるらしい。

③風力発電

ウルムチとトルファンの間、ちょうどボゴダ山群の南麓にあたる所の風道に、おびただしい風力発電の風車群をみる。中国は今や風力発電量は４０００万ＫＷ超で米国を抜いて世界一（日本はわずか２６０万ＫＷ）。当初はデンマークの技術だったのが、いまや、世界規模の自社技術の風力発電設備のメーカーの本社がウルムチにあり、どんどん売りまくっているとのこと。ちょっと考えさせられました。

④大都会ウルムチの夜のショー

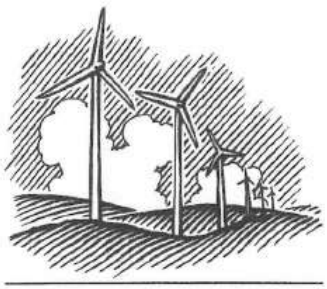
２～３００人は入ろうかと思われるレストランでのディナー・ショー。万席の客はほぼ沿岸諸省からの観光客またはビジネスマンの方々。一方、踊り子たちはほぼウイグル人、大舞台に大音響を轟かせての饗宴が一時間を越えて続いた。毎晩こんなことやってるのですかね。

⑤遺跡巡り

管理が行き届かず放置された仏教遺跡は、さすがと思えるところが多かった。しかし、どこでも肝心の壁画はかってのドイツ隊のル・コック、英国隊のスタイン、そしてそのおこぼれを頂戴した大谷探検隊などによって持ち去られたことが、案内板に明記されていたり、ガイドが説明したりしていた。

最近、南米ペルーのマチュピチュ遺跡から、１００年前に米国エール大学に持ち去られた出土品を、ペルーに返還するという話がまとまったと聞くが、新彊での管理状態を考えると返還はまだちょっと早いのかも知れない。

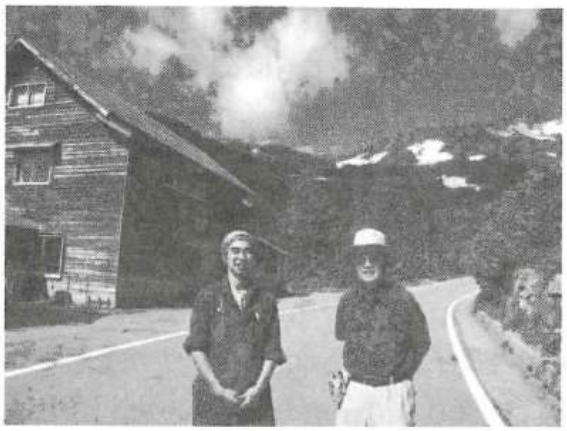
最後に確認事項あり。ウイグルの若い女性は間違いなく美しい。また、子供達の笑顔も忘れ難い。そしてビールも美味い。



乗鞍の写真

投稿者：越田和男

投稿日：2011年 7月15日(金)



添付に失敗したので再送。

夏の乗鞍

投稿者：越田和男

投稿日：2011年 7月15日(金)

今週初め会社仲間に誘われて乗鞍へ行ってきました。涼しかったです。横浜に帰って暑さにげんなりしてます。一泊目は「位ヶ原山荘」、二日目は鈴蘭地区の「みたけ荘」泊。もっと居たかったです。

位ヶ原山荘では小屋主の関大ＷＶ部ＯＢの六辻君が頑張ってくれていました。甲南室も健在です。写真は位ヶ原山荘前、六辻君と。

肩の小屋口でバスを下りて蚕玉岳まで往復（小生以外は剣が峰往復）しましたが、大雪渓の雪の量が随分少なく感じられ寂しい思いです。雨宿りで立ち寄った「肩の小屋」は、食堂を無料で開放しており、従業員の態度がよく、好感が持てました。

能郷白山

投稿者：阿部康彦

投稿日：2011年 7月28日(木)

皆様ご無沙汰しております。久しぶりに投稿させて頂きます。あれは2年前2月か3月に竜王インター近くの綿向山を登った時の事でした。山頂で綿向山を愛する会の会員の方に出会いマウンテンビューについて、丁寧に講義してもらいました。その時一番彼方に見えて雪を頂いたかっちょいい山が能郷白山でした。元々山の名前には興味の無い私でしたが、まったく聞いたことの無い名前でした。「何だか聞いたことないマイナーな山だけどなかなかの姿だなあ」としっかり私の記憶の奥底にインプットされたのでした。ひょんな事から今年登る事となり、調べてみると石川の白山と合わせて両白山地とか言うとか何とか。また荒島岳と百名山を競って負けたとか、なにやら曰くありげな山なのですっかりやる気になって前夜発日帰り登山を決行。福井の大野市から Ｒ１５７を麻那姫湖に向かい、青少年旅行村で仮眠（５畳のバンガロー１棟１５００円とリーズナブル・渓流釣りの釣り師多し）翌日そのまま４０分ほどＲ１５７を岐阜県境まで行くと、登山口の温見峠で土砂崩れのため通行止めの巨大なコンクリートブロックが置かれていました。岐阜県側からは複雑な迂回路を通る上、悪路らしいので温見峠を使う場合は殆ど福井県側からのアプローチとなるようです。6時に登り始めましたが上は雲がかかり景色悪そう、また結構な急登。森林がブナ林から高山植物帯に変わり始めた頃、美しい高山植物達を尻目に私の体に異変が生じたのでした。鼻水とくしゃみが

止まらない！　暫くして「もしかして花粉症？」と気づいた時にはもう遅く、あたり一面を黄色い粉を撒き散らす雑草のような植物が覆っているではありませんか、何たる極悪な草め（イブキトラオオとか言うらしいです）と思いながら手ぬぐいで花と口を覆い更にコメリで買った防虫ネットを被って鼻水と汗をたらしつつ何とか標高１６００ｍの山頂へ、山頂はブッシュとガスで見通しが今ひとつの上、極悪草が生えているのでとっとと下山使用と思っていると一瞬雲が晴れ、２００ｍほど向こうに祠が見えたのでした。これは行かねばと藪道と化した登山道を掻き分け白山権現祠に到着。雲が流れて中々の景色でした。また藪を掻き分けて戻っていると背中がムズムズ、手でまさぐると見覚えのある奴が指先に＝ダニでした。とまあ散々な目に合いつつも４時間ほどで山行は終わりました。白山とは似ても似つかない山でしたが、２年の時を経て登れて良かったなと感慨不快！ものがありました。きっと秋とか残雪期には素敵な山になるんでしょうね（と心より願っております）。尚、我々の後続は８人おり７０代の方が多かったです。若者は我々以外おりませんでした。今度は、３０００ｍ位の山に登りたいなと改めて思いました。やっぱり北アルプスが一番！

目次

山岳会ホームページ掲示板より－書籍などの文化関連

「十五年戦争下の登山」
投稿者：越田和男
投稿日：2010年 9月 25日(土)
新刊本の紹介です。日本山岳会の会報用に執筆した拙稿を短縮し、文末に甲南関係のことを追加したものです。
西本武志・著
『十五年戦争下の登山—研究ノート』
2010年8月　本の泉社
定価 1800円

満州事変から太平洋戦争敗戦に至る十五年間（昭和六～二十年）の我が国登山界の動きを、著者の既発表の論考や講演録に加筆・訂正してまとめられたもの。戦時中に指導的立場にあった多くの著名登山家が、如何に時勢に迎合し、スポーツ登山を排する軍部の圧力に加担したか。また、そういった人たちが、戦後も登山界の指導者として如何に変わり身早くアルピニズムの復興をうたい上げたか。従来これらについて本著のようにまとめられたことはなかった。

著者は「登山史研究者はもちろんのこと、実践者としての登山者が十五年戦争下の登山の実相の解明を怠ってきたことは問題だ」と指摘し、この部分を欠落させた登山史を批判している。第一章「戦時下の登山の実相と敗戦後の登山」で略全容を述べ、第二章「かくてアルピニズムは蹂躙された」へと続き、第三章「戦火に散った岳人たち」には各種登山団体から収集した「戦没岳人・人名録」が付く。第五章「“山の発禁本”覚書」では名著・浦松佐美太郎の「たった一人の山」が発禁にいたる経緯などが述べられ興味深い。

「日本的登山道」なる言葉が現れたのは満州事変直後のこと。これは高みを目指すことを目的にする登山ではなく、要するに隊伍を組んで軍隊式に登る「行軍登山」を第一義にするもので、やがてはアルピニズムを「欧米の個人主義に毒されたもの」として排撃し、さらには「皇国史観にたった日本的登山道」の推進へと進む。やがて結成された「山岳戦技研究会」なる組織では、軍と山岳界の合同による実地訓練を雪の北アルプスで行い、機関銃を前穂高の頂上まで担ぎ上げたりしている。

軍部の動きに積極的に迎合して加担した人々、時流に抗せず止むを得ず協力した人々、そして抵抗勢力としてこの動きに批判を続けた人々など、本著では全て出典を明記の上、実名で登場する。平和な時代に山を楽しんでいる我々今の登山者が、想像を絶する戦時体制下に身を置いた時、果たして何処まで抵抗出来るだろうかと、重い問いかけを残している。

本文中には、旧制甲南高校山岳部の多数の部員が治安維持法違反で検挙された例の白亜城事件にも言及あり。戦没岳人・人名録では甲南の楠木義昭、湯川孝夫、加藤弘三、多田潤也の４名のお名前が記載され

ている（小生の手元資料では他に、藤沢浩、田口六郎、村上正一郎の三氏あり）。また巻末の「主要登山記録」では、甲南ＯＢおよび現役山岳部員による登攀記録が２３件記載されている。

残念ながら奥山先輩ら山岳部員が中心となって軍事教練の強化反対のビラを配った事件や、小川先輩らが昭和１６年、学校側の強要する「剛健旅行班」に最後まで抵抗して、部室の扉に「KONAN ALPINE CLUB」と大書して、学校当局に黙認させた事実などについての言及はない。

裸の山　ナンガ・パルバート

投稿者：越田和男

投稿日：2010年10月 9日(土)

『裸の山　ナンガ・パルバート』の刊行の機会に、訳者平井吉夫の講師のもと、下記懇談会が日本山岳会で行われます。参加無料、申し込み不要、ＪＡＣ会員外でも参加ＯＫです。この本の原書刊行にいたる経緯や、裏話など聞くことが出来るのでは、と期待するところです。比較的少人数の２次会付きの気軽な集まりです。在京の方は是非足を運んで下さい。

懇談会：第２０回「山を語る」－メスナー兄弟のナンガ・パルバート横断をめぐって

日時　１０月２２日（金）１８：３０より

場所　東京都千代田区四番町５－４サンビューハイツ四番町　日本山岳会１０４号室　　Ｔｅｌ 03-3261-4433

1970 年以来の隊長ヘルリヒコッファーとメスナーの間の今に続く係争だけではなく、遡ってヘルヒコッファー対ヘルマン・ブールのナンガ初登頂をめぐる確執・係争など、登山史の裏面が語られることでしょう。

なお、雨さんもお勧めですが、この本一冊でナンガ・パルバートの悲劇の登山史がわかるようになっています。随所に記録写真もあります。ぜひお買い求めを。

岳人賛歌、１１月７日の神戸新聞より

投稿者：廣瀬健三

投稿日：2010年11月11日(木)

朝刊の一面に大きく井上達男氏の写真と文面が載ってます。４面には平井一正先生も写真と共に載ってます。ＫＡＣ関係の箇所を下記します。

六甲山を抱く兵庫は、多くの探検家を育てた。芦屋で育ち、六甲山が庭だった地質学者の故藤田和夫。旧制第三高等学校（現京都大学）時代から海外遠征を始め、自然人類学者の故今西錦司や国立民族博物館初代館長の故梅棹忠夫らと、中国．大興安嶺やカラコルム山脈に挑んだ。旧制甲南高等学校（現甲南大学）山岳部は六甲山で鍛えた岩登りを武器に、北アルプスに「甲南ルート」と呼ばれる登山ルートを２１も築いた。

井上氏は昨年の神戸大のチベット登山隊の隊長としての紹介で、平井先生は神戸大山岳会前会長で、長く兵庫の学術登山をリードした、との紹介あり、無論、先生が当該チベット遠征に深く関わっておられる事も記されてます。

部に入った経過、現役時代の苦労した山や思い出、前穂の甲南ルートの事などにも触れながら、現在も年に一度は山に登り、ヨーロッパアルプスでのスキーを楽しんでいることを、飾ることなく話していました。剱や鹿島の黒白の写真も懐かしかったです。

是非、ご一読を。それにしても、「岳人」が 800 円するのですね。

学　園

投稿者：小原耕治

投稿日：2011 年 2 月 8 日(火)

第 7 回甲南学園歌唱祭が 3 月 12 日（土）午後 3 時 30 分～6 時 30 分

甲南大学平生記念セミナーハウスで開かれます。

会費 3 千円軽食準備です。

甲南高等学校寮歌や運動部の部歌を歌います。

昨年は山学部から小原、宮本、鈴木頼正、芦田の４名が参加しましたが他の部の参加者に比べ少なくさびしかった。今年は是非他の運動部に負けないように出来るだけ多数参加して、山岳部の存在を占めそうではありませんか、ご協力下さい。

申し込みは甲南大学同窓会、電話０７８－８４２－０３５７、FAX078-811-0366 に来る３月５日までに申し込んでください。

この掲示板での申し込みもＯＫです。

鈴木頼正の携帯電話　０９０-２３５９-４９１０　でも参加受付します。

岳人の記事

投稿者：柏　敏明

投稿日：2011 年 1 月 17 日(月)

「岳人」２月号の竹中さんの記事を読みました。

山に親しむことになったきっかけや、山岳

平井吉夫の訳書新刊紹介

投稿者：越田和男

投稿日：2011 年 2 月 16 日(水)

岳友平井は昨秋は山の本ラインホルト・メスナーの著作を訳出したかと思えば、今度はヨーロッパの皇室裏話を出した。古希を過ぎてなおも、かくも幅の広い、盛んな仕事人間に敬服拍手したい。

書名：「王家を継ぐものたち」－現代王室サバイバル物語

著者：ギド・クノップ

訳者：平井吉夫

出版：悠書館　2011 年２月 pp403　本体定価 ￥2,500ー

やはり平井の訳で日本図書館協会選定図書にも選ばれた前著「世界王室物語」(悠書館) の後編ともいえるものですが、今回は欧州に限定して、オランダ、スウェーデン、スペイン、ノルウェー、デンマーク、イギリスの現存する王室の延命の道をさぐる若き王子、王女達の素顔 (裏話) が描かれています。

かっての左翼闘志の訳者は「訳者あとがき」に「王権が死滅することによって王制が生き残るという奇妙なパラドックス」が現出したとし、そして

問いーでは、何のために王朝は存続しているのか。

答えー王朝は存続するために存続している、と述べている。ご興味のある方は是非 (購入の上) 読んで下さい。

平井センキチの本

投稿者：廣瀬健三

投稿日：2011 年 2 月 18 日(金)

今回の訳書新刊"" 王家を継ぐものたち"" の前に出された彼の訳書"" 世界王室物語"" の跋文として、ジャーナリストの松崎俊弥氏が当該訳文書に就き、次のように記されてます。ーー世界の王室は、まさに「黄昏の時」を迎ようとしている。訳者である平井吉夫氏の力量によるものと思われるが、このレポートから、やがて消え行く王朝への、確かな、そして力強い「葬送」の曲が聴こえてくるようだ。松崎俊弥 (皇室ジャーナリスト)

御蔭様で、普段あまり分からない世界を垣間見れます。更なる活動を期待して、エールを送りたし

本の紹介

投稿者：雨宮宏光

投稿日：2011年 2月22日(火)

高地民族の生活や健康の変化を調査している「高所プロジェクト」という研究計画（5年間）があります。そのプロジェクト初の一般向書籍が、刊行されました。

医学を始めとして、文系・理系のさまざまな研究者２０名が、それぞれの専門分野から見たチベット・ヒマラヤの今を執筆しています。（小林尚礼さんの紹介文を引用しています）

●『生老病死のエコロジー　～チベット・ヒマラヤに生きる～』（昭和堂）　3,150円（税込）

編著者：　奥宮清人（総合地球環境学研究所、医学博士）

執筆者：　高所研究者（全２０名）

写　真：　小林尚礼ほか

頁　数：　２６４p

装　丁：　四六判、ハードカバー

詳細は、以下のページをご覧ください。

http://www.k2.dion.ne.jp/~bako/news-tankoubon3.html

平山郁夫展

投稿者：越田和男

投稿日：2011年 3月 4日(金)

上野の東京国立博物館で「仏教伝来の道・平山郁夫と文化財保護展」があり、奈良・薬師寺から門外不出とされてきた「大唐西域壁画」の展示が観れるというので先日行ってきました。すごい迫力で、中でもヒマラヤを描いた大画面「西方浄土須弥山」には圧倒されました。

場所や山の名前など何も説明されている訳でもないのですが、山好きの者にはそれと知られた山々が、左からプモリ、エヴェレスト、ローツエ、アマダムラム、カンテガと並び、そんな山座同定などをやるようでは、美術オンチ丸出しとは思いつつ、しばし立ちすくんだのでした。

関西在住の諸兄でまだご覧になって居られない方には、ぜひ一度薬師寺にお運びをお勧めします。上野の展示は明後日で終了しますので、今月後半には奈良に帰っていることでしょう。

平山郁夫展　「大唐西域壁画」

投稿者：福田信三

投稿日：2011年 3月 5日(土)

越田さん、情報をありがとうございます。そうですか、こんなでかい壁画が東京に行ったなんて知りませんでした。

薬師寺で2,3回は見ていますが、確か高さは2m以上で長さも50mくらいで、5,6場面あったことを覚えています。

博物館の方が近くで見られたと思います。長安からシルクロード、インドの何とかまでの玄奘三蔵の旅とその功績をたたえたものと聞いています。そのヒマラヤの絵を見る限り、やはりスケッチはされたようで

す。写真より迫力があるのは絵のサイズばかりではないと感じました。福王寺法林という画家もヒマラヤを描きましたが、彼は飛行機で何度も山容を観察して（多分写真を撮り）家に帰ってから描いたとのことです。
日本での山の絵画はやはり富士山が最多で桜島、浅間山、岩木山、大山と続きますが、日本アルプスの山では写真は多いですが、絵画が少ないのは意外です。

平井吉夫の記事
投稿者：越田和男
投稿日：2011年 3月17日(木)
毎日新聞　3月16日　夕刊
「連合赤軍事件：永田洋子からの手紙を平井吉夫さんが公開ー旧共産圏小話集の感想をつづる」という記事です。毎日をとっていないので検索したら下記に載ってました。ただし顔写真抜き。
mainichi.jp/enta/art/news/20110316dde018040065000c.html

映画『岳』５月公開
投稿者：雨宮　宏光
投稿日：2011年 3月24日(木)
石塚　真一原作の漫画　『岳』の映画化。長野県出身の島崎三歩と称する主人公が，山岳救助隊員として活躍する物語。撮影の舞台は八ケ岳　白馬八方尾根 穂高連峰立山など。

本の紹介
投稿者：雨宮宏光
投稿日：2011年 3月31日(木)
『奇蹟の生還へ導く人』　～極限状況のサードマン現象～
ジョン・ガイガー　伊豆原　訳　2010　新潮社　（￥1.800）
山、極地、海、空で遭遇した極限状況から奇跡的に生還した人たちが体験した幻視体験（サードマン現象＝　姿なき同伴者）は、多くの書で断片的に語られていますが、この書はサードマン現象の事例だけを集めた作品です。著者は数多くの体験者の話を聞き、膨大な資料にあたり、その一つ一つをつぶさに検証する。そして結論は、脳科学へと収束していくが、それでもなお謎は残ると結んでいる。

山では、シプトン　スマイス　ハストンブール　メスナー　山野井他、多くの事例が取り挙げられています。

死が差し迫っまったと思われる状況のなかで，何かが起きる。メスナーによれば「不可能からの出口へと導いてくれる」　サード　マン――が現れる。
誰か一緒にいたことは「孤独感を抑えるための心理的な力になった・・・・・・」
「身体は仲間を作る方法を生み出すのだ」と。

チョ・オユ南西壁をソロで攀じた山野井は次のような経験をしている。
「姿は見えなかったが　確かにクライマーと思える人間がいつも後ろを歩いていた。ラッセルやビバーク地を整理しているときも「なんでラッセルを代わってくれないんだ」とか「整地の手伝いをしてくれ」とか、自分でしゃべっていたのを覚えている。

ラルストン（米・27 歳）はクライミング中、落石に腕を挟まれ身動きが取れなくなる。
そのまま数日を過ごした彼は意を決して、上膊部に止血処置をしナイフで腕を引きちぎった。切り口をビニール袋で包み 18 メートルの壁を一本の腕で懸垂下降した。凄絶な苦闘の最中ずっと「誰か」がそばにいて励ましてくれた、とサードマンの存在を語っている

本と映画
投稿者：雨宮宏光
投稿日：2011 年 4 月 2 日(土)
腕を切り落として　生還したアーロン・ラルストンの本。
『奇蹟の 6 日間』アーロン・ラルストン
小学館
映画の予告編のページ
http://cia-film.blogspot.com/2010/08/127_25.html

http://matome.naver.jp/odai/2128504634509517001

映画『１８０°　South』
投稿者：越田和男
投稿日：2011 年 4 月 8 日(金)
“パタゴニア”の創始者イヴォン・シュイナードと“ノース・ファイス”の創始者ダグ・トンプキンスは１９６８年にパタゴニアに足を踏み入れた。大自然に圧倒された二人にとって人生の転機となったこの旅はフィルムに記録されており、このフィルムを偶然に目にした一人のアメリカ人が４０年後にこの旅を追体験を試みる、という設定。

ストーリー性には乏しく、一風変わった映画だったが、山、アウトドア、サーフィン、自然保護、そしてロード・ムービーにご興味のある向きにはお勧めする。映像は美しく、山登り場面も嘘くさくない。シュイナードとトンプキンの二人は本人が出演、それぞれのやり方で自然保護の実践を語っている。お二人ともなかなかいい顔です。

上映は、東京では渋谷の「ＵＮＰＬＩＮＫ・Ｘ」、関西は「宝塚シネ・ピピア」で上映中。

web ギャラリー　モンゴル
投稿者：米山悦朗
投稿日：2011 年 4 月 10 日(日)
甲南山岳会の皆様
２０１０年６月横浜で開いた個展に出品したモンゴルの写真を WEB 上で展示しています。
http://yoneyama3714.jpa-photo.com/
からはいるとすぐ見られます。ご一覧下さい。

センキチの本
投稿者：廣瀬健三
投稿日：2011 年 5 月 4 日(水)
平井吉夫兄、の訳した「オサマ．ビンラデイン　野望と実像」を読み直してます。一貫してこの人物を研究したドイツ人が記したもので、興味が尽きません。彼は時々意表をつく本も訳してます。他に「女は歳とともに美しくなる」著者は１９４２年、オーストリー生まれの女性ジャーナリスト。

斯様な類の新作にも期待！！

(無　　題)
投稿者：廣瀬健三
投稿日：2011年 5月 9日(月)
平井吉夫さんへのお返事です。

> ちょっとのぞいてください。

平井センキチと奥さんの佐々木和子さんの映像を見ました。担当のアナウンサーが言うが如くこれぞ「究極のボランテイア」と思います。これを立ち上げた鉄鋼会社OBのエンジニイアーの山田さんとは如何なる人物か知りませんが、"" 人生意気に感ずる"" と言うか（チョット的外れ？）、我々の世代が共通して抱いている心情かな。海外メデイアがこの度の災害時の日本人の行動を褒めていますが、このボランテイア活動を外国の人たちに広く知って貰いたいですね。

(無　　題)
投稿者：越田和男
投稿日：2011年 5月 9日(月)
平井吉夫さんへのお返事です。

原発暴発阻止行動プロジェクトの件、先日の朝の TV「モーニングバード」観てました。えらいおっさんがおるなあ、とその心意気にエールを送りたい気持ちです。後半に平井夫妻が登場したのは残念ながら一寸席をはずしていて見逃していましたが、なかなかいい夫婦に写ってますね。平井夫妻のかかわりで、このプロジェクトがぐっと身近なものになりました。

ただし、最先端の作業はそれなりに経験を積んだプロの世界で、現場のプライドもあります。現場が誰でも受け入れるかどうかのハードルはありますね。
私も何かしたい気持ちはあるのですが、実際最先端の作業現場では足手まといになるばかりで、役に立つような気はしません。出来ることと云えば、貧者の一灯程度の義援金か、福島産の野菜や、魚介などをばくばく食うことぐらいです。

民族学博物館
投稿者：大森雅宏
投稿日：2011年 5月 8日(日)
連休最後の日、午前中は天王寺の市立美術館、午後から越田さんご紹介の「ウメサオタダオ展」に出かけました。天王寺は歌川国芳、千里は民族学、ジャンルの違うのを同じ日に目にすると、アタマが混乱しました。若くないのは足だけではありません。

ところでウメサオタダオ展で、1940 年のカラフト踏査のメンバーに「中村成三・法学生」とありました。甲南の記録では同じ年の夏に千島に中村成三氏の名があります。多分同じ方なんでしょうね。

Re: 民族学博物館
投稿者：越田和男
投稿日：2011年 5月 9日(月)
大森雅宏さんへのお返事です。

ところでウメサオタダオ展で、1940 年のカラフト踏査のメンバーに「中村成三・法学生」とありました。甲南の記録では同じ年の夏に千島に中村成三氏の名があります

す。同じ方なんでしょうね。

故・中村成三氏は昭和14年（1939年）甲南卒、京大法学部へ進まれましたので、間違いありません。
一度東京の甲南山岳会に出て来られたことがあります。昭和50年前後で、たしか南里君が上京してキシュトワール遠征の報告をやってくれた時でした。学生時代のあだ名が「カポネ」。たしかにアル・カポネ的風貌の方でした。随分賑やかな方で、田口さんが「今日はガラの悪いのが出て来たね」とからかっておられたことなど思い出します。梅棹さんのカラフト遠征に参加されたことは甲南ではあまり知られていないです。

民族学博物館　関連

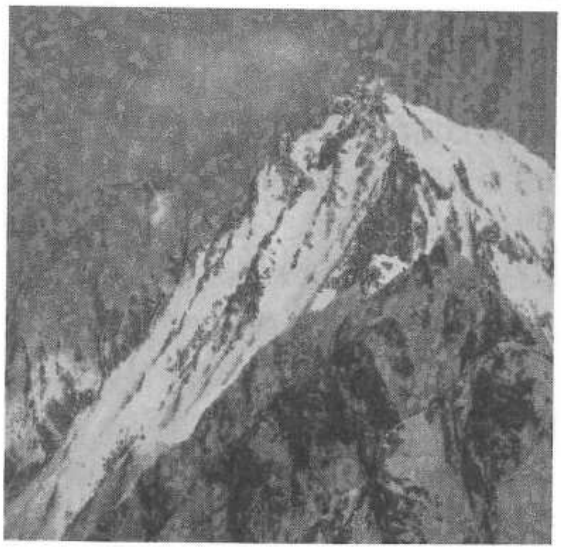
投稿者：廣瀬健三
投稿日：2011年 5月 9日
中村成三先輩参加の当該遠征の事を、亡きフクデンさん（福田泰次先輩）が日経の交遊抄欄に「甲南高校山岳部」との題で書かれてます。因みに甲南中／高の同級生の崎山理兄が此処の教授をしていた時（１９９８年）に日経の「知の冒険」と言うタイトルで日経記者の取材に応じてます。彼の事を言語人類学の鬼才と紹介してます。又、極めて若くして東大法学部の教授になった六本兄など賢いクラスメイトが沢山いた。同じ授業を受け乍ら、自分は一体何を学んでいたのかナア　と思う今日この頃です。

Re：岳

投稿者：山本恵昭
投稿日：2011年 5月 11日(水)
飯田様
これは元々マンガですから・・・。
もっとも、今の私では誰も背負わなくても垂直の壁なんぞ登れません。
60 度くらいでも垂直に感じることはありますが。

先日、西穂高岳西尾根から見えたジャンダルム飛騨尾根。
現役の頃、5月に岳沢ベースでジャン飛騨尾根に登ったことがあります。そのときは岩場にはほとんど雪がついておらず、ガレ尾根という印象でした。今回は雪がかなりついて、堂々として威厳がありました。

今年の総会で、たまたま福井先輩からジャン飛騨尾根初登攀のお話をお伺いしたところでしたので、特に印象に残りました。



岳
投稿者：飯田　進
投稿日：2011年 5月11日(水)
昨日近所の映画館で観てきました。アイガー以来です。勿論景色を見に行ったのですが、八方尾根からの景色や、穂高連峰の空撮は素晴らしかったです。内容にいちゃもん付けるのも大人げないですが、冒頭、クレバスに落ちた遭難者を、主人公の三歩が背負って垂直の壁を登るのですが、実際あのようなこと出来るのでしょうか。山本兄、貴兄出来ますか。
もっとも１２月１４日　クレバスに墜落す、などのセリフがでてくるので、日本の山ではないかもしれませんが。

Re：映画　"岳"
投稿者：山本恵昭
投稿日：2011年 5月11日(水)
「岳」、映画は見ていませんが、1年ほど前に山ガール志願の同僚が貸してくれた原作漫画を読みました。
遭難した遺体を背に「よく頑張った」が決めゼリフだったような。
現実離れしているけれど、山がらみの娯楽としては面白かったです。
2日や3日の山登りでなく、主人公の「何とか三歩」のようにどっぷり山生活をしてみたい気になりますね。
この気持ちは現実逃避でしょうか。

Re：映画　"岳"
投稿者：越田和男
投稿日：2011年 5月11日(水)

私も今日観てきました。良かったです。
私の採点：
山好き向きには＊＊＊＊
一般向きには＊＊＊

「剣岳一点の記一」の剣よりも今回の穂高の迫力が楽しめました。抜群のカメラワークだと思います。ジャンダルムあたりは見ているだけで恐ろしいです。遭難救助がテーマなのに明るいのも良かった。ただし、ストリーは単純、セリフがうそ臭く漫画チック。主演のお二人が美男美女過ぎる。こんな山男や山女はいないハズ(これは年寄のひがみ)。まー映画にすればこんなもんかと、おおめに見れば何ということなしに楽しめるのでは。

岳
投稿者：福田信三
投稿日：2011年 5月10日(火)
ほっともっとフィールド神戸の阪神：広島戦が雨で中止。代替に"岳"を観ました。

映画としては極めて平凡な出来と思います。時折出てくるアルプスの風景，
特に雪山が救いでした。
言ってみれば、長野県山岳救助隊のPR映画ですね。
・・と、私見ではありますが。

「会員の著作紹介」の更新
投稿者：越田和男
投稿日：2011年 5月27日(金)
甲南山岳会員の著作・翻訳出版の紹介」の改訂版が出来ました。新規3件の追加のほか既掲載分も加筆・訂正されています。紹介記事は相変わらずの拙文ですが、管理人

塩崎さんのご尽力で大変見やすくなっておりますので、お暇な時に是非ご覧になって下さい。

新刊の紹介

投稿者：雨宮宏光

投稿日：2011年 6月 5日(日)

『生きるために登ってきた』志水　哲也・著・みすず書房・￥2.625

引退した登山家の回顧的自叙伝ではない。「何かをこの世に残さなくてはという焦燥はどこから来るのだろう。自分がいつなくなってしまうかも分からないという不安。この気持ちは山を始めた16歳のときからずっとあったように思う」

16歳屋久島・宮の浦岳に登って山に魅せられ、17歳から山と谷に入り浸り。

34歳冬季剣大滝登攀の敗退を契機に写真に転向した男の記録。

初めての著作で「単なる山行でなく、どうやって登ったか、登って何を感じたか」を考えるため克明に日記を綴ったとある。その体験と思索が本書の随所で表現されている。

戦後・昭和最後の単独行者。遡行という日本的アルピニズムの到達者、志水哲也の青春の遍歴は他に例を見ない。

彼の経歴は甲南山岳通信64号・35頁を参照ください。

映画　「127時間」

投稿者：雨宮宏光

投稿日：2011年 6月 17日(金)

単独クライミング中落石に右腕をはさまれたまま5日間。意を決したクライマーは自ら腕を切断して生還した。

ユタ州　ブルージョン・キャニオンであった実話です。

6月18日封切り

シネリーブル神戸。TOHOシネマズ西宮　他

ナンガの映画

投稿者：平井吉夫

投稿日：2011年 6月 23日(木)

私が訳したﾗｲﾝﾎﾙﾄ･ﾒｽﾅｰ著「裸の山　ナンガ・パルバート」がドイツで映画化され、公開されたのは昨年1月。それが昨年秋の東京国際映画祭で上映されたときの放題は「断崖の二人」というチンケなもの。そのとき私は映画を観て、日本語字幕のデタラメに憤慨し、関係方面に文句をつけておきました。その映画が今年の8月6日から日本で一般公開されます。映画配給会社によれば東京のヒューマントラストシネマ有楽町、シネ・リーブル池袋を皮切りに全国順次公開だそうです。邦題はまたもや変わって「ヒマラヤ　運命の山」というつまらんもの。この一般公開にそなえて私は字幕の監修をしました。マスコミ向けの試写会で観たところ、私の字幕直しはすべて入れられており、安心しています。

R.メスナー／ｐａｕｌポウルｐｒｅｕｓｓ

投稿者：廣瀬健三

投稿日：2011年 7月 28日(木)

平井仙吉がメスナーに貰った本「ｐａｕｌ　ｐｒｅｕｓｓの評伝」は読みたい物です。訳本

を期待！インターネット検索すると当該

ｐａｕｌがオ-ストリ-の登山家なることが分かりました。

(無　題)

投稿者：平井吉夫

投稿日：2011年 7月27日(水)

ガチャさん。日経新聞の記事に私は関与していません。メスナーは7月の5、6、7日に来日しました。6日に東京のドイツ文化会館で映画「ヒマラヤ　運命に山」の特別試写会があり、そこにメスナーが顔を出して短いスピーチをやり、次の予定地にそそくさと向かいました。えらく忙しい日程のようでした。そのときに fuer Yoshio とサインした著書（Paul Preuss の評伝）をもらいました。あっという間の出会いでした。

ラインホルト・メスナーの記事

投稿者：田邉　潤

投稿日：2011年 7月26日(火)

本日の日本経済新聞朝刊の最後40ページにラインホルト・メスナーの「登頂に命を懸けて」という記事が掲載されています。彼の8000メートル峰14座の完登や最近に至る山登りへの考えかた等、メスナー個人の登山史とでもいうべき文章です。訳者は仙吉ですか?

Re: ラインホルト・メスナーの記事

投稿者：越田和男

投稿日：2011年 7月26日(火)

田邉　潤さんへのお返事です。

本の訳者はセンキチ（平井吉夫）です。

邦題『裸の山・ナッガパルバート』　山と渓谷社刊　2010年　1800円

本ＨＰの「甲南山岳会員の著作・訳書紹介」を是非開いてご覧ください。

なお、映画「ヒマラヤ・運命の山」も日本語字幕は平井吉夫の監修です。

ラインホルト・メスナー

投稿者：田邉　潤

投稿日：2011年 7月27日(水)

越田さんへ

仙吉の訳書「裸の山・・・」はこの3月のドイツ旅行の往復の機中で読み切っております。

今回の新聞記事が仙吉の訳かと問うたのです。

新聞にはメスナーの顔写真も出ておりましたが、この写真を見ればナンガパルバートで兄弟共に下山してながら、弟を待つこともなく「自身が生き延びる」という意志の強さが読み取れるもので、本を読んでいるときに感じた「なぜ弟を待ってやらないのか?」という私個人の疑問に納得でした。私にはとてもできない本能的意志ですし、一人前のように思っていても、メスナーに比べればヒヨコ以下であることを実感しました。

8月6日から上映の映画が、岐阜の田舎でも見れるのかどうか判りませんが、名古屋まで出てでも見ようと考えています。

9月30日から11月1日まで、オーストリア全周と、留学時代以来の親友との友情50 周年の祝いをする旅に出かける予定です。体調はいたって良好ですが、血糖値は一進一退です。

目次

＝報告＝

２０１０年度　甲南高校山岳部　年間活動報告

■　２０１０年度　山岳部部員・顧問
主将:若宮　康佑（高2）　　主務:織田　直宏（高2）
原　佑也(高2)・水野　正嵩(高2)・森本　翔太郎(高2)
顧問:南里章二、神戸謙司

第１回	日帰り	六甲山　芦屋ロックガーデン	４月
第２回	小屋泊	氷ノ山　東尾根から神大ヒュッテ	５月
第３回	夏合宿	富士山　吉田口コース	８月
第４回	日帰り	六甲登山	１１月
第５回	日帰り	滋賀比良山系　朽木より武奈ガ岳	３月

■　２０１０年度　山行一覧

２０１０年度第２回　５月山氷ノ山山行報告

１．はじめに

兵庫県の氷ノ山(1,510m)で、5月3日(月)から4日(火)にかけての登山も、好天に恵まれ、おかげさまで無事に下山できました。

今回の氷ノ山登山は、初日、氷ノ山国際スキー場から、東尾根、神大ヒュッテ(千本杉ヒュッテ)に宿泊しました。

神大ヒュッテの利用に際しては、神戸大学山岳部の平井一正先生、山形裕士先生、神戸大学学務部の仲満様、神戸大学山岳会の土山様にたいへんお世話になりました。部員一同たいへん感謝しています。

ヒュッテでは、夕食の牛丼と海草のスープを皆で作りました。ご飯も芯が残らずに上手においしく出来上がりました。なによりも、小屋近くの水場のお水のおいしいこと！部員たちは何度も水場に通い、炊事や洗顔を楽しみました。

一段落の後、まきストーブに火を起こして、ストーブの上で豆餅を焼いて、楽しい一夜となりました。(まき木4本を使わせていただきました。持参したカセットコンロ用のガスカートリッジを2本置いてきました)

翌日は氷ノ山に登頂し、氷ノ山越えより、仙谷を下り、山桜と新緑の中に映える不動の滝、布滝を眺めつつ親水公園に下山しました。

２．参加メンバー

H2D 若宮　康佑　H2D 織田　直宏　H2E 森本翔太郎　H2D 原　侑也　H2E 水野正嵩
付き添い教員　神戸謙司

３．行動報告

日付	行動概要	行動時間
5月3日(月)	甲南高校集合(8:00) 氷ノ山国際スキー場東尾根登山口(14:00) …千本杉ヒュッテ(16:00) 水汲み・炊事・牛丼食べ終わり(18:20)	6時間 徒歩2時間
5月4日(火)	起床(6:00) 炊事・ラーメン食べ終わり(7:00) 整理整頓・小屋の掃除・出発(8:00) 氷ノ山頂上(8:20)…頂上出発(8:50) …氷ノ山越えのコル出発(9:50) …赤岩山右俣の谷(10:30)…不動の滝(11:05) …親水公園(11:30)・出発(12:20) JR 八鹿駅(13:40)-JR 芦屋(18:00)	徒歩6時間

４．費用(①＋②＋③＋④)の総計 7,740 円

①交通費　6, 940 円　②宿泊費　0円

③食料・燃料費 800 円

	朝	昼	晩	1日の食費
5月3日(月)		各自	牛丼・汁・紅茶	400円
5月4日(火)	わかめと餅ラーメン・茶	レーション各自	各自	200円

燃料代200円

レーション(羊羹・クラッカー・ゼリー・チョコ・飴・サラミ・パンケーキなど)

④その他　0 円

⑤備考：自宅から学校までの往復費用、5月3日の昼食弁当・5月4日の行動食を各自用意

2010年度　第３回富士山夏山合宿報告

１．はじめに

メンバーの今年度当初の念願だった富士山(3,775m)、8月24日(火)から26日(木)にかけての登山も、好天に恵まれ無事に登頂、下山できました。初日より、25日、26日は連日の好天に恵まれて予定通り富士山七合目の富士一館に泊まり、翌日午前1時より、ヘッドランプをともして登り始め、ご来光を山頂で迎えることが出来ました。連日の長時間行動、睡眠不足にもかかわらず、皆たいへん良く頑張りました。OBの神澤くん、山内くん、長宅くんとも合流し、楽しいひと時でした。

２．参加メンバー

H2D 若宮　康佑　H2D 織田　直宏　H2E 森本翔太郎　H2D 原　侑也　H2E 水野正嵩

付き添い教員　神戸謙司

３．行動報告

日付	行動概要	行動時間
8月24日(火)	JR新大阪正面出口鉄道警察前集合(22:00)	
8月25日(水)	富士急ランド前(7:00)タクシー利用 馬帰し(10:00)…七合目小屋 「富士一館」(15:00)	徒歩5時間
8月26日(木)	七合目小屋(2:00)…富士山頂(5:00)… お鉢周り…富士山頂(7:00)… 五合目バス停(11:00)バス利用 河口湖バス停(12:00)昼食・入浴 河口湖バス停(15:30) JR大阪駅到着予定(22:30)	徒歩6時間

４．合宿費用見積もり(①＋②＋③＋④)の総計 25,000 円

①交通費見積もり　17, 000 円　②宿泊費見積もり　8,000 円

③食料・燃料費見積もり 0 円

	朝	昼	晩	1日の食費
8月24日(火)			各自	
8月25日(水)	各自	レーション各自	小屋の夕食	
8月26日(木)	小屋の弁当	レーション各自	各自	

レーション(羊羹・クラッカー・ゼリー・チョコ・飴・サラミ・パンケーキなど)

④その他見積もり　0 円

⑤備考：自宅から新大阪駅までの往復費用、8月25日の朝食費用あるいは弁当・レーション(行動食)と8月26日のレーション(行動食)を各自用意のこと

2010年度　第5回　春山武奈ガ岳山行報告

1．はじめに

東日本(東北関東)大震災にて、被災された皆様方に心よりお見舞いを申し上げます。3月11日(金)本校では期末試験の答案返却日に当たっており、終礼と清掃活動を終えて、教室から教員室に戻ると、テレビの画面には信じられない光景が映し出されておりました。春山合宿として、八ヶ岳方面を予定しておりましたが、長野県にても余震が相次ぎ、電力不足や物品不足など、首都圏の混乱を憂慮し、中部方面への合宿は中止いたしました。

3月31日(木)に、滋賀県の武奈ケ兵(1,214m)に日帰り登山を行いました。部長の若宮君の計画で、比良山系で一番高い山、皆で登ってみたい山ということで、坊村の地主神社から御殿山をたどるコースで、スノウハイクを満喫しました。

地主神社境内を抜けて、北東方面に 800m 付近まで、急登が続く。杉木立の中、木漏れ日もあり明るい。800m を越えると、残雪が現れ、御殿山、ワサビ峠、武奈ケ岳へ続く、西南稜はまだ、一面の雪に覆われていた。スパッツとアイゼンを装着し、ダブルストックでスノウハイクが始まる。風もさほどなく、好天に恵まれた。1100m 程の御殿山に登るとパノラマが拡がり、南に振り返ると昨年春に登った蓬莱山、火打山にゴンドラリフト駅を臨み、右手東にはびわ湖が広がる。稜線をたどって武奈ケ岳に到着し、レーションや弁当を戴く。頂上からは比良山スキー場の跡地の良い斜面が見渡せ、スキーで滑りたくなる。一昨年閉鎖された比良望武子屋にも立ち寄ってみたかったのだが、今回は止めにした。西南稜は誠によい傾斜であり、尻制動で下山した。

2．参加メンバー

H2D 若宮　康佑　H2D 織田　直宏　H2E 森本翔太郎　H2E 水野正嵩

付き添い教員　神戸謙司

3．行動報告

日付	行動概要	行動時間
3月31日(木) 晴れ	坊村地主神社(8:00)…ワサビ峠(10:30)… 武奈ケ岳(11:20-12:00)…地主神社(14:00)	徒歩5時間

甲南中高山岳部顧問:神戸　謙司(文責)
甲南高校山岳部
659－0096　兵庫県芦屋市山手町31－3
電話:(0797)31－0551
FAX:(0797)31－7458

目次

＝報告＝

2010年　秋の集会

場所：木曾文化公園内宿泊施設 「駒王」
　　長野県木曽郡日義村 木曾駒高原
期間：　2010年(平成22年)10月10日(日)～11日(月)
　　10月10日(日曜日)　午後3時～5時　受　付
　　午後6時～　夕食・懇親会
　　❒10月11日(月曜日)　午前7時30分～朝食
　　午前8時30分～記念撮影　部歌斉唱 【山の歌】

参加者名簿

番号	氏　名	卒業/学部	番号	氏　名	卒業/学部
①	赤松 二郎	旧制14理	⑪	武田 雄三	大39年/経
②	赤松 奥様		⑫	安井 正	大40年/経
③	小原 耕治	大31年/経	⑬	奥山 正紀	大40年/法
④	砂川 彰雄	大32年/経	⑭	伊丹 徳行	大40年/法
⑤	雨宮 宏光	大33年/経	⑮	塩崎 将美	大41年/経
⑥	鈴木 頼正	大33年/経	⑯	石原 浩二	大44年/理
⑦	田辺 潤	大34年/経	⑰	山本 真博	大48年/理
⑧	越田 和男	大36年/理	⑱	井上 知三	大48年/文
⑨	二谷 和成	大38年/経	⑲	松山 弘和	大61年/理
⑩	村上 与利一	大39年/営	⑳	川村 静治	新高40年

目次

＝報告＝

2011年　春の総会

場所：　甲南大学 平生記念館 中ﾎｰﾙ
日時：　2011年 【平成23年】 4月23日（土曜日）

平成２３年度 山岳会総会 次第

司会　　安井 正

1．会長挨拶　　武田 雄三

2．平成２２年度 事業報告
　1）慰霊祭　　石原 浩二
　2）木曽福島 集会　　井上 知三
　3）山嶽寮　　武田 雄三
　4）大学山岳部の現状　　武田 雄三
　5）中高山岳部の現状　　神戸 謙司
　6）会計報告　　山本 恵昭

3．平成２３年度 事業予定
　1）慰霊祭　　石原 浩二
　2）木曽福島 集会　　井上 知三
　3）山嶽寮発行　　武田 雄三

4．検討並びに報告事項
　1）学園９０周年記念事業募金への寄付　　武田 雄三
　2）山岳会員名簿取扱　　同

総 会 終 了

5．懇親会　　司会　武田 雄三
　1）乾杯
　2）会食
　3）部歌「山の歌」斉唱

閉　会

総会出席者【予定】名簿

No.	氏名	卒業年度
1	福井 實	旧制 17 年理
2	小原 耕治	大 31 年経
3	雨宮 宏光	大 33 年経
4	鈴木 賴正	大 33 年経
5	田辺 潤	大 34 年経
6	鳥居 威男	大 35 年経
7	芦田 匡平	大 35 年理
8	藤安 賢一	大 36 年経
9	二谷 和成	大 38 年経
10	武田 雄三	大 39 年経
11	安井 正	大 40 年経
12	伊丹 徳行	大 40 年法
13	柏 敏明	大 41 年経
14	浪川 純吉	大 42 年営
15	上本 武夫	大 42 年法
16	國分 廣昭	大 43 年経
17	石原 浩二	大 44 年理
18	南里 章二	大 45 年理
19	井上 知三	大 48 年文
20	平井 幹男	大 50 年文
21	高橋 けい子	大 50 年文
22	山本 恵昭	大 56 年理

平成22年度 会計報告

平成 23 年 3 月 31 日

【収支決算表】

【貸借対照表】

上記のとおり報告します
会計担当 山本恵昭

目次

＝報告＝

2011年　慰霊祭

❑ 慰霊祭

月　　日：　4月24日【日曜日】
集合時刻：　午前１０時
集合場所：　阪急芦屋川駅　北側広場
そ の 他：　少雨中止

❑ 本年度物故者の方々

佐野 源一　【旧制10理】　　山本 三郎【名誉会員】

國府 雄次郎【旧制12理】　　川村 三郎【旧制14理】

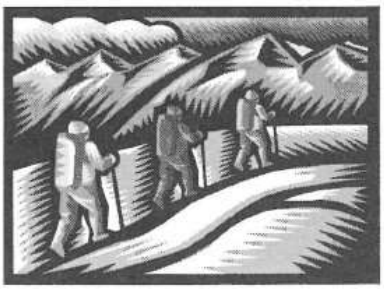
❑ 参加予定のご遺族の方々

横山 嘉壽子 様

❑ 甲南中高山岳部より

❑ 参加者

	氏　名	卒業/学部		氏　名	卒業/学部
1	鈴木 頼正	大33年経	9	國分 廣昭	大43年経
2	田辺 潤	大34年経	10	石原 浩二	大44年理
3	鳥居 威男	大35年経	11	南里 章二	大45年理
4	二谷 和成	大38年経	12	井上 知三	大48年文
5	村上 与利一	大39年営	13	平井 幹男	大50年文
6	安井 正	大40年経	14	渋谷 一正	大51年営
7	伊丹 徳行	大40年法	15	大森 雅宏	大53年文
8	浪川 純吉	大42年営	16	山本 恵昭	大56年理
			17	松成 健	大H8文



目次

編集後記

東日本大震災の巨大津波をテレビで見た多くの外国人は、”tsunami”の語源が日本語であると知ったとのことです。何故この惨劇が日本でと思いますが、今となってはこれが世界安全への良い見本となることを希望します。ただ、東京電力㈱　福島第一原子力発電所の事故は余分でした。まさか”genpatsu”が国際公用語とはなるまいと思いますが、世界中の原発撲滅へのきっかけとなることでしょう。2011年は日本の真の力を試された年かもしれません。編集後記とは言えない書き出しとなりましたが、編集にとりかかるたびに考えてしまいます。このせいでは無いと思いますが原稿の集まりが少なかったです。毎年の発刊に無理が出たのかもしれません。

事務局井上さんが作ってくださる会員短信のページ、塩崎さんが管理しておられるホームページからの転載も今や無くてはならない記事ねたとなりました。お二人にお礼申し上げます。

最後に、次号６７号に向けての原稿をよろしくお願い致します。

原稿送付先：福田信三

TEL.　　Email:

山 嶽 寮　第66号
甲南山岳会
神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学内
2011年（平成23年）10月
編集人：福田信三　　印刷：カツヤマ印刷

目次